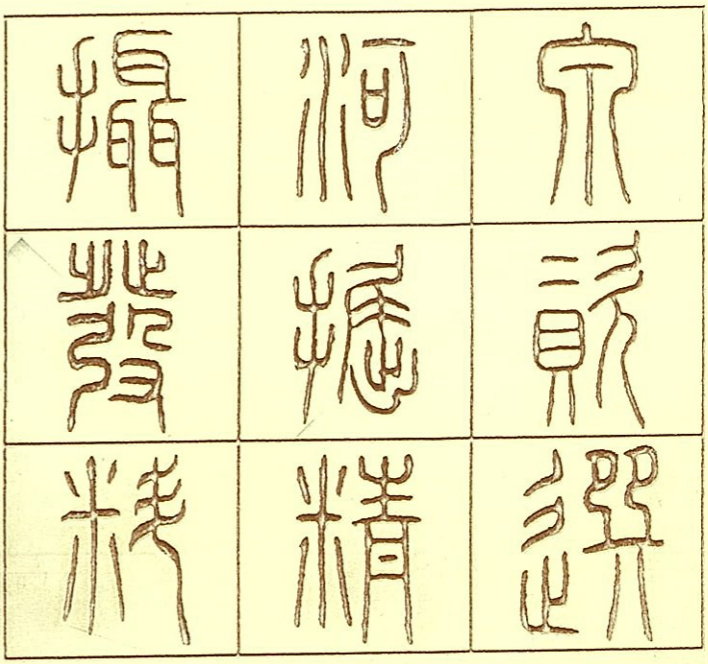


財団法人　大阪府文化財調査研究センター

摂河泉

発掘資料精選

(財)大阪府文化財調査研究センター
蔵書
第　号

財団法人
大阪府文化財調査研究センター

序

本年４月１日、財団法人大阪文化財センターと財団法人大阪府埋蔵文化財協会を統合して財団法人大阪府文化財調査研究センターが発足した。

前者が設立されたのは1972年11月27日のことであり、後者のそれは1985年４月１日であった。以後、二つの財団は多くの発掘調査を行ってきたが、出土した考古資料は膨大な量に達している。それらの中には学界の注目を集めたものも少なくない。近畿自動車道建設に関連して発掘した、河内の低湿地遺跡から出土した弥生時代の木製品その他の、極めて遺存状態の良好な資料群や、和泉陶邑古窯址群内の大庭寺窯跡の発掘調査で出土した、最古式の須恵器群などはその最たるものである。しかしこれら以外にも数多くの重要資料が含まれており、それらの資料を各地の展覧会に出品する機会は年間約20件３～400点に達し、写真の貸出も毎年50件200点以上におよんでいる。

二つの法人では発掘調査の成果を、現地見学会や速報展などで速やかに市民に報告し、また本書巻末に掲載した報告書を通して学界にも普及してきたところである。その結果、報告書のページは膨大な数に達しており、それぞれの報告書を検索するには多大の時間を必要とする。

このような時、二つの財団の統合を機に何か記念の出版物を刊行しようとの話が持ち上がった。いろいろなものが候補に上がったが、二つの財団が行ってきた発掘調査の成果を概観し、また第三者による成果利用の便をはかるものとして、最終的に本書を刊行することに決定した。

㈶大阪文化財センターは1981年に類書の『河内平野を掘る』を刊行している。この時の資料は河内平野に所在する低湿地遺跡出土のものが大半であった。その後、二つの財団は大阪府の南北の地域においても多くの遺跡を発掘調査してきた。それらの中から重要資料を選び掲載した本書を、『摂河泉発掘資料精選』とした所以である。

本書を二つの財団統合のささやかな記念碑として、多くの人々に御高覧、御活用いただければ幸いである。

１９９５年７月

財団法人　大阪府文化財調査研究センター
理事長　坪　井　清　足

(財)大阪府文化財調査研究センター
蔵書
第　号

あ　い　さ　つ

財団法人大阪府文化財調査研究センターは、本年４月１日、昭和４７年に設立された財団法人大阪文化財センターと、昭和６０年に設立された財団法人大阪府埋蔵文化財協会が統合し、発足されたものであります。

財団法人大阪文化財センターは設立以来、池上遺跡の整理事業、近畿自動車道（天理・吹田線）建設や府下公共事業にともなう埋蔵文化財調査のみならず、文化財に関する図書・資料の収集・文化財講座・見学会等の普及啓発事業を積極的に実施されてきました。また、財団法人大阪府埋蔵文化財協会は、主に関西国際空港建設に伴う公共事業に関する文化財調査を担当され、平成６年９月の開港に大きな役割を果たされました。

大阪府教育委員会では、文化財行政における今日の情勢に鑑み、府下の文化財の調査・研究・保存・活用等の機能を、より強化する目的で両法人の統合をお願いし、発足にいたったものであります。

近年の文化財の調査研究は、広範な学問分野の広がり、文化財に関する情報量の拡大に伴い、多くの府民から文化財に大きな関心が寄せられており、ますます高度な文化財情報の発進が求められております。

このたび、財団法人大阪府文化財調査研究センターが統合の記念として、これまで二法人が大阪府下各地で実施されてきた、多くの遺跡の発掘調査成果をとりまとめ、代表的な発掘調査資料を公表されることは、時宜にあった大いに意義のあるものと思慮されるものであります。これらの資料は、両法人が多くの時間と労力を投入された成果であり、学界はじめ各方面においても高い評価をうけるものと確信しております。

新法人発足にあたり、このような資料集の刊行を企画されたことは、従来から蓄積されてきた二法人の機能を最大限に生かされたもので、有意義な刊行物と考えられますので、多くの人々の利用に供され、末長く活用されることを願っております。

最後に、財団法人大阪府文化財調査研究センターが、文化財の調査・研究など多方面において、新しい飛躍を遂げられることを祈念いたします。

平成７年７月

大阪府教育委員会
教育長　谷　口　文　夫

目　次

I部　㈶大阪文化財センター・㈶大阪府埋蔵文化財協会の調査

考古学と鋼矢板　土面・最古の須恵器窯・銅鐸…… 1
旧石器時代の調査…… 2
縄文時代の調査…… 2
弥生時代の調査…… 4
古墳時代の調査…… 7
古代の調査……10
中世の調査……12
近世の調査……14
遺跡分布図……16

II部　発掘資料精選

旧石器時代……18
縄文時代……21
弥生時代……36
古墳時代……83
古代…… 119
中世…… 134
近世以降…… 142
文献目録…… 150
遺跡索引…… 155
INDEX(英文目録)…… 159

例　言

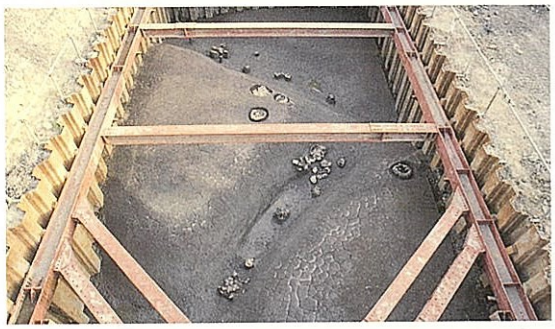
・本書刊行は、1995年4月に㈶大阪文化財センターと㈶大阪府埋蔵文化財協会を統合し、㈶大阪府文化財調査研究センターが発足した記念事業のひとつとしておこなわれたものである。
・本書は、両旧財団の発掘調査の概要をI部に、代表的な出土品の紹介をII部におさめた。
　なお、II部には、新財団の調査による最新の資料も一部含めている。
・執筆、図版準備、編集等の分担は末尾に示した。

Ⅰ部　㈶大阪文化財センター・㈶大阪府埋蔵文化財協会の調査

考古学と鋼矢板

1. 近畿自動車道建設に伴う調査（城山遺跡）

㈶大阪文化財センターは、1972年の設立から約1年半ほど、府下の大規模開発に伴う埋蔵文化財の分布調査、試掘調査を仕事とした時期があった。時あたかもオイルショックにあたり、大手、中小をとわず民間ディベロッパーが開発から一気に撤退した。このあおりを受けて低湿地の発掘調査が仕事となった。近畿自動車道天理吹田線の建設に伴う調査（1）は古大和川が形成した沖積地、大阪平野を南北に縦断的に調査する大規模なもので、必然的に沖積平野



2. 鋼矢板に囲まれての方形周溝墓の調査（城山遺跡・弥生中期）

の考古学調査の新機軸を求められるものであった。そこで登場したのが鋼矢板土留支保工であった。1973・74年の試掘からこの土木工法を採用し、1985年度に完了するまでの10数年間、センターの調査は鋼矢板と仲良くお付き合いをした（2）。

新家、西岩田、瓜生堂、巨摩、若江北、山賀、美園、佐堂、久宝寺、亀井北、亀井、城山、長原と鋼矢板とともに調査成果をあげ、沖積地の考古学に貢献できたと自負している。　（中西）

土面・最古の須恵器窯・銅鐸

㈶大阪府埋蔵文化財協会の設立当初に実施した、和泉市仏並遺跡は近畿地域では有数の縄文集落遺跡であった（3）。多数の土器棺墓や竪穴住居、関東地方や瀬戸内地方と関連をもつ土器のほかに、西日本では初めての土製仮面が2点発見され大きな反響を呼んだ。発掘開始から報告書の作成まで9箇月たらずの時間におわれた事業であったが、その後の報告書作成の原点になった調査である。土面は今なお頻繁に全国各地の博物館めぐりをしている。

3. 縄文集落の調査（仏並遺跡・縄文中～後期）

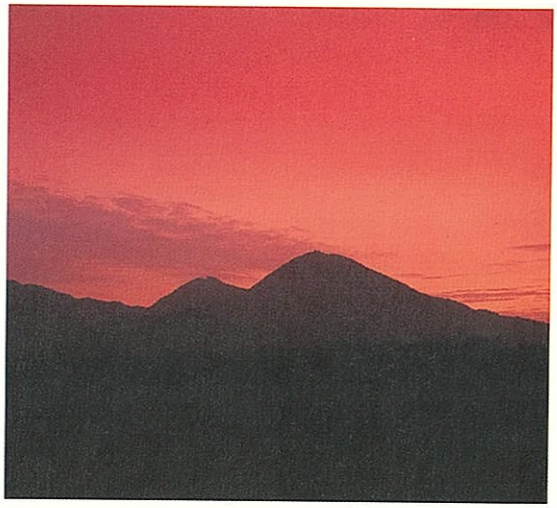
6年間にわたる堺市大庭寺遺跡の調査は、初期須恵器が発見された当初から注目を集め、ついに最古の窯跡の発見にいたった。灰原資料が良好に残っていたこともあり、韓国の研究者の来訪も後を絶たない。

銅鐸をはじめ、種々木製品や良好な土師器が大量に発見された堺市下田遺跡も注目をあびている。とくに赤銅色に輝く銅鐸の取り上げ作業は、保存のために時間をかけられないこともあって、厳寒の深夜にまでおよんだ（4）。　（藤田）

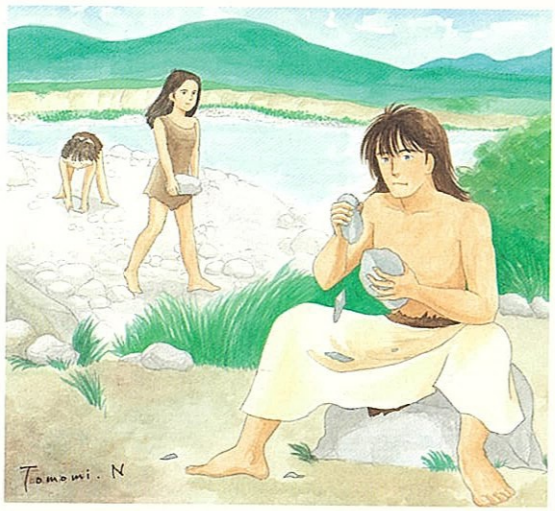
4. 埋納銅鐸の調査（下田遺跡・弥生中～後期）

旧石器時代の調査……水なし大阪湾の時代

大阪府下の旧石器は1957年国府遺跡の発掘調査を嚆矢とするが、1993年の翠鳥園遺跡も含め300箇所以上の遺跡がみつかっている。洪積段丘上に当時の人々の足跡が残っており、後世の遺構や包含層に混入してナイフ形石器や有舌尖頭器が出土する例がよくみられる。両旧財団が調査をしたなかではII部に掲載した遺跡のほかに、長原、日置荘、福田、西浦橋、野々井、平井、山ノ内、黒石遺跡等、20以上の遺跡からナイフ形石器、有舌尖頭器、石核、翼状剥片等が出土している。このうち原位置から出土しているのは城山遺跡のみで、太井遺跡の旧石器包含層は段丘礫層直上の二次堆積層であり土器の混入のないことから旧石器時代とみている。城山遺跡の白色粘土上面は長原地山上面に対応する。長原遺跡では標高約８ｍであるが、北へ傾斜した城山遺跡では4.3ｍになる。その北端部では白色粘土は検出されず、標高3.6mでの縄文後期土器片の出土から、段丘が急降下する段丘崖の外縁部にあたることがわかった。そこで磨滅のない横長剥片石核等が出土し、後期旧石器時代の活動範囲がこの周辺までのびているといえる。以北では亀井遺跡で石核、若江北遺跡で翼状剥片が出土しているが、ともに磨耗が著しく、かなり流されてきたことがうかがえる。　（石神）



5. サヌカイト原産地・二上山



6. 石器製作想像図

縄文時代の調査……川辺のムラ・台地のムラ

両旧財団が発掘した縄文時代の資料は、全体に占める割合は大きいとはいえないが、20年をこえる調査の蓄積によってかなりの量に達している。時期的にみても、旧石器時代から縄文時代に移行する頃にみられる有舌尖頭器から、最初の弥生土器と共存する突帯文土器まで、縄文時代の各時期の遺物がある。そのうち代表的な遺物は、本書のII部に掲載されているので参照されたい。ここでは、とくに多くの遺構や遺物が良好な状態で検出された小阪遺跡と仏並遺跡を紹介する。

小阪遺跡（７・９）は堺市の泉北ニュータウンの

7. 土器片敷遺構（小阪遺跡・縄文後期）

8.竪穴住居（仏並遺跡・縄文後期）

9.遺物出土状況（小阪遺跡・縄文後期）

10.埋甕（仏並遺跡・縄文中～後期）

北縁を流れる陶器川の谷の入り口にある。陶器川の流路は谷のなかで何回も変化しており、縄文時代の流路も多数検出された。そのなかに縄文土器や石器が含まれている。縄文早期から晩期の遺物があるが、とくに多いのは中期末から後期初頭および後期前半である。中期末から後期初頭の河川の周辺には、土器片敷遺構、土坑、落込み等があり居住域とみられるが、住居の検出にはいたらなかった。後期前半にも河川の周辺に土器群があり、とくに北白川上層式２～３期の遺物集中区があった。このように、小阪遺跡では、谷の入り口の川岸における人間集団の活動の一端が明らかになった。

仏並遺跡（８・９）は和泉市仏並町にあり、和泉山脈北麓の横山谷という小盆地のなかの、川に臨む台地に立地している。断続的ながら早期末から晩期末までの遺物が出土した。とくに縄文中期末から後期前半には集落が営まれ、３次にわたる調査により竪穴住居７棟、掘立柱建物１棟、数基の埋甕や集石遺構、多数の土坑が検出された。土坑の一部は土壙墓であった可能性がある。近畿地方でもいまだ希少な縄文時代集落の一例として貴重な存在である。

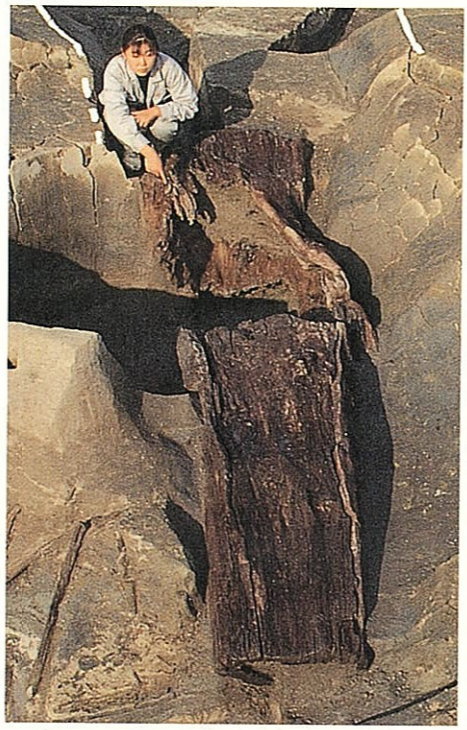
（岩崎）

弥生時代の調査…低湿地への展開―水田・拠点集落―

11. 水路と水田（池島・福万寺遺跡・弥生後期）

12. 初期水田（志紀遺跡・弥生前期）

13. 大規模な堰（池島・福万寺遺跡・弥生後期）



14. 水田への導水管（池島・福万寺遺跡・弥生後期）

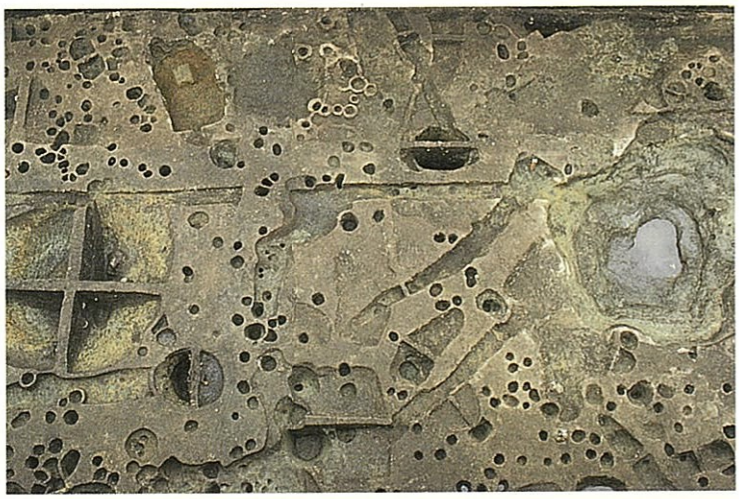
弥生時代の特質は、なんといっても水稲農耕の本格的開始にある。そのため、弥生時代の遺跡は平野部の低湿地に立地することが多い。両旧財団はこれまでに河内（かわち）平野の低湿地遺跡の大規模な調査をおこない、良好な水田遺構や大規模拠点集落の姿を露わにしてきた。

水田遺構の調査　近年調査されている東大阪・八尾市池島（いけしま）・福万寺（ふくまんじ）遺跡と八尾市志紀（しき）遺跡では、弥生時代の水田遺構が広範囲に検出されている。いずれの調査区でも、地形に応じて小さな区画の水田（11・12）が作られていることがわかっており、この時代の一般的な水田風景の典型像を描きだす調査となっている。

特に、池島・福万寺遺跡では後期に大規模に水田配置の改変がおこなわれ、より効率的な水田農耕へと技術進歩していることも明らかになっている。同遺跡で検出された河川の水位を調節するための堰（せき）（13）や水田へ水を汲み上げるための木製導水管（14）の存在は、そういった技術進歩への弥生人のあくなき試みの実態を示している。

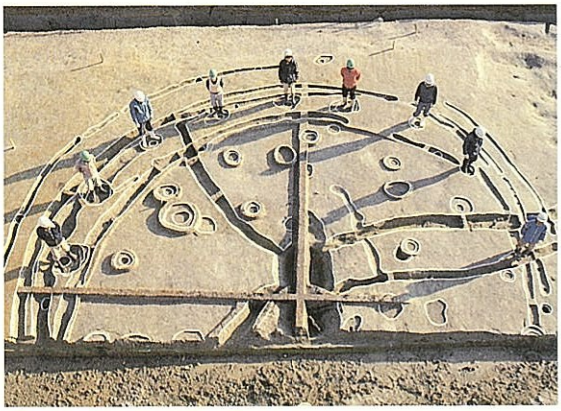
拠点集落の実態　集落遺跡では、八尾市亀井遺跡、大阪市城山遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡、同市巨摩遺

16. 集落の内外をわける大溝群（亀井遺跡・弥生中期）



15. 集住を示す密集した柱穴や井戸（亀井遺跡・弥生中期）

17. 火災にあった竪穴住居（城山遺跡・弥生後期）



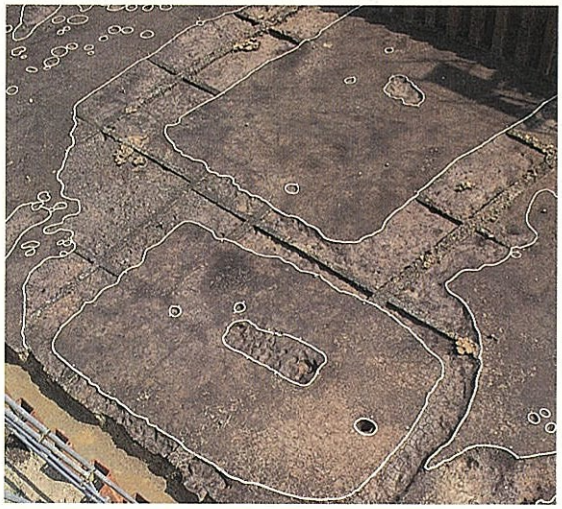
19. 大形の竪穴住居（野々井遺跡・弥生中期）

18. 火災住居から発見された土器（城山遺跡・弥生後期）

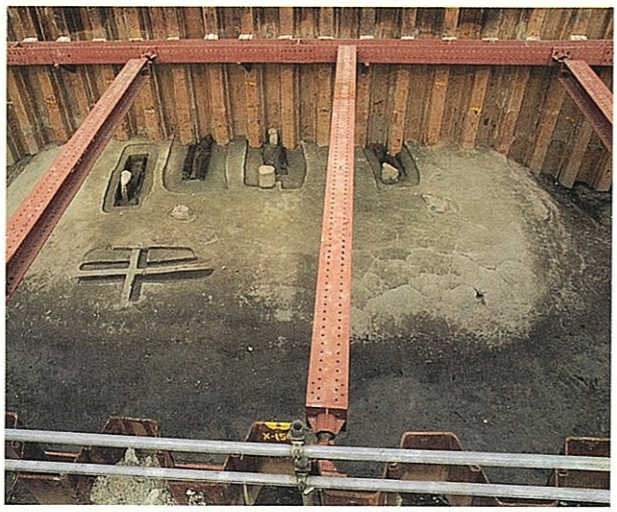
跡、同市若江北遺跡など著名な拠点集落の調査がおこなわれてきた。これらの調査成果は、多量の遺物、柱穴や井戸といった生活遺構の密集（15）など、大きな人口を抱えた集住（しゅうじゅう）の状況が、弥生中期を中心に検出されたことである。また、城山遺跡では火災にあった竪穴住居が3棟検出され、そのなかには生活時そのままに多量の土器などの生活具が残されていた（17・18）。

集落外部に広がる方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）群なども、城山遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩遺跡などで多数検出された（2・21）。これによって近畿地方の墓制において方形周溝墓が普遍的なことが明らかになり、当時の社会構成のを知るための基本資料となっている。また、集落の内外をわける大溝群（16）が亀井遺跡で検出され、低地に展開された大集落の構造や形態の具体像もこれらの調査で明らかになった。

こういった拠点集落では、日常生活用の土器や石器に加え、祭祀（さいし）や儀礼（ぎれい）にかかわる彩色を施した土器（22～24）、青銅器やその生産にかかわる鋳型（いがた）など多彩な遺物が出土している。近年、拠点集落については農耕村落であると同時に都市的機能ももつ可能性が指摘されるが、そのような新しい議論の基礎資



20. 方形周溝墓（東奈良遺跡・弥生中期）



21. 方形周溝墓（巨摩遺跡・弥生後期）

22. 朱を精製した土器
（巨摩遺跡・弥生中期）

23. 赤彩された壺
（亀井北遺跡・弥生後期）

25. 埋納された銅鐸（下田遺跡・弥生中～後期）

24. 赤彩された壺
（山賀遺跡・弥生前期）

料としてこれらの調査成果は貴重なものである。

また、低湿地遺跡では動植物遺体や木製品などが良好な遺存状態で出土する。特に河内平野の弥生時代の木製品の出土量は全国的にみても圧倒的なものである。復原が容易でない木製生活用具の豊富な存在は、弥生文化の具体像を把握するうえでも重要である。

摂津（せっつ）・和泉（いずみ）地方の弥生遺跡　むろん、弥生遺跡は河内平野のみにあるのではない。和泉地方や摂津地方の弥生遺跡も精力的に調査されている。堺市野々井遺跡では直径約10mの弥生中期の大形円形住居（19）が検出され、同市下田遺跡では銅鐸が埋納された状態（25）で出土した。また、銅鐸鋳型の出土で有名な茨木市東奈良遺跡では、弥生中期の方形周溝墓群（20）が検出されている。

今後は、既往の河内平野の調査成果と摂津地域や和泉地域の弥生遺跡の調査を関連づけることが必要となってきた。多様であると同時に共通項も多い個々の調査成果を総合し、大阪府下の弥生文化の様相を明らかにすることが今後の我々の課題である。

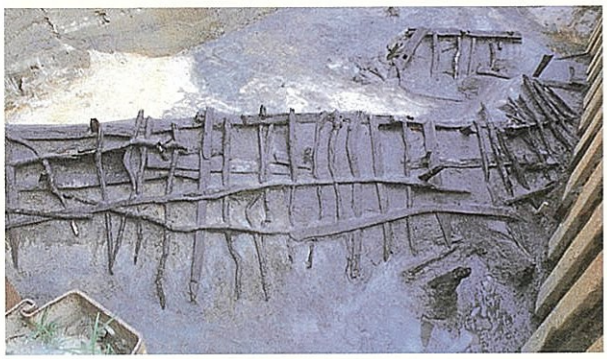
（若林）

古墳時代の調査……低湿地の開発と新技術の到来

26. 家形埴輪と壺形埴輪
（美園古墳・古墳前期、国・文化庁保有）

27. 埴輪出土状況（美園古墳・古墳前期）

28. 大規模な堤防（亀井遺跡・古墳中期）



29. 河川の護岸施設（久宝寺遺跡・古墳中期）

30. 小区画水田（志紀遺跡・古墳後期）

河内平野の低地部に、古墳が存在するなど予想もされていなかった。この平野を南北に縦断するかたちで進められた近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、多くの古墳が発見された。なかでも、4世紀末の美園古墳からは、多くの壺形埴輪と2点の家形埴輪が出土した（26・27）。そのうちの1点には、上面に網代（あじろ）を表現したベット状施設が設けられ、妻側と平側には楯が線刻されていた。一辺約7.2mの小規模な古墳にこのような精巧な埴輪がともなうことや、この古墳が河内平野で発見されたことの意味は大きい。

古大和川の支流に築かれた東大阪・八尾市久宝寺遺跡の護岸施設（29）や、幅約15mの川を堰き止めた亀井遺跡の敷葉工法による堤防（28）は、これまでの技術とは異なるものであった。当遺跡周辺が韓式系土器が多く出土する地域のひとつであることから、河内平野の開発には、これら新たな技術を携えた集団が積極的に導入されたと考えられる。

こうした沖積地の開発によって、水田は飛躍的に拡大したであろう。池島・福万寺遺跡や志紀遺跡では、弥生時代から現代にいたるまで連綿と続く水田が広範囲にわたって調査され、農耕文化の解明に貴重なデータを蓄積しつつある（30）。また池島・福万

31. 準構造船の出土状況（久宝寺遺跡・古墳前期）

32. 船形土製品（大庭寺遺跡・古墳中期）

33. 初期須恵器窯の灰原（大庭寺遺跡・古墳中期）

34. 埴輪窯（日置荘遺跡・古墳後期）

寺遺跡では、玉造製作集団のムラと推定される集落も調査され、溝で区画された空間に、畠と主屋、倉、竈屋を1セットとする単位集団の姿が明らかにされている。

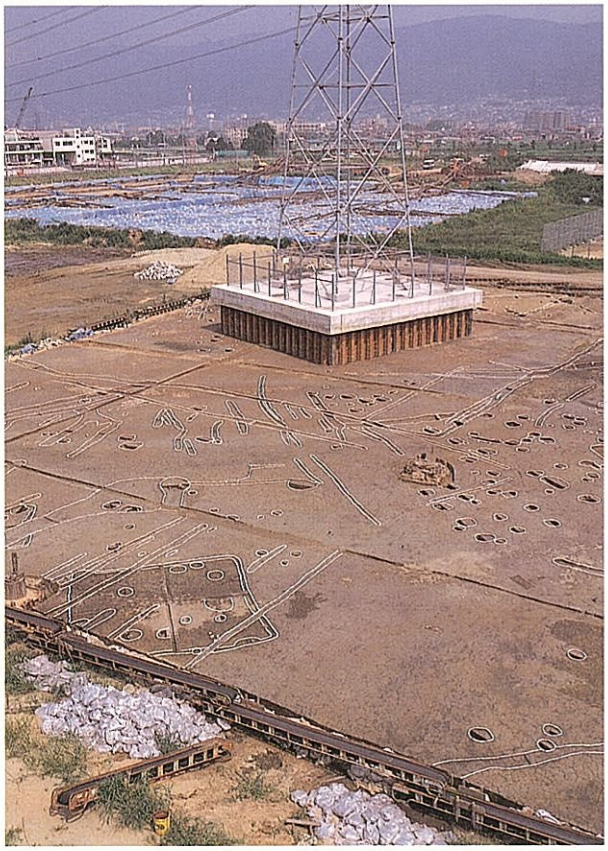
瀬戸内海航路（海の道）東端の河内潟南端に位置する、久宝寺遺跡の古墳初頭の溝からは、水位調節もしくは水溜施設に転用された、スギ材による準構造船の一部が発見された（31）。準構造船としては最古の例で、船形埴輪を参考に復原されたこの船は、外洋航行も可能と考えられている。

陶邑古窯跡群にある大庭寺遺跡からは、韓国の陶質船形土製品と同様の須恵質船形土製品が出土した（32）。この大庭寺遺跡の調査は、須恵器研究にとって画期的な調査となった。2基の窯跡（33）からは大量の須恵器が出土し、その南側にある谷と河川に囲まれた台地上の集落からは、最古の須恵器生産に携わった人々のムラの様子を示す遺構と各種韓式系土器が調査された。この初期須恵器生産にかかわった人々のムラは、小阪遺跡でも調査された（37）。

当古窯跡群の北端、百舌鳥古墳群と古市古墳群の中間に位置する堺市日置荘遺跡の調査では、6世紀後半の全長7m、幅2mの埴輪窯（34）と、ほぼ同

35. 大形掘立柱建物（蛍池東遺跡・古墳中期）

37. 須恵器工人のムラ（小阪遺跡・古墳中期）



36. 玉造り工人のムラ（池島・福万寺遺跡・古墳中期）

38. 須恵器工人のムラ（伏尾遺跡・古墳中期）

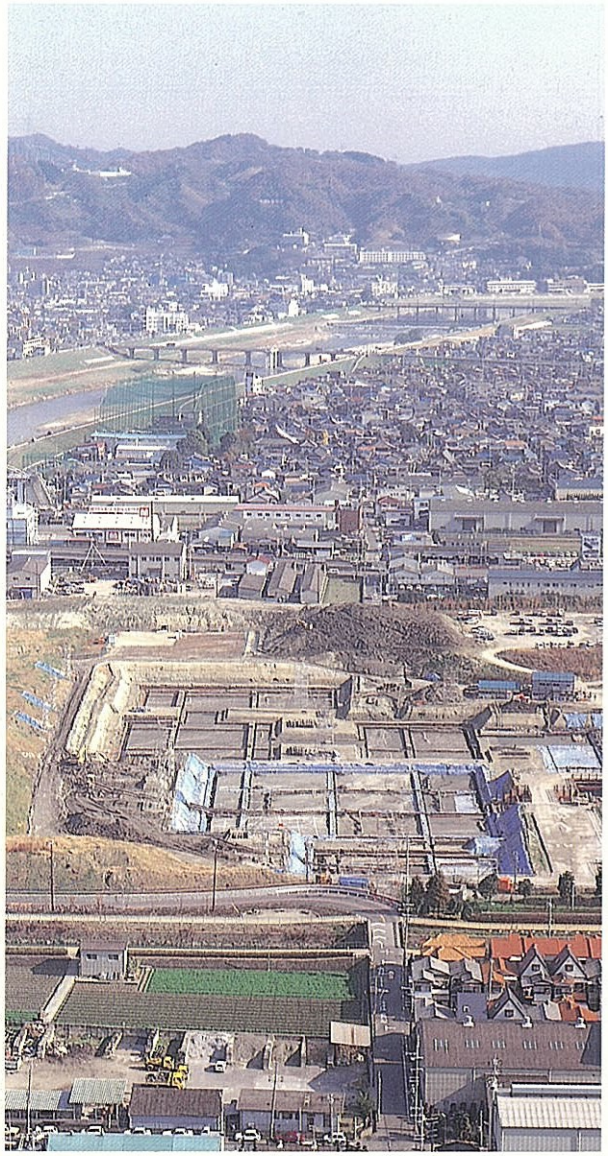
39. 谷水田を営むムラ（三田遺跡・古墳後期）

時期の半地下式須恵器窯が発見され、木製叩(たた)き板などの生産具や、近畿地方では類例の少ない人物埴輪が出土した。

和歌山県鳴滝(なるたき)遺跡と大阪市法円坂(ほうえんざか)遺跡で、床面積が100㎡をこす掘立柱建物からなる倉庫群が発見され全国的に注目された。これと同規模、同構造の建物が、豊中市蛍池東(ほたるがいけひがし)遺跡で発見された（35）。棟持(むなもち)柱を両妻側に有し、5間×5間の総柱(そうばしら)形式の建物は、古墳時代になって導入された建築技術であることが指摘されている。全容が検出されたのは2棟で、建物群全体の規模は明らかでないが、周辺の地形などから、上記2遺跡の建物群の約1/2の規模と推定される。西摂(せいせつ)平野が見わたせ、猪名(いな)川を通じて海の道につながる交通の要衝の地に立地している同遺跡からは、ほかに導入期の良好な竈が多数調査された。

須恵器生産をはじめとする新しい技術の到来は、我が国の歴史のなかで、大きなエポックメーキングであった。近年の発掘調査は、これら技術の導入経路や技術体系が決して一様でなかったことを明らかにしつつある。（金光）

古代の調査……条里制研究の発信源



40.条里水田（西大井遺跡・平安中期）

41.条里水田（池島・福万寺遺跡・平安中期）

42.条里水田（志紀遺跡・平安前期）

両旧財団の古代遺跡発掘における最大の成果は、条里型水田の調査である（40～42）。大面積の調査は、条里型水田というそれ自体が広大な面積によって構成される遺構内容を具体的に明らかにした。加えて、遺物が少なく遺構も畦畔（けいはん）や足跡という地味な内容ではあるものの、それがゆえに数少ないデータから何かを摑（つか）み取ろうとした、調査担当者の真摯（しんし）な探求心は、華々しくはないが重要な成果をもたらした。これまでの条里制研究は、主に文献史料や歴史地理の分野において、現地表の遺存地割りから、つまり方法論的には二次的ともいえるやり方で、古代条里の復原に言及されてきた。だが、考古学調査の進展によって、その成立過程を実証的に検討できる素材が集められ、ことに両旧財団の調査は大阪にとどまらず全国的にみても重要データの発信源であった。

すなわち、弥生以来の小区画水田を克服し、条里型水田が成立する過程には、①現行条里とは一致せず、坪（つぼ）内地割りも非条里型を基調とするものの、正方位にのった坪境（つぼざかい）畦畔を出現させる段階（７世紀中葉）、②最初は必ずしも図式的な長地（ながち）・半折（はおり）型に区画されないが、現行条里に一致する広範な正方位条里型水田を成立させる段階（９～10世紀以降）、が

43. 条里水田内の畠（池島・福万寺遺跡・平安中期）

44. 井戸（大庭寺遺跡・奈良中期）

45. 掘立柱建物の調査（大庭寺遺跡・奈良前半）

46. 鋳造工房（太井遺跡・奈良前期）

47. 三彩小壺を用いた地鎮め遺構（粟生間谷遺跡・奈良前期）

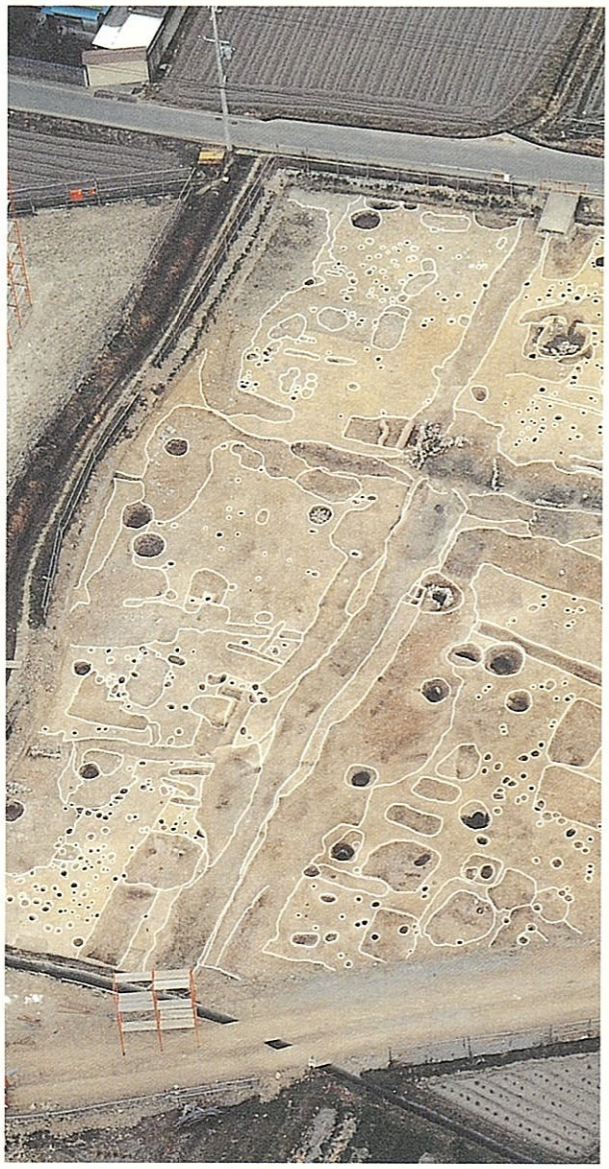
みられる点を明らかにした。①の水田は城山遺跡で確認された。大畦畔の交点では「冨官家」の墨書土器が発見され、整備条里の先行形態の施行が、国家と関連すると想定される。また、池島・福万寺遺跡では、大畦畔１条しか検出されていないが、水田祭祀用土器の埋納分布の検討から、正方位の耕地割りが明らかになった。②ではその成立時期が問題となるが、池島・福万寺遺跡では10世紀中葉、西大井（にしおおい）遺跡では10世紀以前とされる。さらに志紀遺跡では、埋没が９世紀初頭、成立は奈良時代に遡る蓋然性（がいぜんせい）を示した。

また、条里型水田の成立過程や出現期の検討だけでなく、水田区画、灌漑水路、水田祭祀、畠地利用（43）等の、初現期の条里型水田内での実態究明が、各調査地で実践されているのも大きな収穫といえる。

ほかの成果では、大庭寺遺跡（44・45）や総持寺（そうじじ）遺跡等で集落の構成や内容が明らかにされ、太井遺跡で、奈良時代の銅製品の鋳造加工、平安時代の鉄生産に関係した工房等の遺構や遺物が検出された（46）。また、粟生間谷（あおまだに）遺跡では、三彩（さんさい）小壺内にガラス小玉や有機物を納めた状態で検出され、地鎮（じしず）め遺構と目される（47）。当時の人々の精神活動の一端を垣間みることのできる貴重な成果であった。　（秋山）

中世の調査……居館・鋳物師ムラ・荘園

48. 山城（井山城・室町）



49. 寺域（日置荘遺跡・鎌倉後期～室町）

埋蔵文化財の調査で中世に関する近年の成果はめざましいものがある。以下に、両旧財団で実施してきた調査の主なものについて概要を述べる。

㈶大阪文化財センターでは1980年前後に、2遺跡でまとまった調査を実施している。阪南市田山遺跡では、日常雑器のほか、中国製陶磁器、蛸壺、土錘等が多数出土し、海浜部における生活の一端を明らかにした。熊取町成合寺遺跡では600基をこす14世紀代の土壙墓群を検出した。さらに、堺市太平寺遺跡、同市菱木下遺跡、松原市観音寺遺跡で鎌倉・室町時代の集落や寺院を検出した（49）。最近の調査でも堺市日置荘遺跡で鎌倉・室町時代の集落、寺院、土塁と壕をめぐらす居館が検出されている。

注目すべきは、これら堺市北東部および美原町で、鋳造遺構が検出されていることである。真福寺遺跡では梵鐘鋳造遺構が、日置荘遺跡では溶解炉が検出されている（51）。当地は全国の鋳物師の中心的役割りをはたした河内鋳物師の本貫地として、金石文等で知られていたが、それを裏付けることとなった。

これら泉州地方を中心とした集落跡の調査は大阪府の中世集落の消長を知ることができ、その画期や性格を議論するに基礎的な資料を提供している。

50. 瓦器窯（平井遺跡・鎌倉前期）

52. 井戸（観音寺遺跡・鎌倉後期）

51. 溶解炉（日置荘遺跡・鎌倉後期）

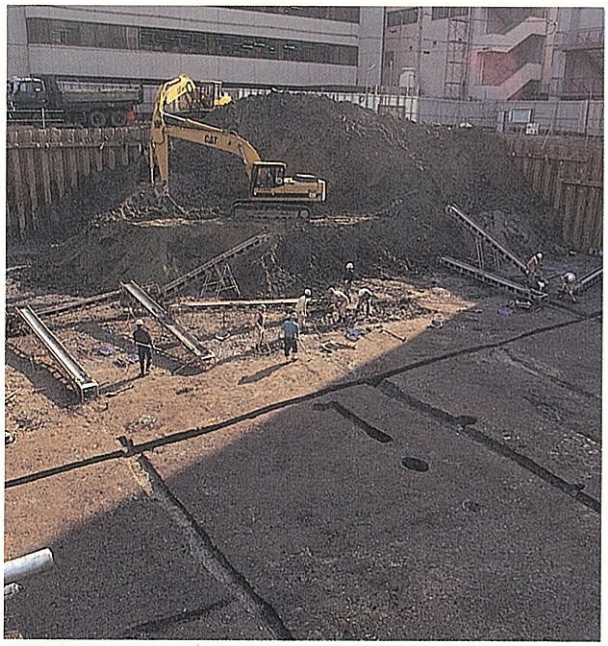
53. 土壙墓（日根野遺跡・鎌倉前期）

㈶大阪府埋蔵文化財協会では、調査の中心であった空港連絡道路予定地が著名な中世荘園である日根荘を横切るため総合調査を実施し、遺跡からだけでなく民俗、建築、地理等多岐にわたる分野から泉佐野市域の自然や歴史の解明にあたった。

また、荘園内に位置したと思われる日根野・机場両遺跡では集落地を検出している（53）。同市ではほかにほぼ同時期の集落として上町遺跡を調査している。両者はいずれも溝で囲われた屋敷地が群をなして形成されるものであるが、日根野・机場両遺跡の方が規模が大きく、形態や立地の面も異なっており、先の日置荘遺跡の居館とともに、当時の集落が階層や生活条件により多様性をおびることを知ることができる。

また、堺市平井遺跡では鎌倉時代の集落から瓦器窯（50）が検出されており、集落単位での小規模な窯業経営がおこなわれたことを教えてくれる。阪南市井山城は南朝方の淡輪助重が攻めたことが文献では知られていたが、当地には伝承が残るだけであった。それが発掘調査によって所在が確認された（48）。中世の小さな山城は不詳なことが多く、この成果は城郭研究の一助となっている。（岡本圭）

近世の調査……天下の大坂城と和泉の石切場



54. 江戸時代盛土の掘削状況（大坂城跡・江戸前期）

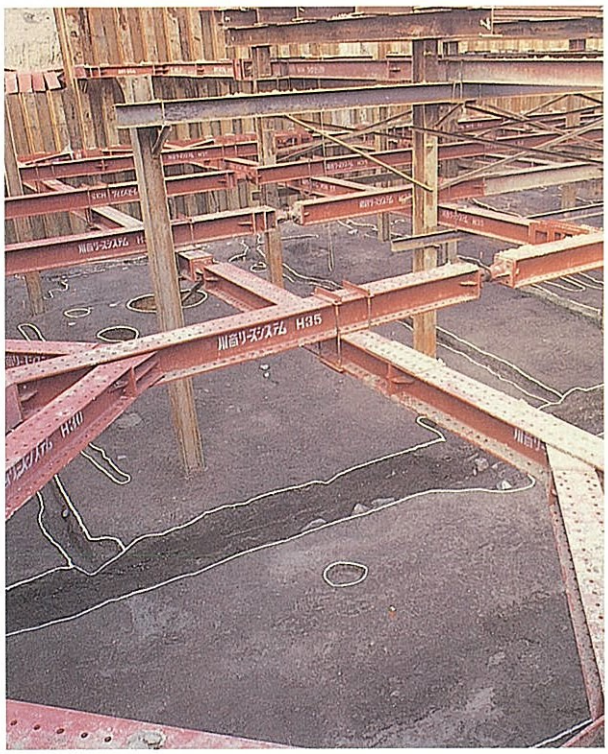
56. 武家屋敷（大坂城跡・桃山後期）

55. 畠（大坂城跡・江戸前期）

57. 推定佐竹屋敷の足軽長屋（大坂城跡・桃山後期）

大坂城跡の発掘調査は、庁舎建替を中心とする大阪府庁舎周辺整備計画により、1990年度からおこなわれている。これまでに古墳時代から近代におよぶ歴史を明らかにしてきた。このうち、中世末から近世についてみれば、石山本願寺以降、秀吉が築きあげた大坂城とその城下が中心となる。

調査区全体にわたって3～5mにおよぶ江戸前期の盛土が認められる（54）。これは徳川政権が秀吉の面影を消すために埋め立てたものといわれている。秀吉は大坂城を造営するにあたり、本丸（ほんまる）・二の丸を整備し1595年に広大な惣構（そうがまえ）を築きあげた。彼は晩年に惣構の内側に三の丸を築き、そこに各大名屋敷を集中させた。三の丸築造以降の面からは、いくつかの大区画による武家屋敷の構造を検出した。なかでも最も重要な点は、建物配置と家紋瓦および屋敷地の変遷から、大名屋敷の主として佐竹義宣が推定されたことである（56・57）。佐竹氏は東北の勇であり石田三成と親交があつかったことは知られていたが、文献でわからなかった部分を明らかにできた。次に三の丸築造以前の様子をみると、東西方向の谷があらわれ、谷筋に平行する道とその道に直交する屋敷地をみることができた。大きな屋敷地区画は10連に



58.町屋（大坂城跡・桃山後期）

59.鋳造土坑（大坂城跡・桃山後期）

60.石切場（ミノバ石切場跡・江戸中～後期）

およぶ竈をもち、金箔瓦をふいたようで、「さ竹内」の荷札木簡（にふだもっかん）も出土した。この木簡と屋敷地との厳密な関係については、未確定な部分もあるが、佐竹氏と秀吉との関係が三の丸築造以前からあったものとして、前記大名屋敷の推定を補強する資料となった。また町屋の様子から鋳造、大工、漆工など多様な職人がここに住んでいたことがわかった（58•59）。

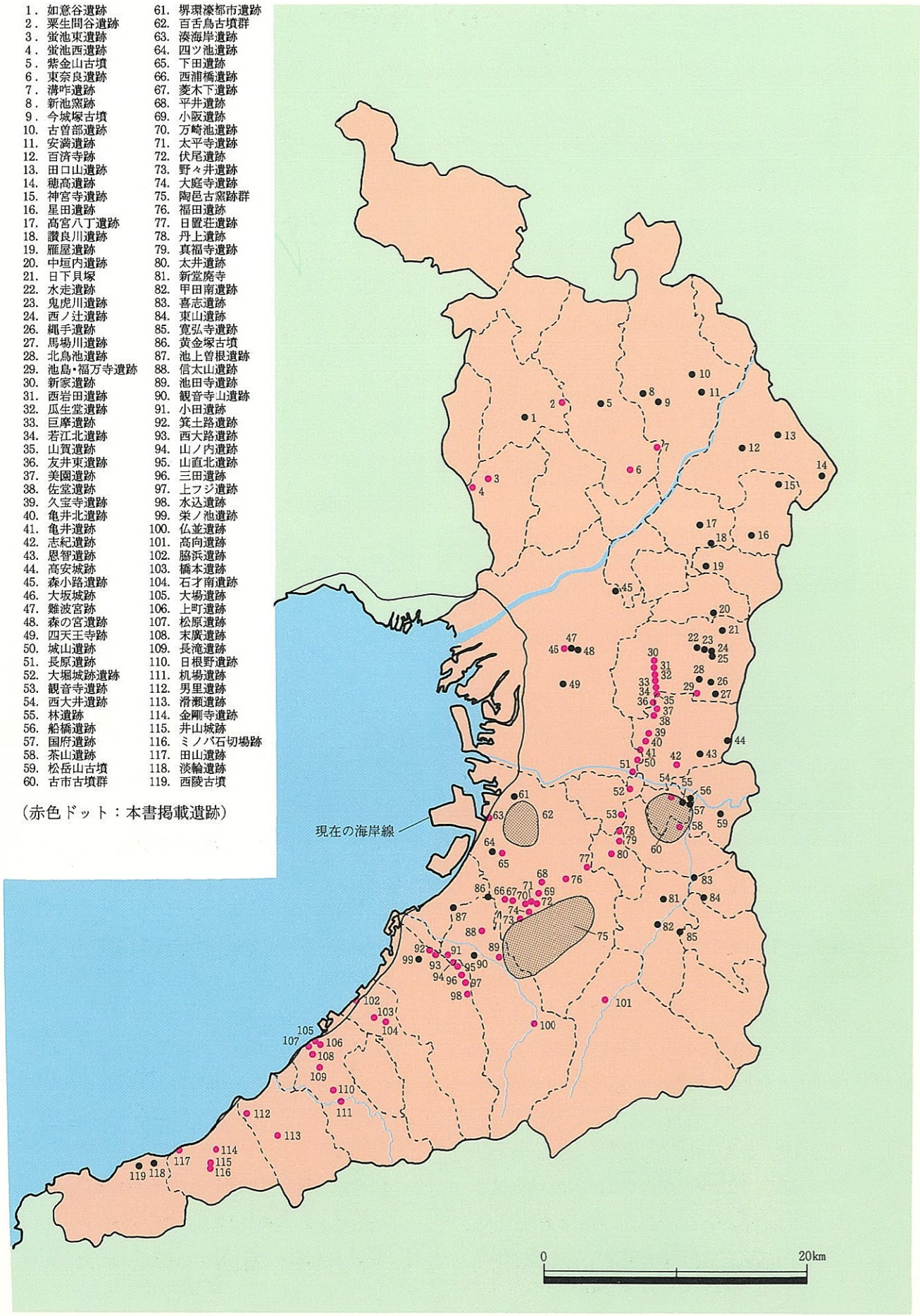
このように、大坂城とその城下は、当初、地形にあわせた町割りで武家と町人が混在していた。それが、三の丸の築造後は谷を埋め、町屋を撤去し、近世につながるような方格の地割りと大名屋敷の配置をおこなったといえるのである。

ミノバ石切場跡は阪南市に位置する（60）。調査は関西国際空港建設に伴う阪南丘陵開発事業により、1986・87年におこなわれた。その結果、18世紀を中心とした13箇所の採石坑が発見され、238点にのぼる石製品が出土した。石製品の内訳は、石臼が190点で全体の81％を占め、次いで柱状部材が28点、手洗鉢（ちょうずばち）が15点とつづく。このうち石臼の観察から、４段階に分かれる製作工程が明らかとなり、採石および加工の道具とあわせて、近世の石材加工技術を復原する重要な資料を提示した。（鋤柄）

遺跡分布図

1．如意谷遺跡
2．粟生間谷遺跡
3．蛍池東遺跡
4．蛍池西遺跡
5．紫金山古墳
6．東奈良遺跡
7．溝咋遺跡
8．新池窯跡
9．今城塚古墳
10．古曽部遺跡
11．安満遺跡
12．百済寺跡
13．田口山遺跡
14．穂高遺跡
15．神宮寺遺跡
16．星田遺跡
17．高宮八丁遺跡
18．讃良川遺跡
19．雁屋遺跡
20．中垣内遺跡
21．日下貝塚
22．水走遺跡
23．鬼虎川遺跡
24．西ノ辻遺跡
26．縄手遺跡
27．馬場川遺跡
28．北鳥池遺跡
29．池島・福万寺遺跡
30．新家遺跡
31．西岩田遺跡
32．瓜生堂遺跡
33．巨摩遺跡
34．若江北遺跡
35．山賀遺跡
36．友井東遺跡
37．美園遺跡
38．佐堂遺跡
39．久宝寺遺跡
40．亀井北遺跡
41．亀井遺跡
42．志紀遺跡
43．恩智遺跡
44．高安城跡
45．森小路遺跡
46．大坂城跡
47．難波宮跡
48．森の宮遺跡
49．四天王寺跡
50．城山遺跡
51．長原遺跡
52．大堀城跡遺跡
53．観音寺遺跡
54．西大井遺跡
55．林遺跡
56．船橋遺跡
57．国府遺跡
58．茶山遺跡
59．松岳山古墳
60．古市古墳群
61．堺環濠都市遺跡
62．百舌鳥古墳群
63．湊海岸遺跡
64．四ツ池遺跡
65．下田遺跡
66．西浦橋遺跡
67．菱木下遺跡
68．平井遺跡
69．小阪遺跡
70．万崎池遺跡
71．太平寺遺跡
72．伏尾遺跡
73．野々井遺跡
74．大庭寺遺跡
75．陶邑古窯跡群
76．福田遺跡
77．日置荘遺跡
78．丹上遺跡
79．真福寺遺跡
80．太井遺跡
81．新堂廃寺
82．甲田南遺跡
83．喜志遺跡
84．東山遺跡
85．寛弘寺遺跡
86．黄金塚古墳
87．池上曽根遺跡
88．信太山遺跡
89．池田寺遺跡
90．観音寺山遺跡
91．小田遺跡
92．箕土路遺跡
93．西大路遺跡
94．山ノ内遺跡
95．山直北遺跡
96．三田遺跡
97．上フジ遺跡
98．水込遺跡
99．栄ノ池遺跡
100．仏並遺跡
101．高向遺跡
102．脇浜遺跡
103．橋本遺跡
104．石才南遺跡
105．大場遺跡
106．上町遺跡
107．松原遺跡
108．末廣遺跡
109．長滝遺跡
110．日根野遺跡
111．机場遺跡
112．男里遺跡
113．滑瀬遺跡
114．金剛寺遺跡
115．井山城跡
116．ミノバ石切場跡
117．田山遺跡
118．淡輪遺跡
119．西陵古墳

（赤色ドット：本書掲載遺跡）



II部　発掘資料精選

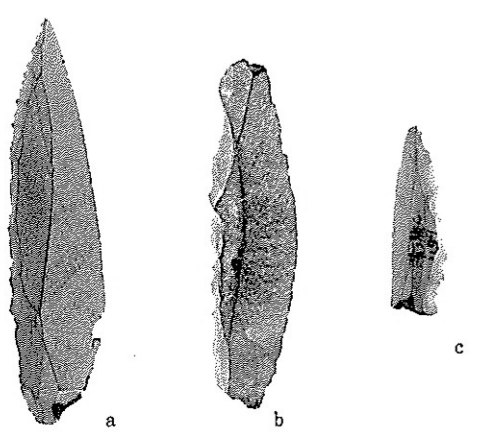
II部凡例

- 本書に収録した遺物はすべて、旧㈶大阪文化財センター、旧㈶大阪府埋蔵文化財協会、および㈶大阪府文化財調査研究センターの調査で出土した遺物である。
- 遺物は、旧石器時代(001～012)、縄文時代(013～071)、弥生時代(072～255)、古墳時代(256～397)、古代(398～457)、中世(458～489)、近世以降(490～527)の時代別、また同時代のうちでは、土器類、埴輪、瓦塼類、銭貨、金属製品(および関連資料)、土製品、石製品、木製品、文字資料類、骨角製品、自然遺物その他の順に配列した。ただし、境界時期の遺物の一部や、遺物種の内容にかんがみて、必ずしも厳密には区別できていないものもある。
- 遺物の大きさに関する略号は次のとおりである。

RD	：口径	rd	：推定・復原口径
D	：径	d	：推定・復原径
MD	：最大径	md	：推定・復原最大径
BD	：底径	bd	：推定・復原底径
H	：器高	h	：残存器高
W	：幅	w	：残存幅
L	：長さ	ℓ	：残存長
T	：厚	t	：残存厚

- 遺物の大きさの単位は㎝。ただし、概数値の場合は小数点以下は表記していない。
- 石製品・木製品のうち、材種の判明するものは明記した。材種名の記載のないものは未鑑定である。
- 報告・出典の文献名、遺跡別索引、遺跡所在地、遺跡名の読み、英文目録は、本書末を参照されたい。
- 文献は、該当遺物の報告がないものでも参考に掲示した。さらに、関連資料が現地説明会資料だけしかないものは、追加として加えた。

001

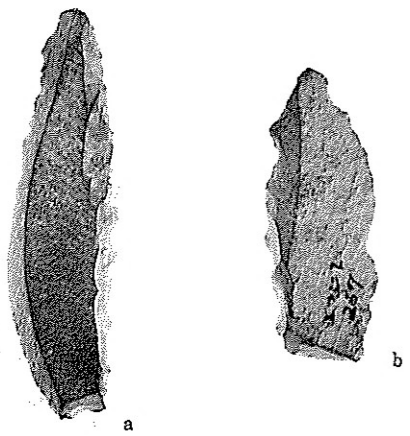


001 ナイフ形石器　後期旧石器

信太山遺跡(a)・高向遺跡(b)・滑瀬遺跡(c)（a:L8.1,b:ℓ6.3,c:ℓ4.5）文献.161・163・219

いずれも後世包含層の混入遺物として出土。横長の翼状剥片を素材に、鋭い縁辺を利用して刃部を形成する。打面部を背潰し加工した石器。国府型ナイフ形石器と呼ばれ、瀬戸内海沿岸地域の後期旧石器を代表するナイフ形石器である。3点ともサヌカイト製。大阪南部の旧石器時代を考えるうえにおいて貴重な資料を提供した。（田中一）

002

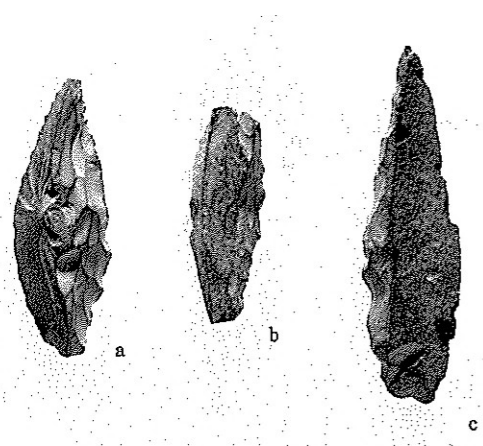


002 ナイフ形石器　後期旧石器

上フジ遺跡　(a:L6.1,b:ℓ4.0) 文献.191

ともに後世包含層からの出土であるが、泉州北部の旧石器文化を考究するうえで重要である。aは、完形の国府型ナイフで柳葉形を呈する。翼状剥片を素材とし、背潰し加工により打点は除去されている。bは、一部を欠失しているが、背潰し加工は背面に対し直角に施され、一次調整剥離による鋭い縁辺を刃部としている。（田中一）

003

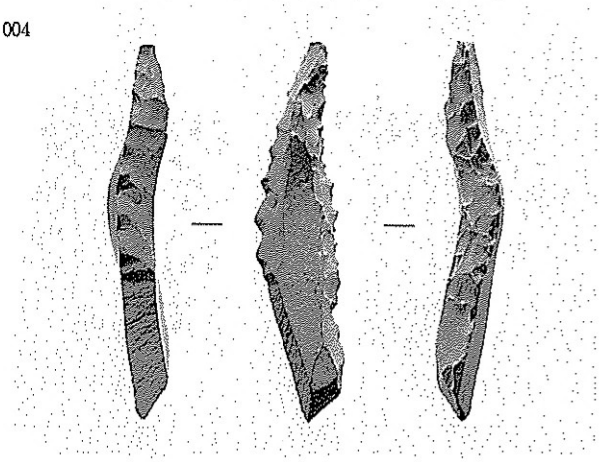


003 ナイフ形石器　後期旧石器

万崎池遺跡　(a:L5.0,b:ℓ3.8,c:L6.2)文献.92

後世の遺構や包含層の混入品として出土。3点とも翼状剥片を素材とした国府型ナイフ形石器である。aは翼状剥片石核のファーストフレイクを素材とする。a・bは打面部から側辺にかけて主要剥離面側（背面）から、cは腹面から剥離調整が施されている。横断面形はa・bは台形、cは三角形である。いずれもサヌカイト製。（石神）

004

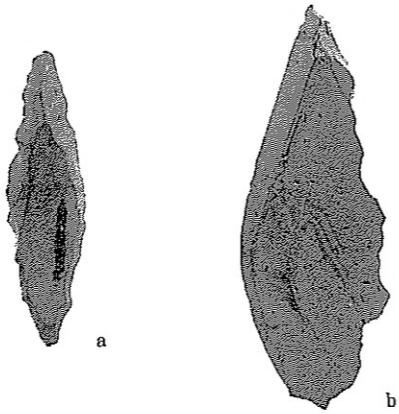


004 角錐状石器　後期旧石器

西大井遺跡　(L:7.8・W:1.8)　文献.382

低位段丘に相当する地山面から出土。角錐状石器には断面形が三角形と台形のものがあるが、本例は台形のタイプで、両側縁に細部調整を施してきつい立ち上がりをつくり出し、先端は尖らせている。基部には風化面が若干残る。サヌカイト製。角錐状石器は槍先のような刺突具と考えられ、中国から朝鮮半島、日本列島にかけて分布する。（大野薫）

005

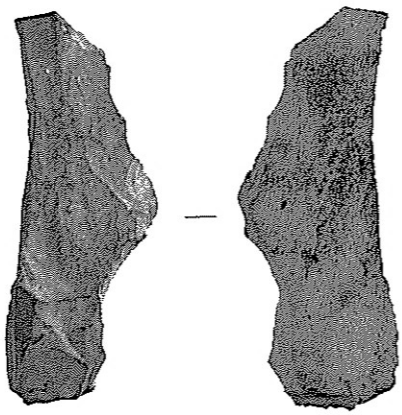


005 ナイフ形石器・翼状剥片　　後期旧石器

蛍池西遺跡　　(a:L5.3,b:L7.4)　文献.376

当遺跡では、低位段丘崖直下の沖積平野において、現地表下3m強の青灰色系粘土～シルト層中から旧石器が出土。帰属する面や遺構は認められない。種類としては、国府型ナイフ形石器(a)、翼状剥片(b)、石核、打面調整の際に生じたチップ等が認められるが、小さなチップはない。材質はほとんどがサヌカイト製で、1点のみチャート製。　(三宮)

006

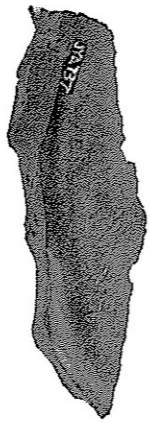


006 翼状剥片　　後期旧石器

大堀城跡　　(L 4.8・W 1.8)　文献.78

奈良時代の溝に混入して出土。打面調整がおこなわれており、典型的な翼状剥片である。背面は主要剥離面、腹面は大剥離面および複数の調整面、帯状に残る底面からなる。上面観は鳥が翼をひろげたような形態である。サヌカイトを用いてこのような横長の剥片をつくる方法が瀬戸内を中心に発達し、瀬戸内技法とも呼ばれている。　(石神)

007

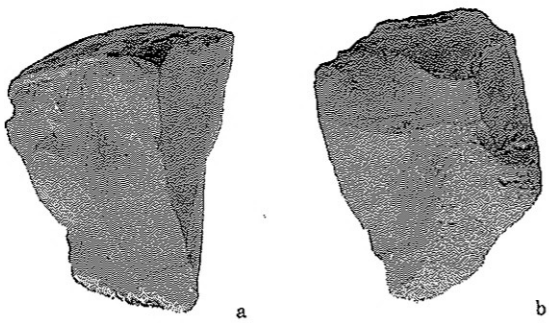


007 石核　　後期旧石器

城山遺跡　　(L6.8・W2.1)　文献.122

白色粘土検出中に出土。横長剥片を打ち欠いた石核である。この面の打点のある右側面は礫面で反対側の面は剥離面からなり、裏面もまた正面と同じく礫面を打面とする横長の剥離面からなる。同一面を打面とし横長剥片を打ち欠いた残核(ざんかく)と考えられる。打面調整はみられず、礫面をそのまま打面とし連続して輪切り状に横長剥片を打ち欠く剥離方法である。　(石神)

008



008 石核　　後期旧石器

城山遺跡　　(b:L4.1・W2.9)　文献.122

上述の白色粘土上面から出土。背面と右側面から正面にかけて礫面が残っており、角礫を打ち欠いた第一次剥片（分割礫）を石核として用い、周辺から小剥片を剥離している。下辺中央からの打撃により割れをおこしている。サヌカイト製。石核と剥片が11点出土しているが、これらの出土地点は中位段丘外縁に相当し、その北側は急に低くなっている。　(石神)

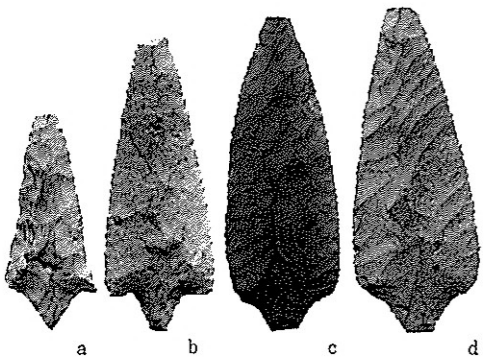
009

009 石核　　後期旧石器

太井遺跡　　(L7.3・W7.4)　　文献.150

旧石器包含層から出土。掌に入る位の自然亜角礫を打ち欠いた第一次剥片を石核として利用。正面のみ周辺から剥片を剥離しているが、裏面の礫面からは剥片はとられていない。打面は礫面を主体とし打面調整はほとんどおこなっていない。しかし、この石核は最終的には縁辺上に連続する小剥離を施しており、トゥールとして転用した可能性がある。サヌカイト製。(石神)

010

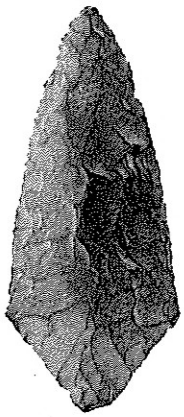


010 有舌尖頭器　　旧石器～縄文草創期

太井遺跡(a・b)・丹上遺跡(c・d) (a: ℓ5.5,b: ℓ7.6 c: ℓ8.1,d: ℓ8.4)文献.126・150

いずれも後世包含層から出土。右3点、特にc・dは両面とも押圧剥離により薄身に仕上げられた優品である。いずれもサヌカイト製。有舌尖頭器は旧石器最末期に投げ槍の槍先として出現し、隆線文土器と共伴する新潟県小瀬ヶ沢洞穴や愛媛県上黒岩遺跡の例もあるように縄文早期にも存続しており、石鏃の出現ともあいまって姿を消すようである。　(石神)

011

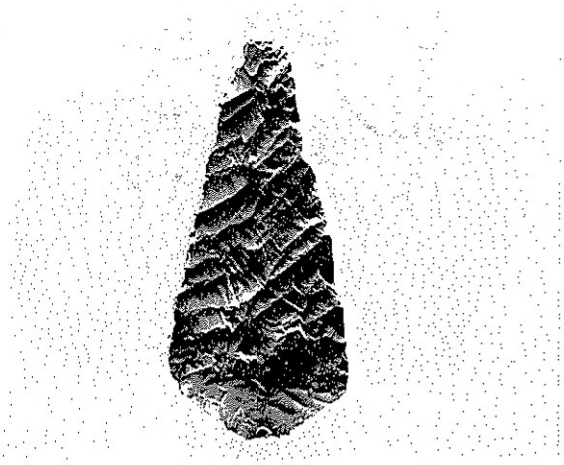


011 有舌尖頭器　　旧石器～縄文草創期

三田遺跡　　(ℓ7.0・W3.1)　　文献.181

地山直上層から出土。サヌカイト製。この種の石器は、基部に返しをもつのが特徴で、刺突具の一種として獲物の逸脱防止のためには優れた特性を示している。本例は基部の返しが鋭くなってくる段階のものと思われる。当遺跡では旧石器末～縄文初頭の関連遺構は検出されていないものの、この時期の生活の痕跡がうかがわれよう。　(服部)

012



012 有舌尖頭器　　旧石器～縄文草創期

小阪遺跡　　(ℓ5.3・W2.8)　　文献.259

中世の河川から混入状態で出土。チャート製。下端部に最大幅をもつ。時代をへているために、磨滅がひどく稜線が鈍くなってはいるが、両側縁から細長く中央部にとどくほどの押圧剥離を細かく施している。舌部にあたる下端部には微細剥離を施している優品である。形態的にみて、縄文草創期の遺物と思われる。

(溝川)

013

013 縄文土器（深鉢）　縄文中期
小阪遺跡　(rd28.5・h41.1)　文献.287

土坑の上面と中層に、土器片が人為的に敷き並べられた土器片敷遺構から出土。底部を欠くがほぼ完形に復原できる。口縁部は山形部と水平部からなり、類例の少ない形態である。口縁部と体部の文様帯は区別され、体部にＪ字文が施される。中期末葉北白川Ｃ式の新しい段階に位置づけられ、中津式への変遷を考えるにあたって貴重な資料である。（合田）

014

014 縄文土器（深鉢）　縄文中期
仏並遺跡　(RD31.6・H59.8)　文献.331

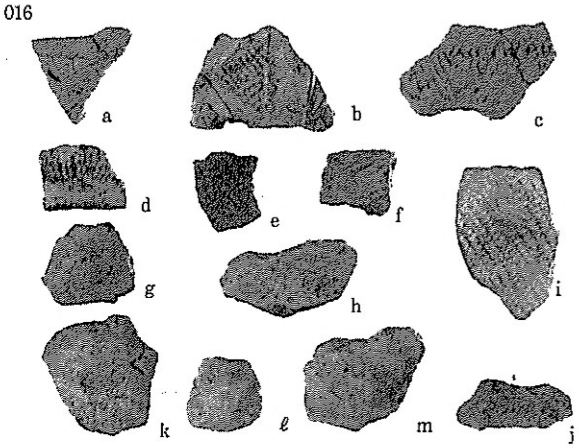
埋甕として用いられたものだが、明らかな穿孔等は認められない。頸部が若干くびれるが全体としては緩やかなカーブをえがき、器高が大きい。口縁部は若干肥厚し、外面および口唇部にＬＲの縄文を施す。頸部には同様の縄文を施したのち、14単位で頸部を一周する連弧文をいれる。体部には、ＬＲの縄文を間隔をおいて縦位に施文する。中期末葉北白川Ｃ式。（大野薫）

015

015 縄文土器（深鉢）　縄文中～後期
山ノ内遺跡　(rd28.0・H40.8)　文献.190

楕円形土壙内に営まれた、土器棺に用いられた深鉢である。口縁部付近に板石が置かれ、土器は故意に打ち欠かれた可能性がある。体部中央が張り、緩く外湾しながら口縁にいたる。体部外面には、口縁部ＬＲ横回転、腹部ＬＲ縦回転による、袈裟（けさ）だすき様の縄文が施されている。共伴土器片から中津式古段階のものと思われる。（溝川）

016



016 縄文土器（深鉢）　縄文早・前期
仏並遺跡　(b: ℓ5.5 ・w 8.6) 文献.373

包含層から出土した土器のうち、胎土内に繊維を含むもの。a・bは沈線や隆帯で三角形など幾何学的な文様をつくり、その内部に押し引き刺突などをおこなう。関東地方の鵜ヶ島台式に比定しうる土器である。c～eは縄文や押し引き刺突を、f～jは縄文を施す。k～mは文様はみられない。近畿地方では数少ない早期末葉～前期初頭の資料といえる。　（大野薫）

017

017 縄文土器（深鉢）　縄文早～前期
太平寺遺跡　(ℓ4.9•W4.1)　文献.92

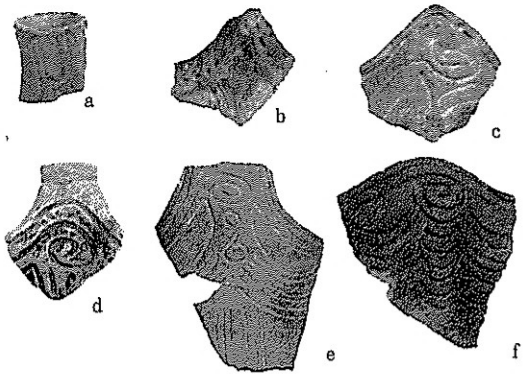
早期末～前期初頭の口縁部片である。波状口縁をもち、内外面ともに巻貝条痕が施される。外面口縁部直下には２条の凹線を横方向にめぐらせ、凹線をはさんで半截竹管による刺突文が３列施される。胎土はやや粗く、長石、石英、角閃石、黒雲母を多く含む。外面には煤の付着が認められ、口縁下に補修孔と思われる穿孔がある。　（福田）

018

018 縄文土器（深鉢）　縄文中期
小阪遺跡　(rd20.7•H22.8)　文献.287

沖積層を形成する青灰色シルト中の中期末～後期初頭面から出土。小形品である。肥厚する口縁部とくびれをもつ体部からなり、口縁部には横方向、体部には縦方向の縄文を施す。簡略な文様ではあるが、口縁部と体部の文様帯を区別しており、北白川Ｃ式の新しい段階から中津式にかけてみられる、近畿地方に特徴的な文様構成である。　（合田）

019



019 縄文土器（深鉢）　縄文中期
小阪遺跡　(e: ℓ17.4•w15)文献.256•287

谷地形をなす沖積層中の、埋没した縄文時代河川から出土。土器表面には煤が付いており、残りがいいことから、あまり遠くはないムラから流されてきたものであろう。山形口縁で、とくに突起状のものは先が筒状である。口縁部と体部の文様帯は区別されるが、器形的にはくびれが小さくなり、文様は崩れはじめる。北白川Ｃ式の新しい段階に位置づけられる。　（合田）

020

020 縄文土器（深鉢）　縄文後期
仏並遺跡　(rd28.9・h16)　文献.135・224

竪穴住居から出土。口縁部を内側に肥厚させ、やや内傾し上面が凹んだ平坦面をつくる。その上に橋状部と環状部を組合わせた突起を付ける。頸・体部界には１条の沈線をめぐらす。体部には、逆Ｕ字形と倒Ｖ字形の平行沈線でくぎられる無文帯を配置し、その間をＲＬの縄文で充填する。内面と頸部外面の調整はナデ、２㎜以下の長石粒を含むが胎土は精良。　（岩崎）

021

021 縄文土器（深鉢）　縄文後期
仏並遺跡　(rd29.4・H23.7) 文献.135・224

竪穴住居から出土。波状口縁の縁帯文土器である。波頂部は同心円のまわりに弧文を配し、波頂部間の縁帯には１条の沈線を描く。頸・体部界は沈線をめぐらす。体部は、縦に連続する渦巻文の左右に多重の連弧文を配する文様を、波頂部の下とその中間に８単位施す。外面には条痕が残り、内面は粗いミガキである。胎土には１㎜以下の長石と黒雲母を含む。　（岩崎）

022

022 縄文土器（深鉢）　縄文後期
仏並遺跡　(rd26.9・h18.0) 文献.135・224

竪穴住居から出土。口縁部を内外に軽く肥厚させた波状口縁をもつ。口縁部の肥厚帯の外面にはＲＬの縄文を施す。外面はナデ調整で、その上に頸部から体部にかけて５本単位の蛇行する条線を垂下させる。内面の調整は粗いナデである。胎土中には１～５㎜の長石を多く含む。焼成はよく、黒褐色に焼きあがっている。
（岩崎）

023

023 縄文土器（深鉢）　縄文後期
仏並遺跡　(rd13.5・h9.9)　文献.135・224

竪穴住居から出土。丸底の小形品。縦方向の２本の沈線の間を４本の横方向の沈線でつなぐ「目」字状の区画文を、90°間隔の４箇所に描く。横方向の沈線のうち中央の２本は近接して描かれ、頸・体部界を表現するかのようである。区画内とその上下にＲＬの縄文を横方向に施すが、頸部の区画のみは縦横に施される。胎土には３㎜以下の長石と黒雲母を含む。　（岩崎）

024

024 縄文土器（浅鉢）　縄文後期
仏並遺跡　（md16・h6.6）文献.135・224

竪穴住居から出土。偏平な半球形の体部をもつ丸底の個体だが、口縁部を欠いている。頸・体部の境界に太い沈線をめぐらせる。内外面ともナデによる調整をおこなっているが、内面には条痕が部分的に残っている。体部には多条の細い沈線によるＶ字状の文様を５単位描いている。胎土は白色粒（長石）を多く含む。

（岩崎）

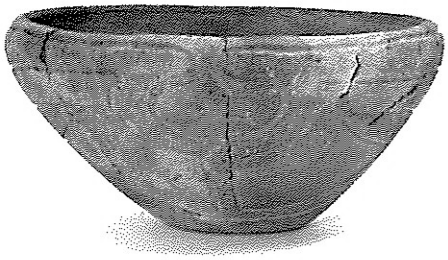
025

025 縄文土器（浅鉢）　縄文後期
仏並遺跡　（rd15.7・h6.3）文献.135・224

竪穴住居から出土。024と同様の器形であるが、頸・体部界の沈線はない。口縁部と体部にＬＲの縄文を施す。

以上の020～025は、同一の竪穴住居の埋土から出土した多量の縄文土器の一部である。埋土の堆積状況からみて、これらの土器は一時に投棄されたとみられる。大部分が北白川上層式１期に属する。　（岩崎）

026



026 縄文土器（浅鉢）　縄文後期
仏並遺跡　（RD22.5・H11.1）文献.373

包含層から出土。口縁部は内湾し、端部はあまり肥厚せず丸くおさめる。口縁部と平行に沈線で画した横位の縄文帯をつくり、口縁部の相対する２箇所から上部の開いたドーナツ形の縄文帯を垂下させる。体部下半で再び横に展開させ、さらに剣先形の縄文帯を入れる。縄文はＲＬの充填縄文で、無文帯はていねいに磨かれている。後期初頭中津式。　（大野薫）

027

027 縄文土器（深鉢）　縄文後期
仏並遺跡　（rd45.5・h51.2）　文献.331

埋甕として用いられた土器。底部を欠いており、埋設の際、人為的に打ち割られたと考えられる。器形は底部から体部にかけて大きく開き、頸部がくびれて、口縁部はまっすぐ斜め上方にのびる。外面には櫛歯状工具による条線文が施されている。条線文は10単位あり、口縁部から体部に向かって「Ｓ」字を描くように施文される。北白川上層式１期。　（大野薫）

028

028 縄文土器（深鉢）　縄文後期
仏並遺跡　(rd27.0・H26.1)　文献.135

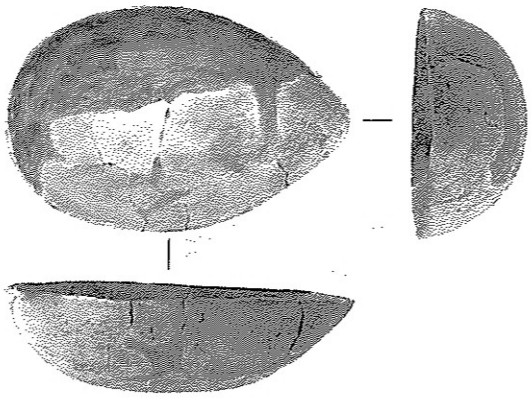
墓壙と考えられる径１m程度の土壙の上部中央に、ほぼ正立状態で置かれていた。口縁部は外側に粘土を貼りつけて肥厚させる。体部外面は左上方に巻貝条痕調整をおこない、頸部と体部の屈曲部は横方向の条痕調整、頸部は条痕調整ののちナデ調整を施す。底部は焼成後に穿孔されている。北白川上層式の粗製深鉢である。　(岩崎)

029

029 縄文土器（深鉢）　縄文後期
仏並遺跡　(rd29.7・H42.3)　文献.135

竪穴住居の、中央部の北寄りの床面から掘り込まれた土坑のなかに正立状態で置かれていた。頸部は軽く外反する。底部には焼成後の穿孔がみられる。器面調整は外面は巻貝条痕が残るが、底部付近はナデを施す。内面の上半は巻貝条痕の上に粗いミガキ、下半はナデ調整である。胎土には１～３㎜の長石とチャートを含む。　(岩崎)

030



030 縄文土器（浅鉢：船形土器）　縄文後期
仏並遺跡　(rd20.1・H6.3)文献.135・224

上記の竪穴住居が廃絶した後に、一括廃棄された大量の土器とともに出土。その多くは後期前半に属する深鉢と浅鉢である。

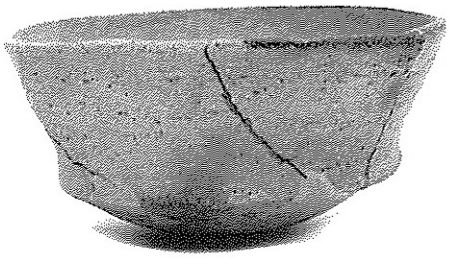
本例は内外面ともにていねいなナデ調整をおこなっており、その形状から注口をもつ土器と考えられる。東大阪市縄手遺跡にも類似する遺物が出土している。　(服部)

031

031 縄文土器（深鉢）　縄文後期
池田寺遺跡　(RD26.7・H29.7)　文献.293

土坑内堆積土から、ほかの縄文土器片とともに出土。波頂部の突起が２個一対と、１個のものを交互に３箇所ずつ組み合わせた波状口縁を有する。文様構成は体部から無文帯と縄文帯が重層的に口縁まで連続し、また口縁の円弧状文は口唇部までおよぶ。当遺跡では、槇尾川に面した台地上に類似の土坑が集中し、土壙墓群とも解されている。　(西村)

032



032 縄文土器（浅鉢）　縄文後期
西大井遺跡　（rd19.0・H8.1）　文献.382

晩期以前に相当する土層から出土。約1/2程度残存していた。1㎜以下の砂粒を多く含み、灰白色を呈する。底部は丸底で、大きく開きながら緩やかに立ち上がる。口頸部は外反しながら外に開く。

口頸部外面は横方向の巻貝条痕を施し、底体部外面は繊維束状のものでケズられている。ほかに深鉢底部なども出土した。（駒井）

033

033 縄文土器(ミニチュア注口土器)　縄文後期
西大井遺跡　（RD5.0・H5.2）　文献.382

自然流路に堆積した腐植土層から出土。壺形の注口土器である。口径、器高とも5㎝程度の小さなもので、032の浅鉢に比べて胎土は精良である。

注口部の先端を欠損するものの、ほぼ完存する。注口の直上とその反対側に、口縁部から頸部にかかる一対の橋状突起をつける。数条の沈線帯で器面全体を施文する。（駒井）

034

034 縄文土器（深鉢）　縄文後期
西浦橋遺跡　（RD38.0・h30.9）　文献.93

当遺跡では自然河川などから、縄文中期末～晩期の土器が出土。本例はそのひとつで、文様などの特徴から後期の北白川上層式3期に属すると考えられる。

出土した土器はあまり磨滅しておらず、調査区からさほど離れていない場所に、中期末から晩期までの長期間にわたって営まれた集落が存在していたと考えられる。（井上）

035

035 縄文土器（深鉢）　縄文後期
久宝寺遺跡　（RD28.8・H27.8）　文献.144

後・晩期の河川から出土。後期後葉の元住吉山II式に比定される。素文の口縁部と、体部にＬＲ縄文と沈線で構成された文様帯をもち、底面には網代(あじろ)痕を有する。また、胎土には緑色片岩の円礫が多量に含まれる。最近では、本例のように後期の遺物が低地部においても出土することが多く、集落の存在も明らかになりつつある。（渡辺）

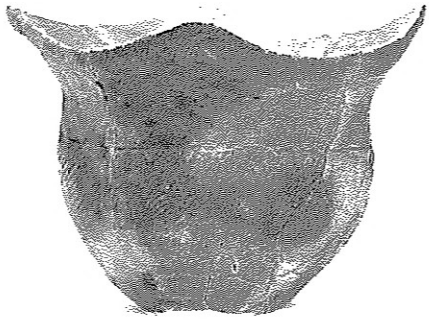
036

036 縄文土器（深鉢）　縄文後期

小阪遺跡　（rd22.5・H19.5）文献.256・287

沖積層を形成する青灰色シルトから出土。単独で深鉢の半個体分が出土したもので、出土地点は河川の肩部になる可能性がある。体部が屈曲をもって張りだす器形であり、文様は、口縁部と張りだした体部に狭い磨消縄文が施される。器形は一乗寺K式～元住吉山Ⅰ式的だが、体部に羽状（うじょう）縄文が施されることから、北白川上層式の可能性もある。（合田）

037



037 縄文土器（深鉢）　縄文後期

小阪遺跡　（rd27.6・h21.0）　文献.287

沖積層を形成する青灰色シルト中、縄文後期面の遺物集中区内土器溜りから出土。口縁部を含む破片２点の出土であるが、大きく開く４つの山形口縁に復原でき、体部に屈曲はみられない。口縁部はわずかに肥厚し、口縁部と体部に縄文を施す。頸部は無文で、体部との境には沈線を１条めぐらし区分する。北白川上層式２～３期に位置づけられる。（合田）

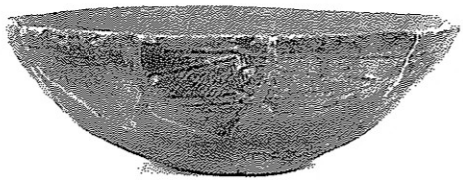
038

038 縄文土器（深鉢）　縄文後期

小阪遺跡　（rd12.6・H10.2）　文献.287

沖積層を形成する青灰色シルト中、縄文後期面の遺物集中区内土器溜りから出土。ほぼ完形の小形品である。しまった頸部から体部にかけてわずかにふくらむ器形であり、体部だけ縄文が施される。頸部と体部の区分を、文様の有無と器形の屈曲で表し、沈線や段は用いない。北白川上層式２～３期の器種構成中、深鉢のサイズを考えるうえでの好資料である。（合田）

039



039 縄文土器（浅鉢）　縄文後期

小阪遺跡　（rd27.3・H9.0）　文献.287

沖積層を形成する青灰色シルト中、縄文後期面の遺物集中区内土器溜りから出土。体部がわずかに内湾しながらたちあがり、水平口縁である。底部は破片だけで、断定できないが平底になる可能性が高い。文様は、蛇行沈線文の両側に縄文を充填する三角形の区画文を配したものが、上下２本の沈線間に４単位展開する。北白川上層式３期に位置づけられる。（合田）

040

040 縄文土器（深鉢）　縄文後期
池島・福万寺遺跡　(rd31.2・H24.0)　文献.346

葦などの植物遺体を多く含む黒色粘土層上面の流路の肩部から出土。後期中葉の元住吉山Ⅰ式に属する有文深鉢である。

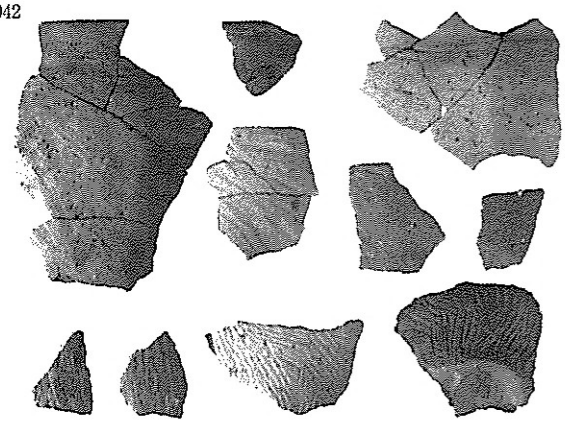
当遺跡は縄文海進期には海であり、その後徐々に陸化し、縄文後期には葦原の状態になっていた。この土器は、このような低湿地が人々の活動空間に組み込まれたことを示している。　(井上)

041

041 縄文土器（深鉢）　縄文後期
池島・福万寺遺跡　(rd22.0・H22.8)　文献.346

040の土器と共伴して出土した粗製深鉢。この一括資料には、ほかに粗製深鉢が1個体含まれている。これのみで時期を決定するのは難しいが、040の有文深鉢と同様、縄文後期中葉の元住吉山Ⅰ式に属すると考えられる。当遺跡で出土した縄文後期の土器は少量であり、この段階の土地利用のあり方の究明が今後の課題となっている。　(井上)

042



042 縄文土器（深鉢）　縄文晩期
新家遺跡　(上左：ℓ19・w14)　文献.142

地表下4.3mに堆積していた包含層から出土。晩期中葉の滋賀里Ⅲ式に属する粗製深鉢である。巻貝条痕やヘラケズリが施され、内面はナデられている。

当遺跡から出土した晩期の遺物は少量であり遺構も検出されていないが、これらの土器は、この時期に当遺跡周辺の低湿地が人々の活動領域に含まれていたことを明確に示している。　(井上)

043

043 縄文土器（深鉢）　縄文晩期
小阪遺跡　(rd30.0・h28.5)　文献.287

沖積層を形成する灰白色～褐色シルトから出土。同層上面では大木の根株が多く検出される。口縁端部と体部に2条の突帯をめぐらせ、体部突帯を境にわずかに屈曲し、体部最大径が口縁部径より大きい。突帯は断面三角形であり、頂部に小さいOまたはD字形の刻みが浅く施される。口縁端部に突帯が接することから、大略的には長原式に位置づけられる。　(合田)

044

044 縄文土器（深鉢）　縄文晩期
小阪遺跡　(rd35.4・H34.5)　文献.287

沖積層を形成する青灰色シルトから出土。口縁端部に接して１条の突帯がめぐり、丸底の完形の深鉢である。突帯は断面三角形で、頂部にO字形の刻目がめぐる。外面には煤が、内面には炭化物が付着する。5〜8㎜のサヌカイト片１点が胎土中の外面に含まれ、土器製作場所周辺にサヌカイト片が散らばっていた可能性がある。長原式。　（合田）

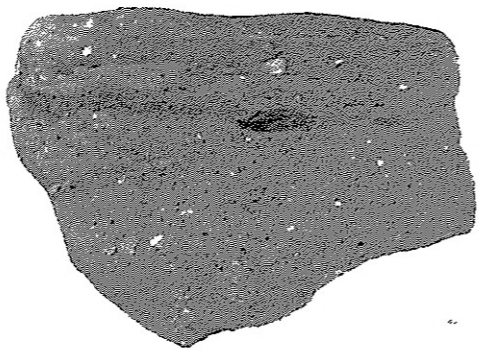
045

045 縄文土器（壺）　縄文晩期
久宝寺遺跡　(rd11.3・h33.8)　文献.143

層厚10〜30㎝の包含層から、少量の弥生前期の壺、甕片とともに出土。

当遺跡の南約４kmに位置する長原遺跡を標式遺跡とする長原式土器。底部を欠損する。口縁端部よりわずかに下がった所に１条の突帯をめぐらすが、刻み目はない。頸部はナデ、体部から下はケズリ調整、内面は横方向のナデ調整を施す。　（寺川）

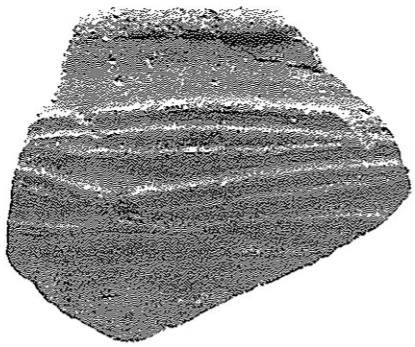
046



046 縄文土器（籾痕のついた深鉢）　縄文晩期
久宝寺遺跡　(ℓ3.6・w4.8)　文献.143

045と共伴して出土。長原式深鉢と考えられる口縁部片である。口縁端部には突帯を貼りつけているが、刻み目はない。口縁下に籾圧痕が一つある。縄文時代の末に稲籾が存在していたことの証。最近、北部九州ほかで縄文末といわれていた時期の水田遺構が相次いで検出され、農耕の始まりに一石を投じている。それに関連して本例は重要な意味をもつ。　（寺川）

047



047 縄文土器（浮線文浅鉢）　縄文晩期
小阪遺跡　(ℓ7.5・w8.1)　文献.287

沖積層を形成する青灰色シルト中、埋没河川の後背湿地にあたる地点で、縄文晩期〜弥生前期の土器群から出土。体部文様は浮線文を用い、三角形とレンズ状彫り込みを連結し、交点に刺突文を施す。浮線文土器は、中部・関東地方で縄文晩期後半に隆盛した土器であり、西日本の出土例は少ない。本例は、同時代の東西交流を考えるうえで貴重な資料である。　（合田）

048

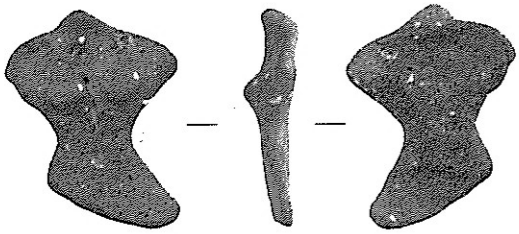
048 土面　　縄文後期

仏並遺跡　　（ℓ18.5・w14.6）文献.135・255・373

竪穴住居から出土。破片で発見されたが、復原すると皿状に前面がふくらみ、ほぼ楕円形を呈している。眉毛、鼻は粘土紐を貼り付け、眼と口は孔をあける。部分的に赤色顔料が塗られ、両眉の外側には紐孔をもつ。表現が写実的で優品である。

縄文時代の土面として、西日本では数少ない資料として貴重である。　（井藤徹）

049

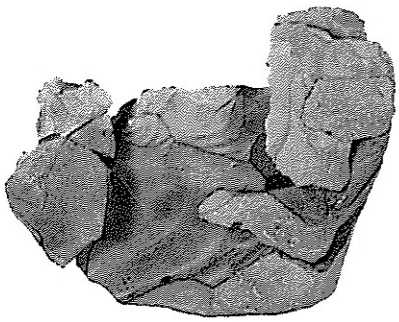


049 土偶　　縄文晩期

山賀遺跡　　（ℓ4.4・w3.3）　文献.268

晩期突帯文土器と弥生Ⅰ様式中段階土器と共伴して河川から出土。生駒山西麓産の胎土を使用し、手づくねによって成形したものである。頭部と四肢はデフォルメされており、乳房、細い腰、胸部から下腹部にかけての妊娠線と思われる１条の沈線から、女性の体部をかたどったものと思われる。府下の低湿地遺跡から検出された初めての土偶である。　（溝川）

050

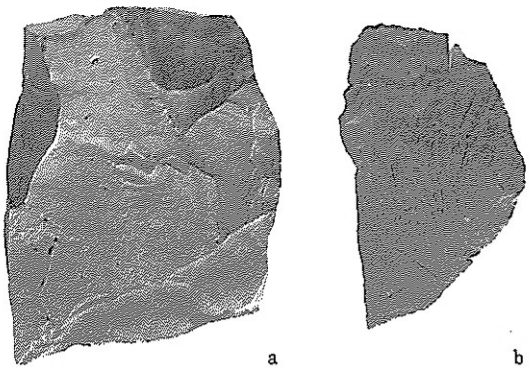


050 石器材（接合資料）　　縄文

山ノ内遺跡　　（ℓ21.2・w18.4）　文献.190

円形状の土坑から出土。13点のサヌカイトによる接合資料である。石核から剥取された剥片の大半が、再加工を受けずに残存していた。石核が作成される際の剥片を連続的に生産する過程を、接合関係から明らかにできる。これ以外にも剥片素材の石核を一定量確認できた。そのなかには２㎝以下の小形剥片の剥離痕がみられることから、石鏃の製作も示唆される。（溝川）

051

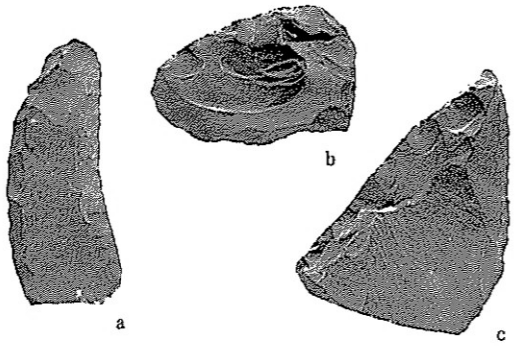


051 石器材（集積資料：盤状剥片）　縄文後～晩期

西大井遺跡　　（b:L15.2・W8.4）　文献.382

縄文晩期以前に相当する黒色粘土層の下から出土。サヌカイト製石器と同盤状剥片計５点が折り重なるような状態で検出した。このうち２点は、石器の素材となるサヌカイト盤状剥片。ａは厚さが３㎝あまりある大形の素材で背および一面に風化面を残す。ｂは不整半円形を呈し、背に風化面を残す。母岩から連続的に薄く割りとったものと考えられる　（大野薫）

052



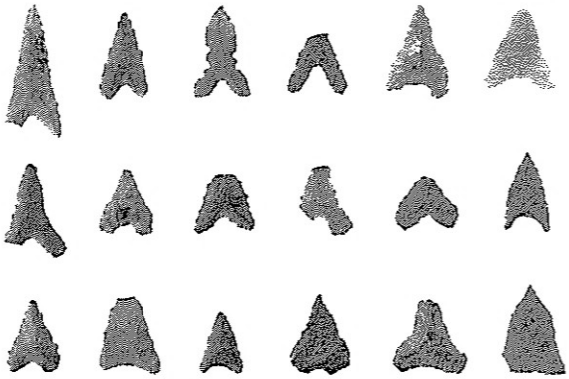
052 刃器（集積資料）　縄文後～晩期

西大井遺跡　（a:L13.4・W5.4）文献.382

051の資料とともに出土。これらは刃器と呼ばれるもので、いずれも盤状剝片の上に置かれていた。

縦長のａは一部に風化面を残すが、両側縁には細部調整が施される。ｂは両面に、ｃは背に、風化面を残す。051・052の石器および盤状剝片は人為的に置かれたものであることは明らかだが、埋納した痕跡は認められない。（大野薫）

053



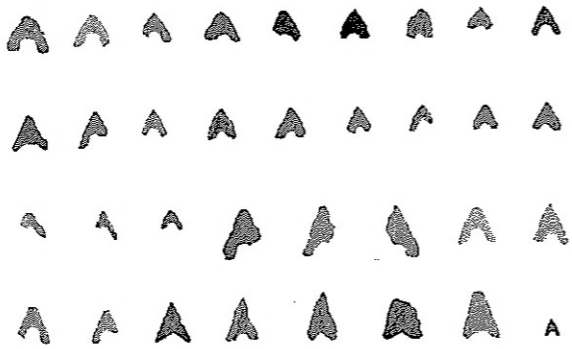
053 石鏃　縄文早～後期

仏並遺跡　（上左:L3.5・w1.1）文献.135

槙尾川左岸の中位段丘下面に広がる当遺跡の、縄文時代集落と墓地の遺構面上には、厚い暗褐色～黒褐色の包含層が認められる。この包含層から多量の石鏃が検出された。凹基無茎式が大半で五角形の平基無茎式も１点（下右）出土している。いずれもサヌカイト製。

一般的にいわれるように縄文後期には石鏃が増加する。（服部）

054



054 石鏃　縄文前期

高向遺跡　（上左:L1.7・W1.8)文献.219

前期に特徴的な小形の凹基式石鏃である。いずれもサヌカイト製。当遺跡では、石器類はすべて包含層から出土し、また遺構は検出されていない。出土した縄文土器はごく微量であったが、石器製作時に生成される剝片や砕片などは膨大な量におよんだ。出土状況の検討により、集落とは異なった場所で、集中的に石器製作がおこなわれたことの証と捉えられる。（西村）

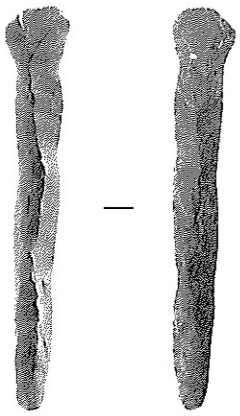
055

055 石鏃　縄文後期

山ノ内遺跡　（上左:L2.1・w1.9)文献.190

当遺跡では弥生時代以降の包含層中から、2800点におよぶ石鏃を含め、長さ0.2～５㎝大の打製石器の剝片が400kg近く出土している。一部黒曜石やチャートなどを含むが、大部分はサヌカイト製で、縄文後期に属すると考えられている。石器製作場の跡と考えられ、剝片は後世の撹乱を受けながらも、一定の範囲に集中する傾向がみられた。（藤田）

056

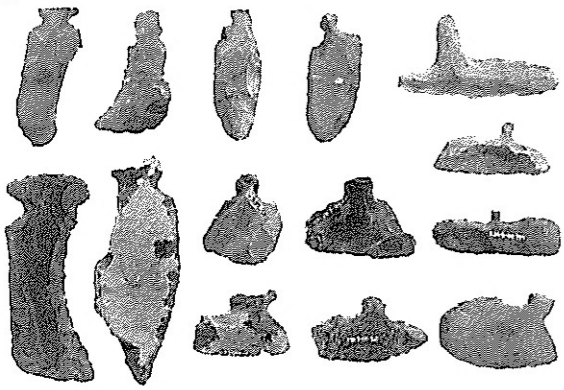


056 石錐（きり）　縄文後期

仏並遺跡　（ℓ6.2・W1.1）　文献.135

竪穴住居廃絶後の一括廃棄土器とともに、石鏃、削器、石錐、敲石（たたきいし）等が出土している。石錐は旧石器時代から認められる骨角器等を穿孔する道具で、縄文時代にはつまみ部をもつのを特徴とする。本例はつまみ部を欠損し、錐部は断面三角形で細長く、先端は回転痕を残している。縄文後～晩期の代表的な形態である。サヌカイト製。　（服部）

057

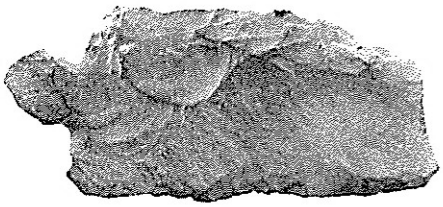


057 石匙（いしさじ）　縄文～弥生

小阪遺跡　（上左：L7.4・W3.5）文献.287

沖積層を形成する青灰色シルト、上層の灰白色～褐色シルト、埋没河川から出土。包含する遺物は旧石器～弥生時代におよぶ。二次堆積または後世に形成された遺物包含層からの出土であり、所属時期は不明である。すべてサヌカイト製であり、横型および縦型のものがある。剥離面や自然面を打面とし、縁辺に微小な剥離をほどこすものも含まれる。　（合田）

058



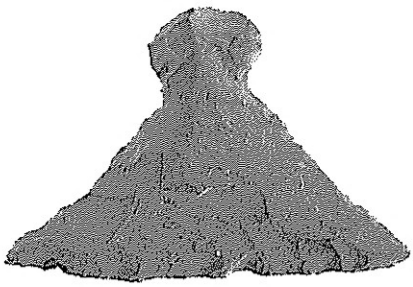
058 石匙　縄文

石才南遺跡　（L6.0・W2.9）　文献.192

大溝から出土。皮剥ぎやナイフとして使用された打製石器である。本例はサヌカイトの剥片の短辺につまみをつくり、長辺の一方に打ち欠きを連ねた刃をつけている。

石匙は、つまみの取付位置で縦型と横型に分類され、地域と時期の関係が云々されている。本例のような縦型石匙は珍しいようである。　（井藤暁）

059



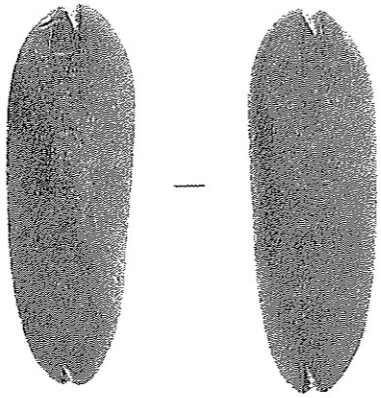
059 石匙　縄文前期

末廣遺跡　（L6.5・W4.3）　文献.364

時期不明の整地土から１点のみ出土。サヌカイト製の横型石匙である。石匙は縄文時代に特徴的な石器であるので当遺跡での同時代の遺構の存在も考えられるが、削平されているため不明である。

なお、本例のような正三角形の横型石匙は前期北白川下層式に特徴的に伴うことが知られている。中部地方以西では中期以降は極めて少なくなる。　（渡辺）

060

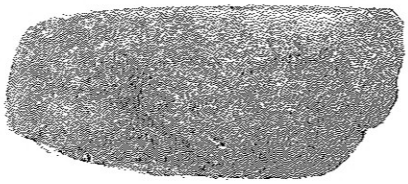


060 石錘（せきすい） 縄文晩期

西大井遺跡 (L7.2・W2.4) 文献.382

晩期以前の層から出土。長楕円形で、上下両端に5～7㎜の切り込みが入る。漁撈用の網などにつける石のおもりである。材質は砂岩だが、和泉砂岩ではなく、産地は不明である。厚さ8.5㎜、重さ29gで暗灰色である。切目（きりめ）石錐は縄文中期後半以降、主に西日本で分布するが、大阪湾沿岸の縄文遺跡では、打ち欠き石錐が圧倒的に多く、切目石錐は少ない。 (川瀬)

061



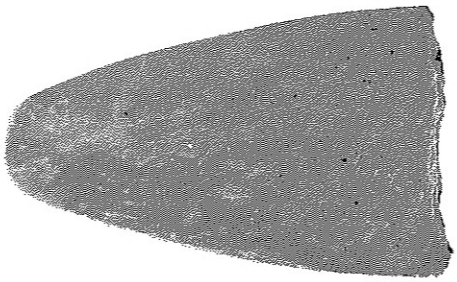
061 石斧 縄文

三田遺跡 (L11.5・w5.2) 文献.181

土坑から出土。材質は蛇紋岩（じゃもんがん）の可能性がある。

主面、両側縁、頭部など全面的によく研磨された定（じょう）角（かく）式磨製石斧で、断面形は明瞭な稜をもつ隅丸長方形である。頭部は主軸に対して傾きを有し、また両刃の刃部も主軸よりかなり傾きがある。刃部には微弱な欠損部分が部分的に認められ、使用時の刃こぼれと考えられる。 (西村)

062

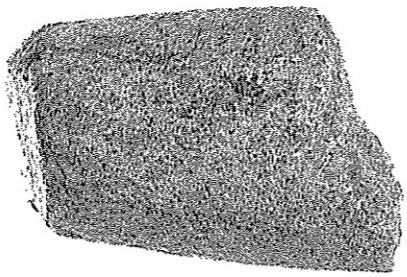


062 石斧 縄文後期

仏並遺跡 (ℓ4.1・w2.5) 文献.331

小土坑から出土。淡緑色を呈しており、破折部などの状況から材質は片岩と思われる。全面によく研磨がいきとどいた小形の定角式磨製石斧で、製形のための細かい擦痕が明瞭に認められる。頭部は丸く作り、両刃に研磨された刃部をもつ。刃部は作用部にあたる端部をすべて欠損しており、使用の際に破折した刃こぼれと考えられる。 (西村)

063

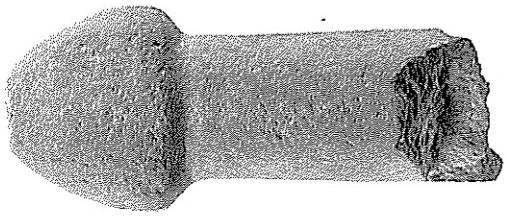


063 石棒（せきぼう） 縄文後期

仏並遺跡 (ℓ26.0・w17.3) 文献.331

竪穴住居中央付近の床面から、横倒しの状態で出土。上半を破折しており、紡錘形を呈したと考えられる軸部の下半だけを残している。全体によく研磨され、断面は円形である。下端には長軸に対して斜めの面を有し、本来はこの部分が地中に掘り据えられたのであろう。府下でも最大級のサイズを誇り、また出土状況が明らかな例として貴重である。 (西村)

064



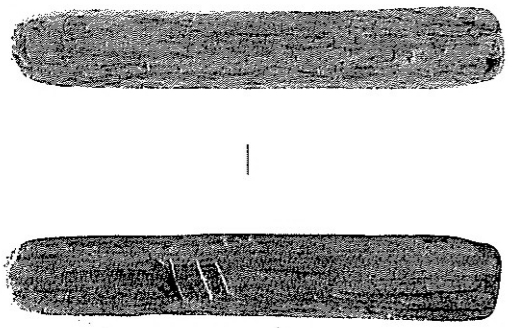
064 石棒　　縄文後期

志紀遺跡　　（ℓ14.8・w5.2）　文献.383

奈良時代の自然堆積砂層から出土。上部のみ遺存しており、先端は三角形の傘状にふくらみをつくり出している。断面は円形に近い楕円形を呈する。緑色片岩製で、全面がよく研磨され、ていねいなつくりである。

府下では、泉佐野市上之郷遺跡出土の石棒とならぶ優品で、その形態や断面形からみて後期のものと考えてよかろう。　（大野薫）

065

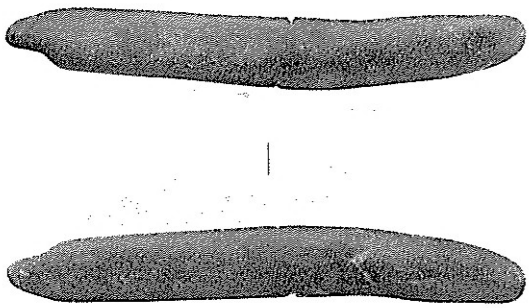


065 石棒　　縄文晩～弥生前期

小阪遺跡　　（L28.7・W5.0）　文献.287

沖積層を形成する灰白色～褐色シルト層から出土。断面形が長円形を呈する板状のもので、両端ともに摩滅し、折れはみとめられない。表面はやや摩滅しなめらかで、線刻、敲打痕、赤色顔料はみとめられない。石材は結晶片岩である。近畿地方の縄文晩期に多い遺物であり、本例は遺構には伴わないものの、当該期の祭祀関連遺物として興味深い。　（合田）

066

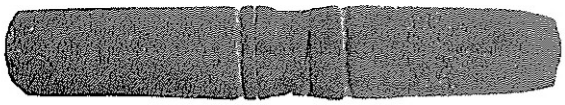


066 石刀　　縄文中期

西浦橋遺跡　　（L20.6・w2.9）　文献.93

縄文中期末葉に相当する自然河川から出土。輝石安山岩製で、やや内反りとなっている。背は面をなすように、側面は丸みを残しながらも刃部をつくり出すように、研磨され、断面形は丸みをおびた五角形を呈する。背と刃部には、中程からやや下がったところに各１条のＶ字の沈線が刻まれていて、柄と刃部の境界を表現しているとみられる。　（大野薫）

067

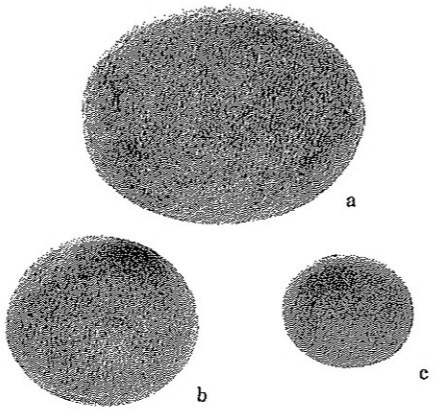


067 石刀　　縄文晩期

石才南遺跡　　（ℓ17.2・w3.1）　文献.192

近世に埋没した大溝から出土。肌理の細かい砂岩状石質のていねいな研磨品である。中央部にくり込みを入れ、各１本の凹線で画す。両端の棒状部の形態は対称的ではなく、片方が使用による再研磨のような痕跡を示す。断面は少し楕円形なので石刀とみられるが、むしろ乳棒状の工具として使用されてもおかしくない形状である。　（井藤暁）

068



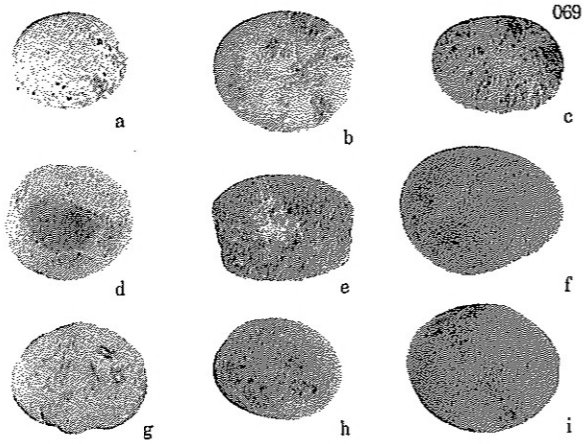
068 叩石（たたきいし）　縄文中～後期

仏並遺跡　(a:L14.1・W18.3) 文献.331

いずれも土坑から出土。河原石などの円礫を用いた叩石である。大きなaは片面に敲打痕があり、台石として用いられたものかもしれない。b・cは両面および側面にも敲打（こうだ）痕があり、ちょうど掌におさまる大きさで、叩石として用いられたものであろう。

当遺跡ではほかにも多量の磨石（すりいし）・叩石類が出土している。（大野薫）

069



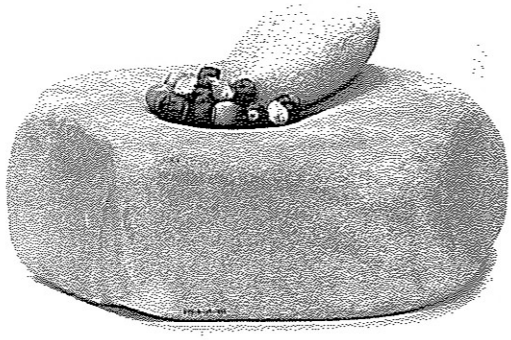
069 叩石　縄文後～晩期

山ノ内遺跡　(a:L9.2・W7.8)　文献.190

包含層から出土。これらの出土地点付近の包含層には、縄文後期～晩期にかけての遺物が多く含まれる。

これらの叩石には平面形が円形と楕円形のものがある。敲打痕がみられる部位は側辺と平坦面であるが、平面が楕円形のものには敲打痕がみられない。aは粗面岩（そめんがん）、ほかは砂岩製で和泉砂岩と思われる。当遺跡の石材は近隣や紀ノ川採取のものが主である。（田中龍）

070



070 石皿　縄文後期

小阪遺跡　(ℓ26.0・w30.6)　文献.287

沖積層を形成する青灰色シルト中の土器群に混って出土。上面中央が中心に向かって傾斜をもってくぼみ、この部分に磨滅がみとめられる。側面には、石材の辺にそって磨滅がみとめられる。裏面は平面をなし、端部に敲打痕とみられるくぼみがある。砂岩製。当遺跡では、磨石や堅果類が出土しており、植物食の加工に関連する可能性をもつ遺物である。（合田）

071

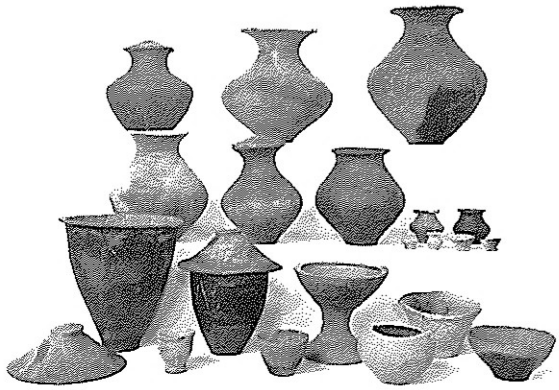
071 木製容器　縄文晩期

山賀遺跡　(bd8.0～9.0・h8.0) 文献.83・268

晩期の滋賀里Ⅰ～Ⅱ式の土器片少量を検出した河川から出土。磨耗が著しく、上半部を欠損し、全体の形状は不明であるが、突出した明確な底部をもつ。樹種はクスノキで、横木取り。

弥生時代になると、四角や長方形で四脚がつく形態の木製容器が出現し、縄文時代の本例とは様相が異なってくる。（畑）

072



072 弥生土器一括（第Ⅰ様式）　弥生前期
山賀遺跡　（上右:RD15.4・H41.0）文献.71

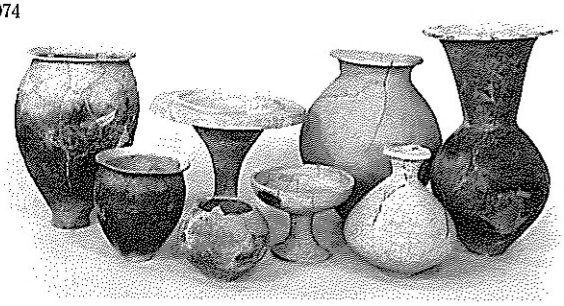
当遺跡の弥生前期の主要な遺構（河川）出土品を中心とした、壺、甕、鉢、無頸壺、高杯、壺蓋、甕蓋、ミニュチュア土器の集合である。当遺跡の前期中段階の様相をほぼ示している。器種構成としては、甕が5割を占め、壺の頸体部文様は沈線文少条が多く、甕は口縁部に刻み、体部に沈線文少条を施すものが多い。生駒山西麓産の胎土のものが7割を占める。　（畑）

073

073 弥生土器一括（第Ⅱ様式）　弥生中期
山賀遺跡　（上右:RD23.3・H30.0）文献.71

中期初頭（第Ⅱ様式）に属する主要な器種を並べたものである。一部は方形周溝墓や土壙墓に供献された土器であるが、大半は包含層からの出土。全体に器壁が厚く、外面をていねいに磨いたものが多い。甕と鉢に煤付着が多くみられる。壺には無文、櫛描文がみられ、口縁部の欠けた壺は頸から肩にかけて縦方向の流水文が表裏2箇所に施されている。　（村上富）

074



074 弥生土器一括(第Ⅲ様式古段階)　弥生中期
亀井遺跡　（右端:RD22.5・H38.6）文献.71

中期でも凹線文を伴わない段階（第Ⅲ様式古段階）の土器が溝から一括出土している。この時期は土器の器種が豊富になるが、そのうちの主要なものをとりあげた。左から甕2点、無頸壺1点、高杯2点、壺3点である。頸の太く短いタイプの壺は無文、それ以外の壺には櫛描文を施し、直線文間を1条ヘラミガキしたものもみられる。　（村上富）

075

075 弥生土器一括（第Ⅲ新～Ⅳ様式）　弥生中期
瓜生堂遺跡・若江北遺跡　（上右:RD16.6・H60.0）文献.71

中期でも後半（第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式）に属する主要な器種を集めたものである。出土遺構は住居、溝、土坑、方形周溝墓、包含層等さまざまである。この時期は生駒山西麓産品に櫛描文が引き続き多用されるが、そのほかに凹線文を施した土器、脚台を多用する土器や器台の出現がみられる。中段中央の小形台付壺は近江からの搬入品かと思われる。　（村上富）

076

076 弥生土器一括（第Ⅴ様式前半）　弥生後期
亀井遺跡　（右端:RD12.5・H29.3）　文献.71

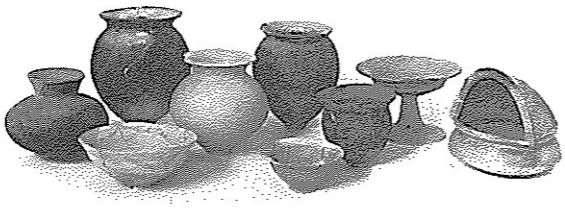
溝から出土した第Ⅴ様式前半の土器群である。長頸壺の安定的出土、甕外面のハケ調整仕上げ、高杯脚部の直線的な広がりなど、当該期の特徴を示している。第Ⅴ様式前半、特に前葉の土器は中期に発達した櫛描文やヨコナデ手法の退化や型式組成の激変など、土器様式に大きな変化がみられる。当該期の社会変化との関連が注目される。（若林）

077

077 弥生土器一括（第Ⅴ様式後半）　弥生後期
新家遺跡・瓜生堂遺跡（右端:RD15.4・H17.1）　文献.71

２遺跡から出土した第Ⅴ様式後半の土器である。広口壺や二重口縁壺の安定的出土、手焙形土器の出現、甕の外面タタキの顕著化と球胴化、高杯脚部の曲線的広がりなどの特徴があげられる。器種組成や各型式の形態などのいずれの要素も、次の庄内式や布留式土器を生みだす基盤となると考えられる。

（若林）



078

078 弥生土器（壺）　弥生前期
池島・福万寺遺跡　（RD14.5・H26.8）　文献.290

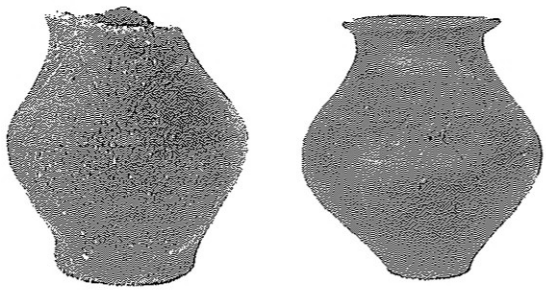
厚さ１ｍもの洪水砂の中から出土。頸部と肩部に段を有し、体部が膨らむプロポーションを呈する。前期のなかでも比較的古い段階の特徴をもつ土器である。本例を含む洪水砂中からは木製農具、石庖丁などが出土し、初期の水稲農耕の存在を示しているが、この土器は当遺跡の水稲農耕開始時期を示すものである。

（井上）

079

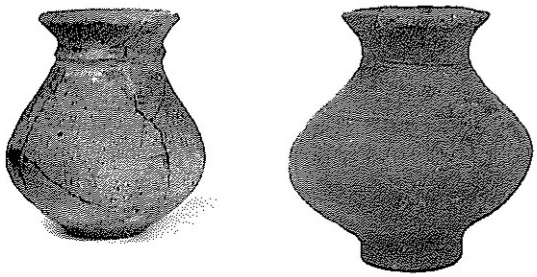
079 弥生土器（ミニチュア壺・壺）　弥生前期
山賀遺跡　（a:h10.4,b:H22.4）文献.82・83・268

ａは前期Ⅰ遺構面の溝から出土。ミニチュア品である。頸部と体部にヘラ描き沈線文を２条施し、その間に山形文と円弧文をヘラで描く。生駒山西麓産の胎土である。ｂは河川から出土。前期中段階の土器で、頸部に沈線文１条、体部に段上沈線文１条を施し、外面全体に黒色物質を塗り、赤彩で弧文を体部に描く。生駒山西麓産の胎土である。（畑）



a　b

080

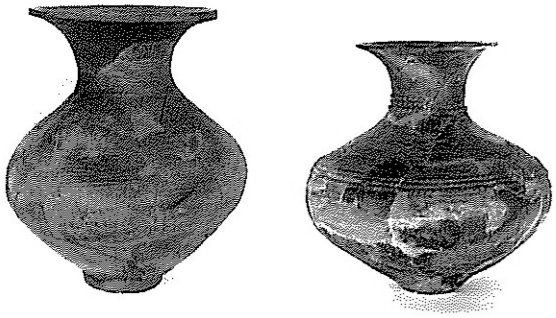


a　　b

081

a　　b

082



a　　b

083

a　　b

080 弥生土器（ミニチュア壺）　弥生前期

城山遺跡(a)山賀遺跡(b)　(a:H12.2,b:H10.8) 文献.82・268

ともにミニチュア品である。

aは縄文晩期と弥生前期の土器を含む包含層から出土。頸部に貼付突帯文を施し、体部にヘラ描きで沈線文3条と流水文様を施す珍しいものである。また、底部直上にも沈線文2条を施す。低湿地産の胎土である。bは河川出土。頸部に沈線文1条、体部に沈線文2条を施す。生駒山西麓産の胎土である。　（畑）

081 弥生土器（甕）　弥生前期

山賀遺跡　(a:H25.8,b:H20.4) 文献.83・268

包含層から出土した中形品である。倒鐘形の器形を呈し、如意形の口縁端部には刻目を有する。頸部は、aには2条のヘラ描沈線文、bには4条の沈線文間に平行斜線文が施されている。また、aの底部中央には焼成後の穿孔がみられ、甑として使用されていた。第Ⅰ様式中段階後半に属し、煮沸容器でありながら文様で飾られる本様式の典型的な資料である。　（岡本茂）

082 弥生土器（壺）　弥生前期

美園遺跡　(a:H28.4,b:H33.8)文献.104・268

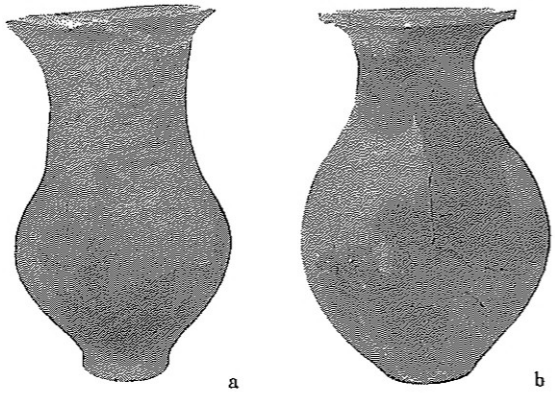
aは土坑、bは溝から出土。頸部がやや絞られるのに対し、口縁部の開きは大きく、体部も強く張り出している。文様は多条化、装飾文様が著しく、aには10条の沈線文が2帯、bには沈線文とその上下に貼付突帯文が施されている。第Ⅰ様式新段階後半に属し、前半からの器形や文様の変化を知ることができる。bの突帯上には布巻棒圧痕がみられる。　（岡本茂）

083 弥生土器（甕）　弥生前期

美園遺跡　(a:H21.8,b:H23.3)文献.104・268

ともに土坑から出土。aは口縁部に刻目をもち4条の沈線が描かれる。bは刻目もなく全くの無文である。どちらも前期後葉の所産であるが、沈線文の多条化が進む一方で、無文甕の比率も増える。無文甕は、中期にはいると主流を占めるが、その傾向はすでに前期後葉の段階からはじまりつつある。また、河内地域の地域性がはじまる時期でもある。　（若林）

084



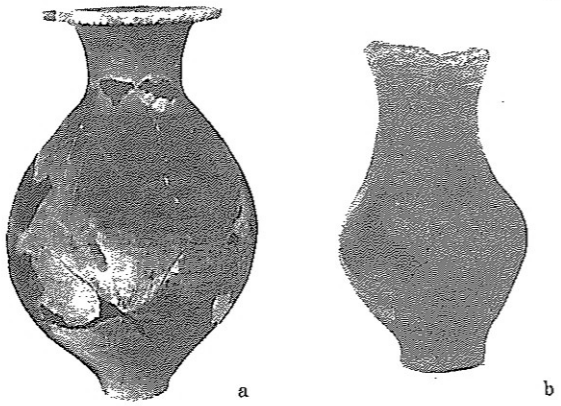
a　b

084 弥生土器（壺）　弥生中期

山賀遺跡　(a:H24.4,b:H34.8) 文献.83

aは方形周溝墓盛土中の地山面上から横倒しの状態で検出され、bは包含層出土。中期初頭（第II様式）の壺である。両者ともに口縁端部が肥厚せず器壁は厚めで、ヘラミガキ調整がていねいに施されている。頸の長いaは角閃石を含まず、頸から体部にかけて直線と波状の櫛描文が施されており、頸のやや短いbは角閃石を含み、無文である。（村上宮）

085



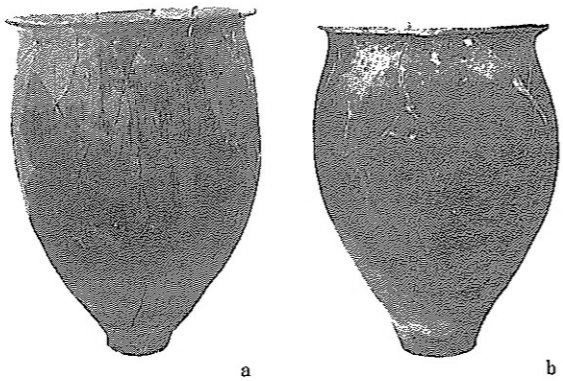
a　b

085 弥生土器（壺）　弥生中期

山賀遺跡　(a:H48.6,b:H32.7) 文献.83

ともに包含層から出土。第II様式の広口壺である。aは、口縁内面にハケ調整がみられ、頸～体部に櫛描直線文と櫛描波状文が交互に施文される。淀川水系からの搬入品の可能性が高い。bは、直線文の下に縦方向に連続する流水文が施されている。こちらは河内地域内で製作されたと考えられるが、ほかに例をみない珍品といえる。（若林）

086



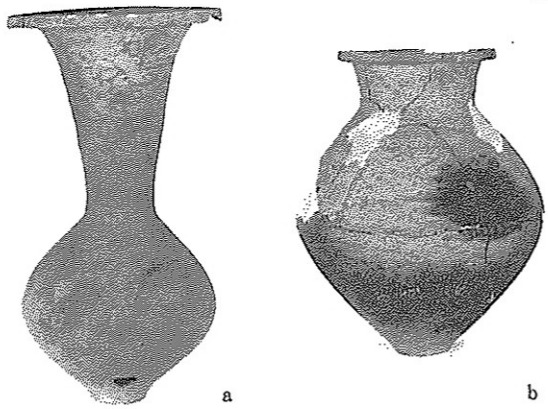
a　b

086 弥生土器（甕）　弥生中期

山賀遺跡　(a:H28.0,b:H20.7) 文献.83

ともに第II様式の甕である。aは包含層から出土。内外面ともヘラミガキで仕上げられ、河内形甕と呼ばれる河内地域固有型式である。bは土坑から出土。外面と口縁部内面がハケ調整で仕上げられ、口縁端部に刻み目が施されると同時に、底外面に木葉痕が押圧されている。淀川水系から河内地域への搬入品と思われる。（若林）

087



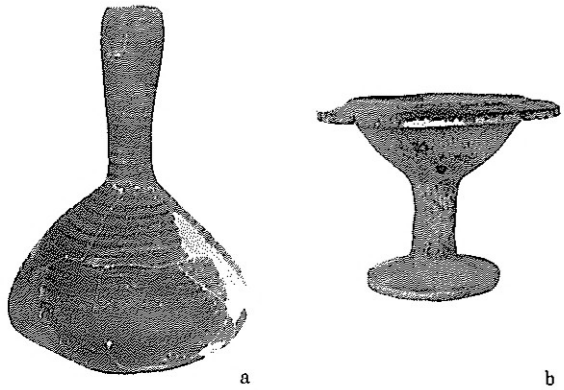
a　b

087 弥生土器（壺）　弥生中期

亀井遺跡　(a:H47.0,b:H38.9) 文献.86

ともに土坑から出土。aは球形の体部に細くすぼまった長い頸部と、大きく広がる漏斗（ろうと）状の口縁部を作りだし、bはやや丈長の体部に筒状の頸部を形作り、短く水平にのびる口縁部をもつ。その形態や、直線文を主体とする櫛描文が施されていることから、中期中葉（第III様式）のなかでも最も古い段階に位置づけられる土器である。（三好）

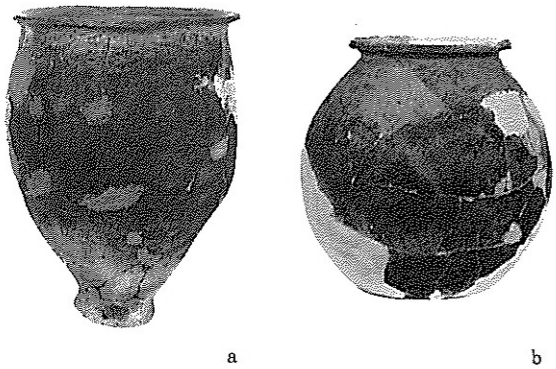
088



088 弥生土器（壺・高杯）　弥生中期
亀井遺跡　(a:H28.0,b:H18.0) 文献.86

087と同じ土坑から出土。aは算盤玉形の体部に細くしまった筒状の頸部をもつ細頸壺、bは筒状の脚部に大きく広がる杯部と水平にのびる口縁部を形作った高杯である。壺aは上半に櫛描直線文と、最下段に櫛描扇形文をあしらい、各文様間にはヘラミガキが施されている。土器の色調が暗いこととも相まって、非常に美しいコントラストをみせる土器である。（三好）

089

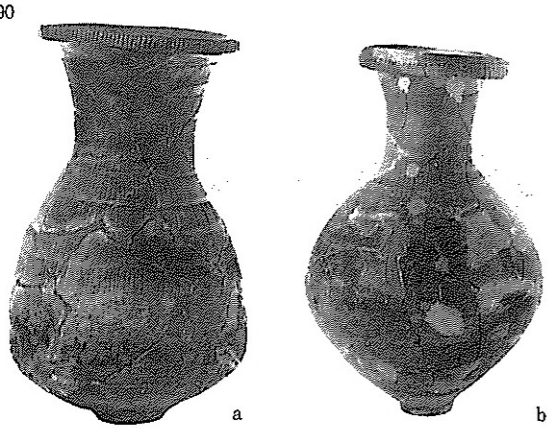


089 弥生土器（甕）　弥生中期
亀井遺跡　(a:H21.6,b:H21.7) 文献.86

aは溝、bは土坑から出土。第Ⅲ様式前半に属する。aは、外面はヘラミガキ調整で仕上げられ、河内形甕の特徴を残している。bは口縁端部がハネ上げ気味で体部が大きく膨らむ形態をとり、瀬戸内系甕と呼ばれる型式である。第Ⅲ様式には、このような異なる2系統の甕が共存することによって構成される。

（若林）

090



090 弥生土器（壺）　弥生中期
瓜生堂遺跡　(a:H38.5,b:H52.5) 文献.59

aは土坑から、口縁を北に向け横たわった状態で出土。bは溝から出土。ともに第Ⅲ様式の広口壺で、生駒山西麓産のものである。文様は、口縁端部から体部上半にかけて櫛描簾状文や櫛描直線文等を施しており、特にaは、文様間に磨研線を加え、装飾豊かな土器となっている。

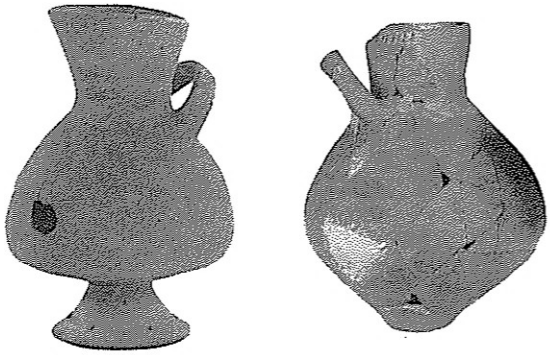
（田渕）

091

091 弥生土器（壺）　弥生中期
瓜生堂遺跡　(RD14.2•H59.2)　文献.59

土坑から、口縁を北に向け横たわったかたちで出土。第Ⅲ様式の細頸壺で、生駒山西麓産のものである。口縁端部は内湾ぎみにおわり、口縁部上端は明瞭な面をもつ。内面は、頸部から体部上半に粘土接合痕を5本残している。体部は腰が張っており、文様は、口縁部から体部上半にかけて櫛描列点文と櫛描簾状文をやや粗く施している。（田渕）

092



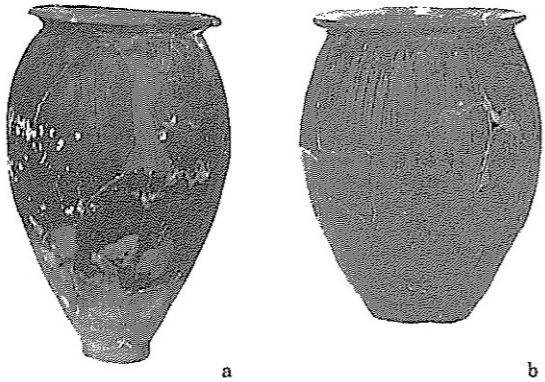
a　b

092 弥生土器（水差）　弥生中期

亀井遺跡　(a:H43.4,b:H25.2) 文献.86

aは溝の底から浮いた状態で出土。方形周溝墓の供献土器とみられるもの。bは土坑から出土。両個体ともに把手をもち、aは台付きで体部に穿孔されている。液体容器である水差は、第Ⅲ様式初め頃から出現し、第Ⅴ様式にはいると消滅していく。畿内南部を中心にしてみられる傾向がある。aは第Ⅳ様式、bは第Ⅲ様式のものである。　(田渕)

093



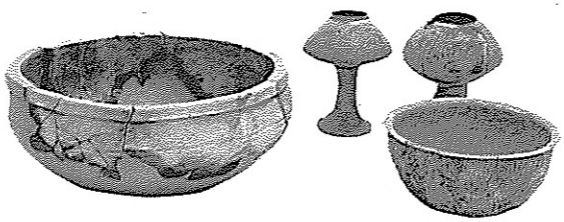
a　b

093 弥生土器（甕）　弥生中期

亀井遺跡　(a:H26.4,b:H26.9) 文献.86

ともに土坑から出土。第Ⅲ様式後半に属する。aは瀬戸内系甕で、外面ハケ調整ののち、下半部のみヘラケズリ後ヘラミガキ調整をおこなう。bは外面全体がヘラミガキ調整で仕上げられる河内形甕であるが、口縁部に面をもち体部が膨らむ形態となる。これは、河内形甕に瀬戸内系甕の影響がおよんだ結果の形態変化と考えられる。　(若林)

094

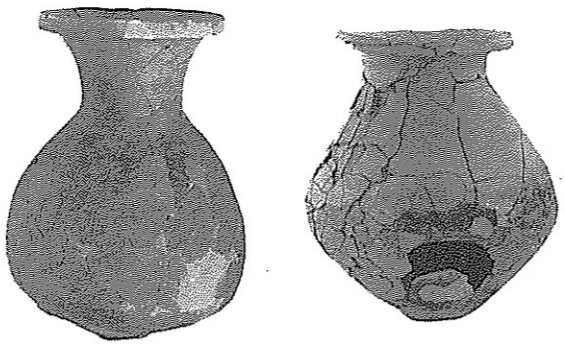


094 弥生土器（鉢ほか）　弥生中期

東奈良遺跡　(右下:rd26.8•h12.2) 文献.386

方形周溝墓は弥生中期の近畿を代表する墓で、周溝からは土器が多量出土する。その多くは本来盛土の上に供献されていた土器が転落したものであり、本例もその一例で、中期後半に属する。器種には鉢、無頸壺のほか、広口壺、甕と多岐にわたるが、一般集落から出土する土器とほとんど変わらない。被葬者が突出した支配者ではないことを示す証拠ともいえる。(山元)

095



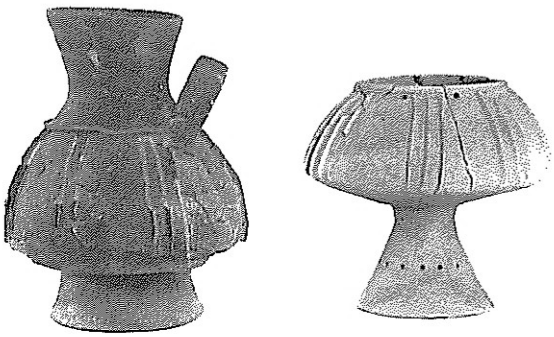
a　b

095 弥生土器（壺）　弥生中期

巨摩遺跡　(a:H40.6,b:H33.8)文献.359

ともに方形周溝墓の周溝から出土。aは下方に屈曲部をもつ球形の体部から大きく広がる口縁部に続くもの、bはやや丈長の体部から緩やかに外反する口縁部を作りだすものである。両者とも生駒山西麓産の胎土で製作されるが、前者は全面に櫛描簾状文を施す西麓型土器、後者は口縁部に櫛描波状文、体部に櫛描直線文を施す非西麓型土器で、両極相を示す。　(三好)

096



a　b

096 弥生土器（水差・壺）　弥生中・後期

巨摩遺跡　(a:H20.2,b:H17.0)文献.359

aは方形周溝墓の溝、bは土坑から出土。aは高台状の脚部を付し、櫛描文をはじめ各種文様で華美に彩られた台付水差、bは櫛描文を失い刻目文のない棒状浮文が貼付された台付無頸壺。aが各種の施文技術を駆使されて加飾されるのに対し、bは櫛描文を失い、形骸化した棒状浮文のみが遺存している。両者の間に中期から後期への型式変化が読みとれる。　(三好)

097

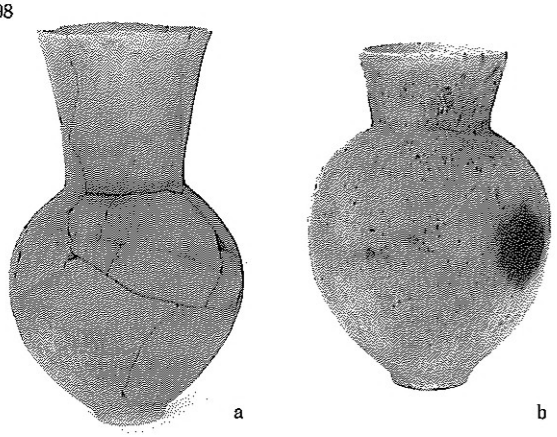
a　b

097 弥生土器（高杯・甕）　弥生中期

巨摩遺跡　(a:H21.2,b:H22.0)文献.359

ともに方形周溝墓から出土。aは高杯で、筒状の脚部から大きく広がる杯部をもち、口縁部は水平にのびたのち、垂下させる。垂下口縁をもつ高杯は、無文であることが基本であるが、この土器には凹線文が施され、中期の規範が崩れつつある段階に属するものとみられる。bは甕で、表面にはタタキが観察され、体部には板状工具による刻目文がめぐらされる。　(三好)

098



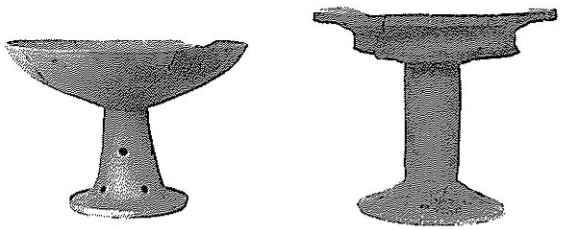
a　b

098 弥生土器（壺）　弥生後期

亀井遺跡　(a:H32.4,b:H18.2) 文献.86

後期前半の井戸から完形およびほぼ完形の壺が一括投棄された状態で出土しており、そのうちの2点である。aは長頸壺、bは短頸壺である。両者はともに、球状の体部をもち、頸部から口縁にかけてほぼ直線的に斜め上方にのびる。底部はわずかに上げ底状となる。また、外面調整は縦方向のヘラミガキが施され、無文である。　(村上富)

099



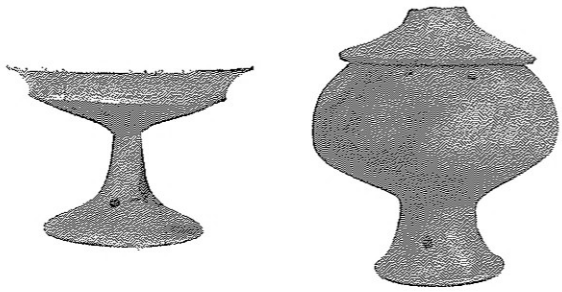
a　b

099 弥生土器（高杯）　弥生後期

亀井遺跡　(a:H12.8,b:H20.4) 文献.86

ともに溝から出土。第Ⅴ様式前半に属する。aは、椀状の杯部をもち、脚部は直線的に広がり、2段に透かし孔が穿たれる。bは、杯部が二重口縁状で、面をもつ屈曲部と口縁部には竹管文と赤彩が施され、杯部下半には小孔が穿たれている。脚部は柱状で裾部のみ穿孔される。aは日常用、bは儀礼に用いられた高杯であろうか。　(若林)

100



a　b

100 弥生土器（高杯・壺）　弥生後期

亀井遺跡　(a:H21.5,b:H12.6) 文献.86

aは大溝から出土。後期末の高杯である。杯部から屈曲した口縁部は外反し、脚は途中から屈曲して開く。口縁部の上下に1条と3条、脚裾に5条の擬凹線文を施している。bは環濠と考えられている溝から出土。後期前半の台付無頸壺およびその蓋である。台付無頸壺の口縁部は小さく外反する。蓋、壺ともに外面はヘラミガキ調整である。　(村上富)

101

a　b

101 弥生土器（甕）　弥生後期

亀井遺跡　(a:H22.0,b:H22.1) 文献.86

aは環濠と考えられている溝の下層から、木器、特殊器形の丹彩土器、底・体部穿孔土器等とともに出土。後期初頭に属する。調整は体部内面に、瀬戸内地方の影響かヘラケズリが施されている。bは大溝から出土。後期末に属する。断面には分割成形の際の粘土接合痕を残し、調整は体部外面にタタキ、内面にハケが施されている。　(村上富)

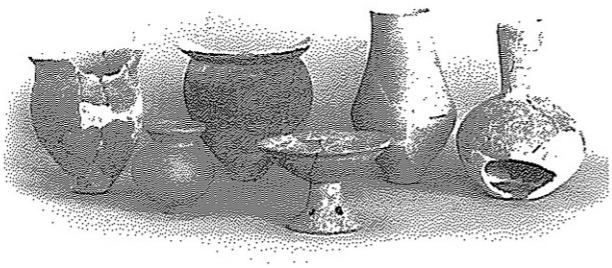
102

102 弥生土器（手焙形）　弥生後期

瓜生堂遺跡　(RD15.6・H17.1)　文献.59

流水堆積層から出土。突帯部が一部欠けるのみで、そのほかは全く破片化していない完形品である。覆部外面には綾杉状の線刻が一面に施され、鉢部上半にも綾杉状線刻文様がみられる。覆部内面には煤が付着し、土器内部で火を燃やした痕跡がみられる。完形品における使用痕跡は、機能類推のうえで貴重な資料といえる。　(若林)

103

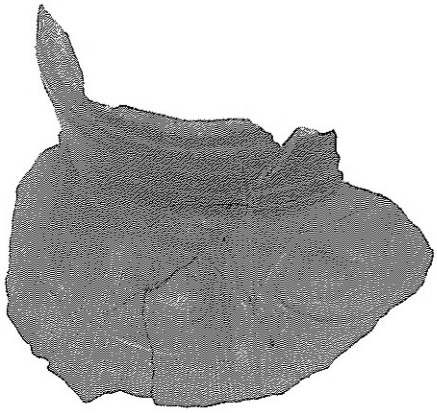


103 水田祭祀土器　弥生後期

池島・福万寺遺跡　(右端:RD5.8・H23.8) 文献.264

後期水田面から出土。器種としては甕が多く、壺、高杯などもある。なかには口縁部を打ち欠いたり赤彩を施す土器もある。水田では、大畦畔内、水口、水路内、井堰付近から土器が出土することがある。こうした土器の多くは、水田でおこなわれた農耕祭祀の痕跡を示すと考えられ、水田における人々の行動を復原するうえで重要な資料である。　(井上)

104



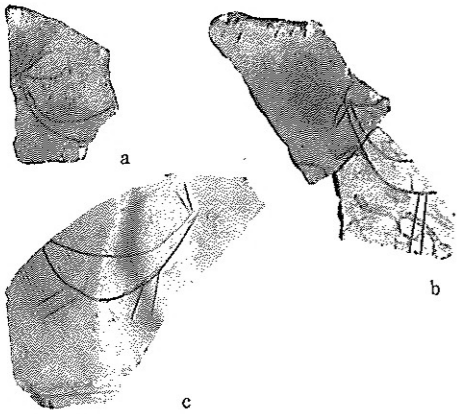
104 邪視文土器　　弥生中期

亀井遺跡　　(rd10.8・h8.0)　　文献.67

溝から、中期後半から後期初頭にかけての土器とともに出土。口縁部に凹線文をめぐらせることや形態から、水差に類似した器形に推定でき、その体部上半に、線刻と押捺を組み合わせ、目を中心とした顔を表わす。その形相が銅鐸や中国の青銅器にみられる邪視文を想起させ、邪視文土器と呼称される所以である。

(三好)

105

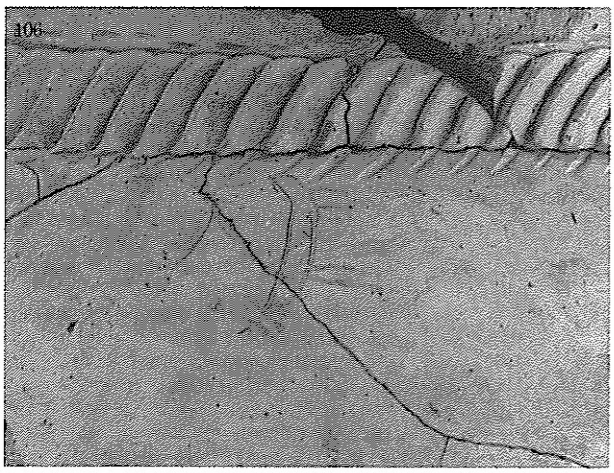


105 絵画土器　　弥生中期

亀井遺跡　　(b:ℓ9.8,c:w12.0) 文献.63・71

a・bは包含層から出土。同一個体片である。中期後半の壺に、立派な角の生えた複数の鹿を頭位を左にして描く。cは溝から出土。中期後半から後期のものと考えられる脚台部に、野を駆けめぐっているような躍動感あふれる鹿を頭位を右にして描いている。これらの出土した当遺跡は、河内平野の同時期の遺跡のなかでも絵画土器の出土点数が多い。　(三好)

106



106 絵画土器　　弥生中期

亀井遺跡　　(ℓ14.8・w7.8)　　文献.316

土坑から出土。丈長の体部を有する中期の壺に描かれた鹿で、全長2㎝余りの非常に小さな絵画である。簡素な表現法をとりながらも、立派な角を持った牡鹿を左(下)側から表し、手慣れた人物により描かれたと推測される。この絵画の最大の特徴は、頭位を下にして描いていることで、銅鐸絵画の表現法にままみられる技法と通ずる部分があり注目できる。　(三好)

107

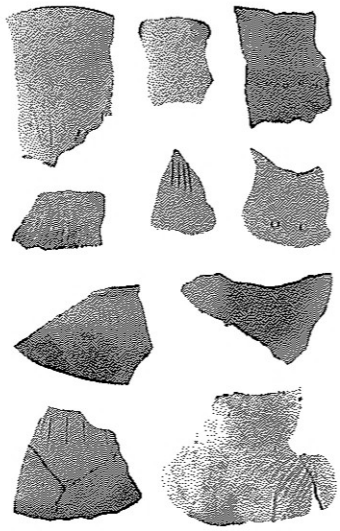
107 絵画土器　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　(ℓ5.6・w4.0)　　文献.59・71

2基の方形周溝墓間の周溝から出土。線刻画の描かれた大形壺の体部破片。線刻画は土器の表面にヘラ状具で描かれ、4本のほぼ等間隔の柱、その上にフラットな床と上方へ斜めに開く屋根を表現する。おそらく高床式建物と考えられる。儀礼的な建物もしくは倉庫の可能性が高い。

(野田)

108



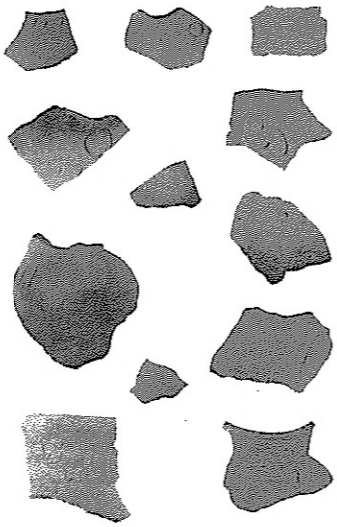
108 記号文土器　弥生後期

亀井遺跡　(右上:ℓ9.6,左下:ℓ9.6) 文献.71・101

溝や包含層から出土。弥生後期に盛行する記号文である。壺や甕の頸部や体部に、ヘラ描きによって施すものや、竹管状の工具をスタンプするものがある。スタンプ文には装飾的な意味合いが強いが、ヘラ描きのものには文字以前の原文字としての意味合いがあったと考えられている。これらのほとんどが溝から出土していることはその使用目的を考えるうえで注目される。

(伊藤)

109



109 記号文土器　弥生後期

亀井遺跡　(左下:ℓ11.2,右上:w 9.0) 文献.71・101

溝や包含層から出土。第Ⅴ様式の記号文土器片である。壺の体上半部や頸部に施される。線刻、浮文、竹管文などによるものが多い。右写真には線刻が主体を占めているが、実際の出土例でも線刻が多数を占める。矢先に似た形状、U字形、平行線などが線刻記号文の中心であり、一定のパターンの存在が指摘されている。

(若林)

110

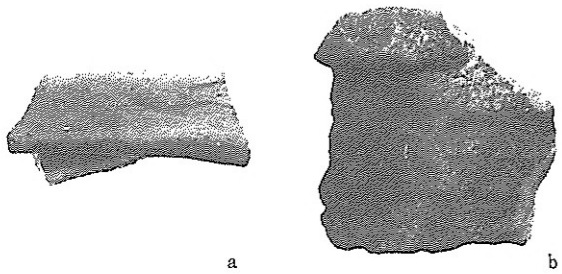
110 スタンプ文土器　弥生中期

巨摩遺跡　(RD14.1・H33)　文献.64・71

竪穴住居周辺部の土器堆積中から出土。普通の広口壺であるが、体部上半全面に施された鹿の陽刻スタンプ文はめずらしい。写真ではわかりづらいものの、スタンプは、縦最大長1.8cm、横最大幅2.4cmの大きさで、右上り斜方向の下から上へ1個ずつ並べられている。復原すれば19列、1列6頭を数え、左方向に大群の鹿が行進する。狩猟祭祀用土器であったのか。

(井藤暁)

111



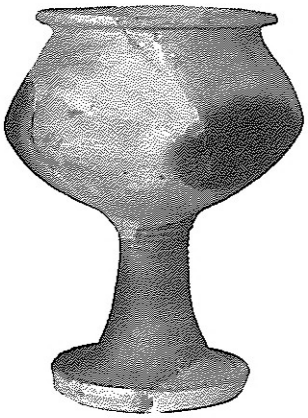
111 朝鮮系無文土器　　弥生中期

亀井遺跡　　(a: ℓ4.5,b: ℓ4.8)　文献.86

aは中期後半の溝から、bは方形周溝墓から中期中葉の土器とともに出土。近畿地方の同時期の遺跡からは、誰しもが朝鮮系無文土器と認識できる例は出土していないが、形態や製作手法が類似していると報告される土器は少なくはなく、この2例は、そのなかでも酷似しているといえる資料である。

(三好)

112



112 瀬戸内系土器　　弥生中期

巨摩遺跡　　(RD13.8・H22.5) 文献.64・71

沼状遺構下層から出土した台付無頸壺である。算盤玉状の体部に、甕と似た口縁部と、高杯と同じような脚がつく。脚には2箇所にラセン状にめぐる凹線文と、裾寄りに刺突文(しとつもん)が施されている。脚柱から脚裾にかけての形態および文様は瓜生堂遺跡では比較的よく目にするタイプであるが、中期末頃の山陽地方に似た資料が認められる。　(村上富)

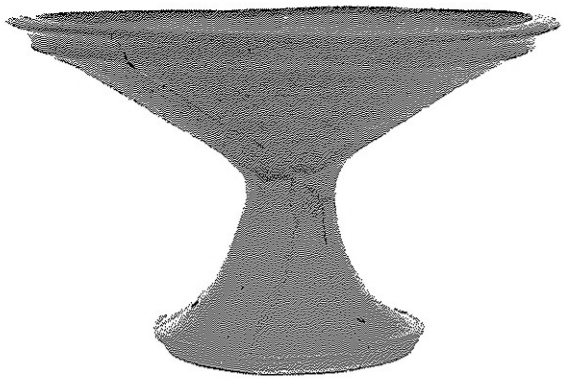
113

113 瀬戸内系土器　　弥生後期

巨摩遺跡　　(RD15.4・h34.7) 文献.64・71

沼状遺構上層から出土。甕に似た口縁部をもち、頸部は短く直立し、肩部は大きく張る広口壺である。上下に拡張された口縁端部には3条の凹線文と、その上から円形竹管文が施されている。体部には斜め方向の刻み目文様が施されている。体部内面はヘラケズリ調整である。形態および文様、調整から後期初頭の備後地方の特徴を示すものであろう。　(村上富)

114



114 瀬戸内系土器　　弥生中期

亀井遺跡　　(RD30.0・H31.2)　文献.101

溝から、赤色顔料を塗布した器台やそのほかの完形土器とともに出土。屈曲して立ち上がる口縁上端部は内外に拡張され、その部分に凹線文が3条、脚裾にも凹線文が2条施されている。杯部外面および内面には斜めないし横方向の分割ヘラミガキが施されている。弥生後期初頭の瀬戸内地方にみられる特徴的な高杯である。　(村上富)

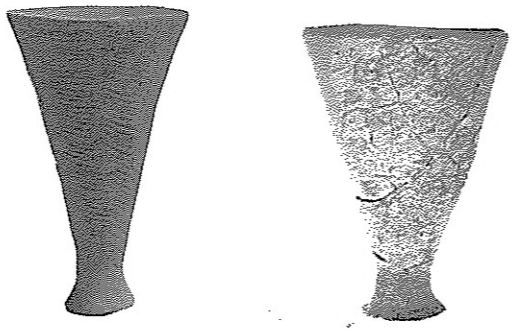
115

115 被熱変形土器　弥生前期

美園遺跡　(MD37.6・h28.8) 文献.104・268

前期後半～中期初頭遺構面の土坑から出土。頸部以下のみ遺存する。熱を受けて変形し、特に変形の強い部分では、縮んだり、亀裂を生じたり、発砲がみられる。このような変形は、少なくとも1200℃前後で受熱されなければおこらないことから、火災などの偶発的な事故、焼成時の過度の高温化、青銅器鋳造との関わりなどが考えられる。　(野田)

116



a　b

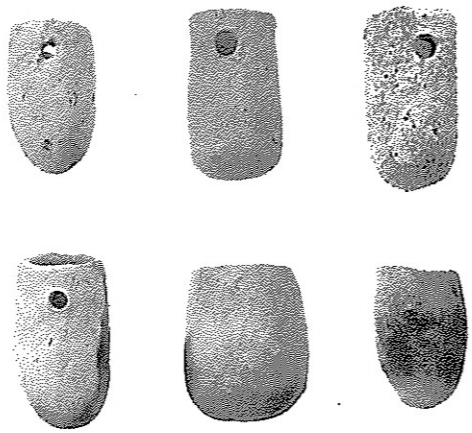
116 製塩土器　弥生後期

下田遺跡(a)・西大路遺跡(b) (a:H25.3,b:H19.0)　文献.189・381

ともに自然河川から出土。2点とも高い脚台を付し、脚台の裏側から粘土を充填する技法を用いている。また、外面にはタタキが施される。大阪湾沿岸で土器製塩が始まったのは弥生後期である。製塩土器が完形で出土することは珍しく、本例はその草創期を代表する典型的かつ良好な資料であるといえる。

(奈加)

117

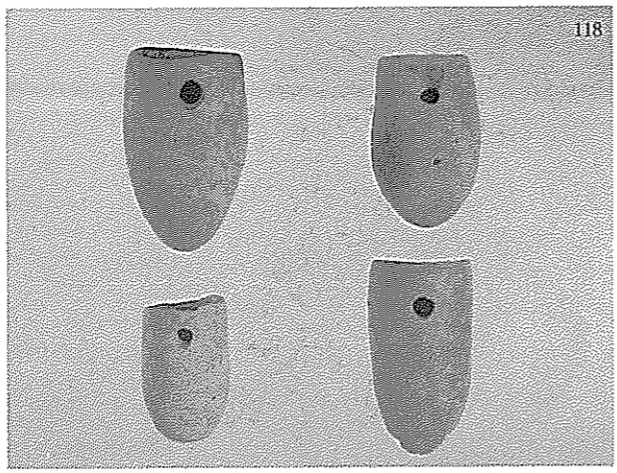


117 飯蛸壺(いいだこ)　弥生中～後期

亀井遺跡　(上左:RD4.8・H8.0) 文献.101

中期から後期の井戸、河川または包含層から出土。器高はおよそ8.0～9.5㎝であり、うち4個体は口縁下に紐孔1個が遺存する。また、調整は指ナデ、指頭圧痕である。中期以降、大阪湾沿岸から播磨灘にかけての地域では、飯蛸壺が多量に出土することが知られており、本例は当該地域でみられる一般的な形状の飯蛸壺である。　(渡辺)

118

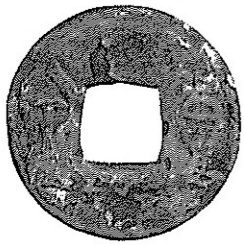


118 飯蛸壺　弥生中期

下田遺跡　(左上:RD4.8・H8.0) 文献.381

石津(いしづ)川の旧河道に堆積した砂層から、大量の弥生土器とともに出土。丸底の砲弾形状を呈し、口縁部直下には縄を通す小さな孔を1箇所だけ穿っている。いくつも縄に連ねた飯蛸壺を海底に沈めておき、蛸が中に入った頃を見計らって引き揚げるのである。こうした蛸の性質をうまく利用した蛸壺漁は、現在にいたるまで続けられている。　(西村)

119



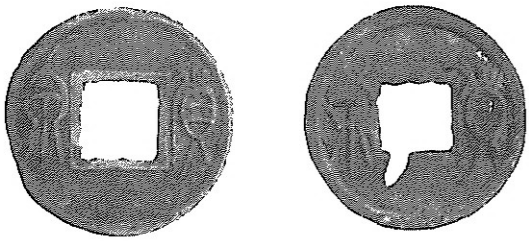
119 貨泉（かせん）　弥生後期

巨摩遺跡　(D2.1・T0.2)　文献.64

後期方形周溝墓を壊して流れる自然河川の肩部より約2m離れた地点から出土。文字面は上を向いた状態であった。一緒に出土した後期土器は、体部に記号文をもつ広口壺、長頸壺、山陽・瀬戸内地方の影響を受けた甕などであった。

貨泉は中国の新の元鳳元(A.D.14)年に初鋳された貨幣である。流入状況が偲ばれる。　(井藤暁)

120



a　b

120 貨泉　弥生後期

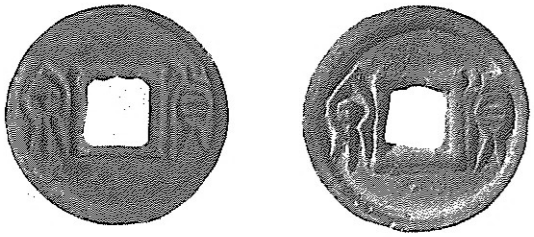
亀井遺跡　(a:D2.3,b:D2.3)文献.71・86

ともに後期後半包含層から出土。

2枚は重なった状態であった。bは面郭がない。121-aも同一層出土である。弥生後期で3枚の出土は珍しいが、最近では岡山県高塚遺跡の袋状土坑から24枚検出されている。

貨泉は、弥生後期と古代末～中世の大きく2度の波をもって日本に流入したようである。　(畑)

121



a　b

121 貨泉　弥生後期

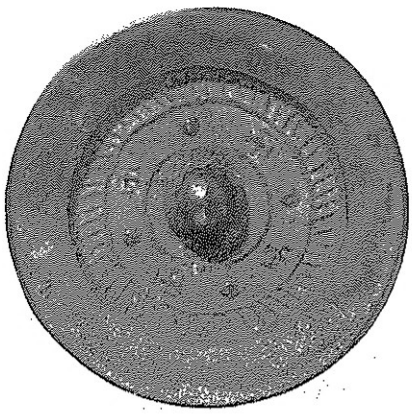
亀井遺跡　(a:D2.2,b:D2.3)　文献.63・71・86

aは上の120と同一層中で2m南側で出土。

bは土坑から出土。共伴する土器は中期末～後期初である。面郭と方孔は若干方向がずれている。径は一般的だが、重さは今まで出土しているなかでは最も重い方である。

貨泉は、国産青銅器の原料として流入したという説もあるが確定をみない。　(畑)

122

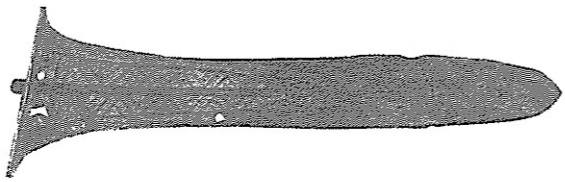


122 仿製鏡（ぼうせい）　弥生後期

亀井遺跡　(D5.4・T0.7)　文献.71・86

後期後半の自然流路の河床近くから出土。鈕は円座鈕で半球形を呈する。円座の外側に幅5.5㎜の主文様帯があり、四乳の間に「十」（菱形文の簡便化）形の擬銘様のものが各1個配されている。主文様帯と縁の間に斜行櫛歯文帯が1条めぐる。縁は幅の広い平縁で高くつくられている。高倉洋彰氏分類の重圏文日光鏡系IIIbである。　(畑)

123

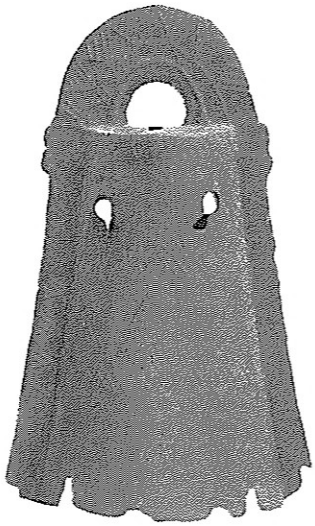


123 銅戈（どうか） 弥生中期

瓜生堂遺跡 (L24.2・W7.7) 文献.71・59

中期包含層と下層の河川の境から出土。刃部は甲張（こうば）りを取って整形しただけで研ぎださず、武器の機能は失っている。関（まち）部は菱形をしているが薄い。複合鋸歯文が、血樋の中に描かれる。このように本例は、祭器として使用され、弥生青銅利器の最終の姿を示す。銅戈は祭器化しても肥大化せず、ほかの青銅器とは異なる存在理由がみられる。 (入江)

124

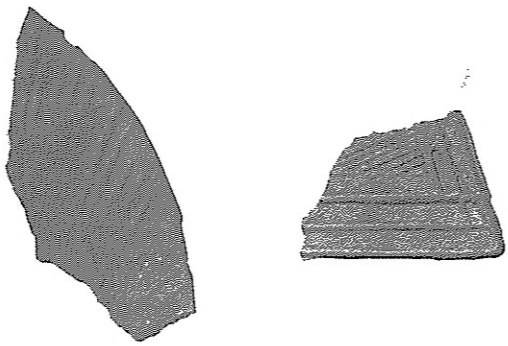


124 銅鐸 弥生中期

下田遺跡 (H22.0・W11.0) 文献.381

石津川旧河道の北岸から出土。鈕をおよそ西に向け、鰭を立てた状態で人為的に埋められていた。扁平鈕（へんぺいちゅう）4区袈裟襷（けさだすきもん）文銅鐸で、鈕と鰭に鋸歯文を飾り、縦帯と横帯には斜格子文を施している。当初の鋳込みには湯回りが不良な部位があり、のちに一部を修復した形跡がある。出土状態が明確なうえ、中～後期に埋納時期が限定でき重要な資料である。 (西村)

125



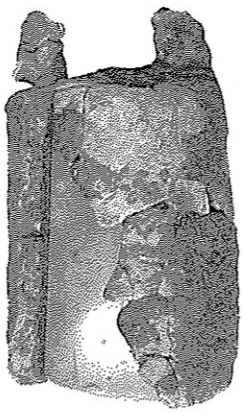
a b

125 銅鐸 弥生中・後期

亀井遺跡 (a:ℓ5.0,b:ℓ4.2) 文献.63・71・86

aは古墳時代遺構から出土。扁平鈕式銅鐸の鈕外縁の一部である。外周に内向鋸歯文帯とその内側に1条の圏線を設けている。文様や鈕の大きさから高さ23～25㎝の4区袈裟襷文銅鐸と推定される。bは弥生後期河川から出土。突線紐（とっせんちゅう）式銅鐸の鰭の一部である。奈良県纒向（まきむく）遺跡など集落遺跡から銅鐸片が出土する例があるが、なかでもbは古い時期例である。 (金光)

126

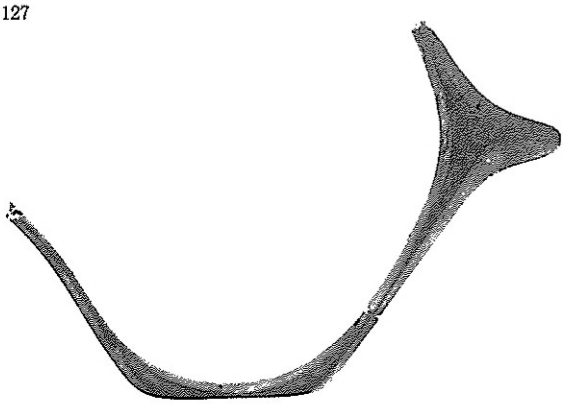


126 銅鐸形銅製品 弥生後期

上フジ遺跡 (ℓ3.6・W2.0) 文献.334・346

標高約82mの丘陵上に位置する弥生後期の多角形住居から出土。住居は火災にあっているが、土器はほとんど出土しなかった。この「銅鐸形銅製品」は、復原高4㎝余りの小形品である。しかし舞（まい）孔と型持（かたもたせ）孔を有しており、銅鐸と同様の手法で製作されたらしい。出土時に腐食がかなり進んでいたため、金属質の部分はほとんどない。 (駒井)

127

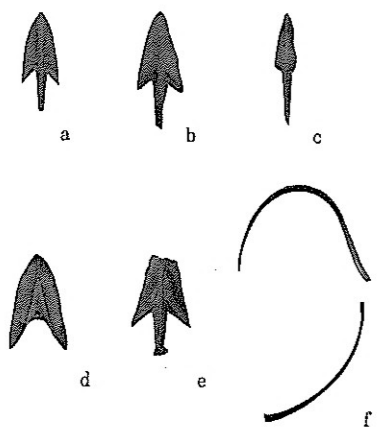


127 有鉤銅釧（ゆうこうどうくしろ）　弥生中期

巨摩遺跡　（ℓ6.2・w6.2）　文献.71・64

中期末の沼状遺構から出土。九州地方で鋳造されたと考えられる、貝輪を模した有鉤銅釧である。2片に別れているが同一個体と考えられ、約半分の破片となる。鉤状突起は短く、三角形で水平に突き出ている。分析結果では、銅に対して錫（すず）や鉛の割合が高い。ちなみに近畿地方では泉大津市要池（かなめいけ）遺跡でも古墳時代の溝からではあるが、有鉤銅釧が出土している。　（小野）

128

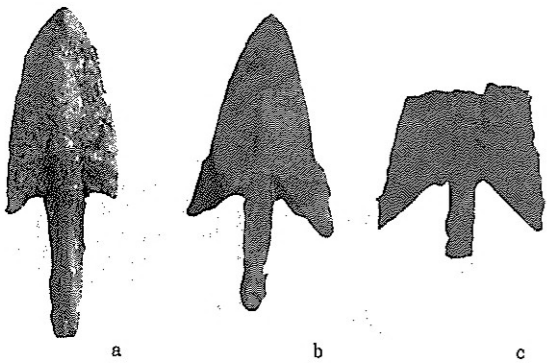


128 銅釧・銅鏃　弥生中～後期

亀井遺跡　（c:L4.4・W1.1）文献.71・121

aは後期溝、dは中期土坑、ほかは中期後半～後期包含層から出土。銅鏃には3型式がある。a・b・eは有茎腸抉（ゆうけいわたくり）式で近畿では類例が多い。cは有茎橘葉式で例は少なく、東海や関東に主に分布する。dは無茎で、着柄部がくぼむ有蠟（ゆうろう）式に属し、目釘（めくぎ）孔を備え、特殊例である。銅釧に推定したfは、青銅製細線でつくられており、このタイプは特異な存在となる。　（秋山）

129

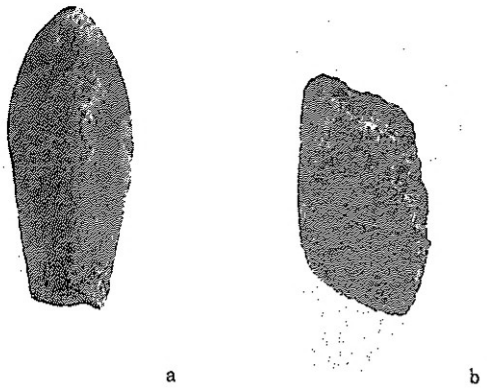


129 銅鏃　弥生後期

巨摩遺跡(a)・亀井遺跡(b・c)　(a:L4.2,b:L4.0)文献.64・86

aは後期遺構面直下、bは後期後半を、cは同前半を主体とする包含層から出土。いずれも有茎式である。b・cは茎に続く背が明瞭で、うちcは上半が欠失。しかし、身最大幅約3㎝と大形品である。これには有翼部分に装飾的な縁枠がみられ、実用よりも祭祀具などの用途が考えられた。銅鏃は周辺部で製作されたものであろうか。　（井藤暁）

130



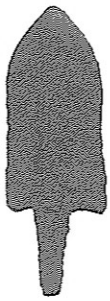
130 銅鏃　弥生後期

亀井遺跡　（a:ℓ3.4,b:ℓ2.5）　文献.63

aは中期末～後期初頭の土坑、bは中・後期包含層から出土。aは、有茎柳葉式であるが、茎を欠き鏃身も変形する。断面は偏平菱形だが、鎬は不明瞭である。貨泉(121-b)と土器が共伴した。大阪市瓜破（うりわり）遺跡の台付鉢内からも、貨泉と銅鏃が検出されていて注意される。bは鏃身片とされるが、判然としない。

（秋山）

131



131 銅鏃　弥生後期

池島・福万寺遺跡　(L4.5・W1.9)　文献.358

平安時代の水田基盤層から出土。

逆刺(かえり)のついた茎を有するタイプの銅鏃であり、鏃身の両面には樋が通る形態などの特徴から、弥生後期～古墳前期のものと推定される。ただ、本来の遺構面から遊離した状態で出土したため、その性格については不明な点が多い。

(井上)

132

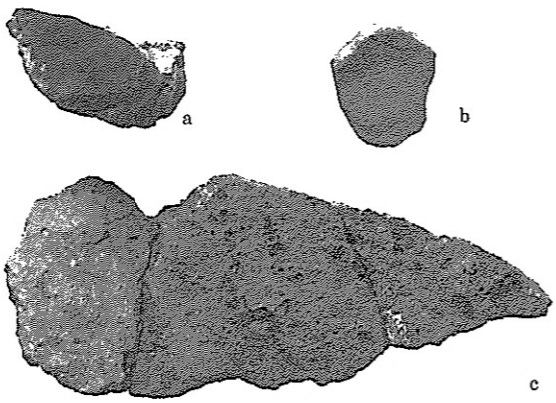
132 青銅器鋳型(いがた)　弥生中期

瓜生堂遺跡　(ℓ6.7・w4.6)　文献.59・71

中期後半の包含層から出土。砥石(といし)に転用されていた。

凝灰質砂岩製で、右側縁部にはていねいに加工され光沢をもつ凹部、その左側には加工の粗い平坦面が観察され、双方とも火熱により黒変する。ていねいに加工された部分を脊(せき)とし、武器形青銅器を製作したとする見解や、これを製品側縁部とし、より大形品を鋳造したとする意見があるが、特定できない。　(三好)

133

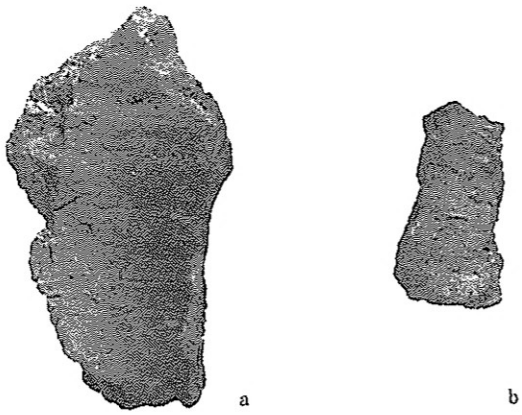


133 青銅器鋳造関連遺物　弥生中期

亀井遺跡　(c: ℓ15・w6)　文献.71・318

a・cは同じ土坑、bは溝から出土。a・bは、和泉砂岩製で中期中葉の土器を伴なう。砥石に転用され小片となる。被熱痕跡をとどめること、それが断面におよぶことから鎔笵(ようはん)といえるが、製品の特定はできない。cの土器片は表面が溶解し、1000℃をこえる状況にさらされたと推定される。金属器生産がおこなわれていたことを傍証するとも考えられる。　(三好)

134



134 青銅器鋳造関連遺物　弥生中期

亀井遺跡　(a: ℓ11.0・w6.4)　文献.318

133-a・cが検出された土坑から出土。板状の土製品で、胎土や調整から、元来は同一個体であったと考えられる。胎土には砂粒をほとんど含まず、土器用に調製されたものとは考えがたい。また、調整技法も土器には該当するものがない。

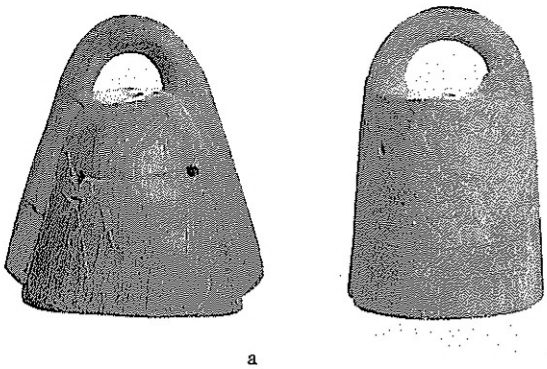
土器焼成時の副産物とする見解もあろうが、共伴遺物からは鋳造関連遺物となる可能性が高い。　(三好)

135

136

137

138



135 板状鉄斧　　弥生後期

亀井遺跡　　(L9.0・W4.2)　文献.63・71

後期前半の溝から出土。形態は長方形で、刃部は片刃である。重さは77.5gをはかる。北部九州では、前期後半に片刃板状鉄斧が出現し、扁平片刃石斧にとってかわった。近畿地方では中期後半から出現し、伐採用の両刃大形鉄斧は後期後半になってから出現する。本例は、弥生後期の近畿地方の鉄器普及を示す好例である。　(畑)

136 銅鐸形土製品　　弥生中期

瓜生堂遺跡　　(ℓ5.5・W4.8)　文献.59・71

第Ⅲ～Ⅳ様式の溝状遺構から出土。完形品で、鈕、鐸身、鰭の各部や鈕孔、舞孔など、実際の銅鐸を比較的忠実に模し、鐸身両面には「×」状の線刻がある。本例を含め銅鐸形土製品の多くが集落内から他遺物とともに出土することから、複数集落を単位として執行された銅鐸祭祀とは体系の異なる、日常生活にかかわる祭祀に用いられたと考えられる。　(岡本茂)

137 銅鐸形土製品　　弥生中期

亀井遺跡　　(ℓ6.2・w5.8)　文献.299

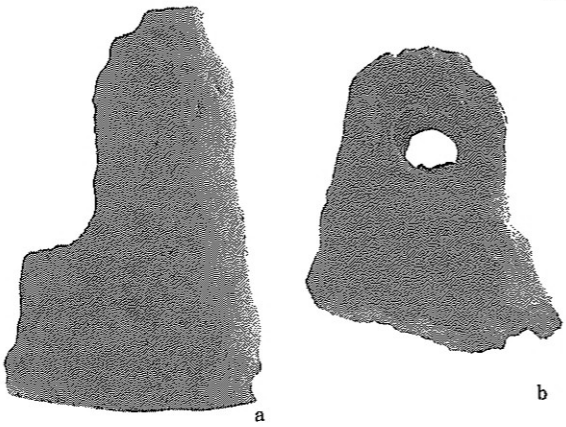
中期後半の土器細片を含む土坑から出土。鈕から舞の一部、身の上部にかけて遺存する。全体的に黒灰色を呈する。舞の中央には円孔が穿たれるが、破片でみるかぎりでは身部の型持孔を模した穿孔は確認できない。表面には明確な文様は認められないが、身部表裏面には縦横の条線が確認できることから、何らかの文様を意識して施されたものとも考えられる。　(三好)

138 銅鐸形土製品　　弥生中期

亀井遺跡　　(a:ℓ7.9,b:ℓ5.1)　文献.121

異なる遺構であるが、2点とも集落北辺の大溝から出土。aは第Ⅲ様式古段階前半、bは第Ⅳ様式後半に属する。aでは赤色顔料の遺存はあるが全くの無文、bでは斜格子による横帯文に加えて天地逆の魚が表現されるという、対照的なあり方を示す。aは銅鐸形土製品の最古例の一つといわれ、bは銅鐸と同じ絵画がある点で、ともに重要な資料となる。　(秋山)

139

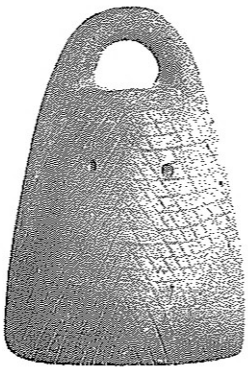


139 銅鐸形土製品　　弥生中期

亀井遺跡　　(a:ℓ5.6,b:ℓ3.6) 文献.63・71

aは溝中層から一括土器群とともに、bは包含層から出土。aは鐸身と舞の一部で、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整され、鰭は表現されない。鐸身の断面は円形である。鈕の断面は舞部分の痕跡から円形と推定される。bは、鈕と鐸身の一部にあたる。舞に下から上へ穿孔がある。型持孔の表現か。鐸身横断面は楕円形を呈する。　　(寺川)

140

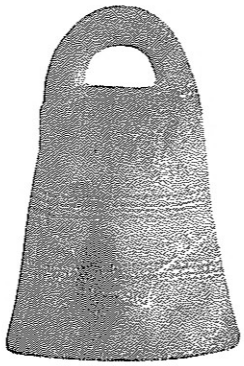


140 銅鐸形土製品　　弥生中期

亀井遺跡　　(ℓ4.3・w3.9)　　文献.63・71

井戸の底近くから、土器、木製匙未製品とともに出土。井戸の中央には内部を二分するかのように杭を打ち、さらに横木を渡してあった。身から裾の破片にあたる。全面にヘラ描斜格子文、内面裾近くには平行する2条の沈線がケズリ調整ののち施され、銅鐸の舌(ぜつ)があたる突帯を表現している。ほかの写実的な銅鐸形土製品でも、このような表現はみられない。　　(寺川)

141



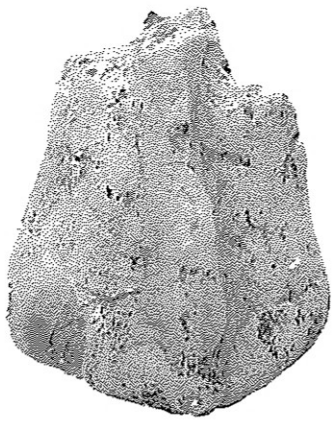
141 銅鐸形土製品　　弥生中期

亀井遺跡　　(ℓ8.1・w7.4)　　文献.63

溝から多数の土器群とともに出土。鈕と鐸身裾が欠損している。横断面は杏仁(きょうにん)形、両面に上下2段に櫛描簾状文が施される。外面はナデ、内面は指押さえとナデ調整。鐸身上面には鈕のはずれた痕跡が認められる。横帯文銅鐸を模したものであろう。中期の土器も出土しており、本例も同時期と考えられる。

(寺川)

142



142 銅鐸形土製品　　弥生後期

野々井西遺跡　　(ℓ8.4・w5.9)　　文献.361

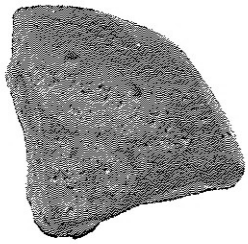
竪穴住居内のピットから出土。鈕を欠くが、鰭部を横にした状態で検出された。全体に手づくねの跡が著しく、文様はない。稚拙であるが、鐸身、鰭、鈕が表現されていて、特に鰭部は広い。模倣した銅鐸は、突線鈕式鐸と推測される。また、中実であるのが珍しく、最初から、据え置くことを意識して作られたと考えられる。　　(田渕)

143

143 分銅形土製品　　弥生中期
亀井遺跡　　（ℓ4.9・W7.0）　　文献.121

包含層から出土。吉備地方を中心に分布する分銅形土製品の下半部にあたる。この種土製品の表面装飾には、櫛描文と刺突文の２タイプがある。本例は前者で、直線文１条と粗雑な簾状文２条で構成される櫛描文帯で加飾される。赤色顔料の遺存が一部にみられる。文様構成、胎土、色調から、吉備地方からの搬入品と判断でき、中期後半に相当する。　　（秋山）

144



144 分銅形土製品　　弥生中期
亀井遺跡　　（ℓ4.3・w4.0）　　文献.342

中期後半～後期の遺物とともに包含層から出土。全体の1/4程度が遺存する。表面は磨滅が激しいが、側縁に沿って施された２重の列点文が確認できる。これまで検出された諸例から復原すると、元来の大きさは長さ10㎝弱、幅８㎝前後を測るものと推測される。当遺跡ではこれまでに４点の分銅形土製品が検出され、西方との活発な交流をうかがわせる。　　（三好）

145

145 分銅形土製品　　弥生後期
亀井遺跡　　（ℓ6.2・w9.4）　　文献.63・71

後期の溝から出土。この溝からはほかに銅鐸形土製品も出土している。周縁の左下端には焼成前の穿孔が１箇所みられ、失われた右下端にも同様の穿孔がなされていたと推測される。顔面には朱が施される。右下半の黒斑は断面にもおよんでおり、破損後二次的に火を受けたことを示している。分銅形土製品の性格を考えるうえで重要な資料といえる。　　（金光）

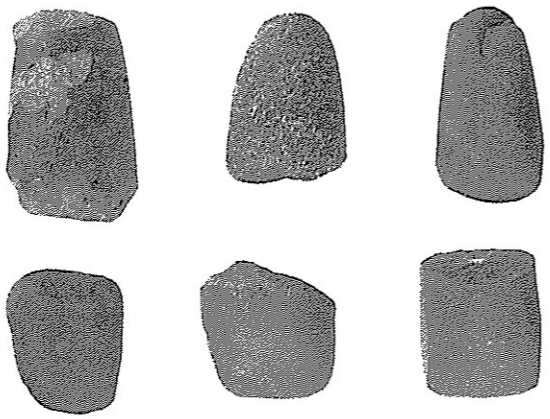
146

146 船形土製品　　弥生中期
東奈良遺跡　　（L7.7・W2.2）　　文献.386

方形周溝墓の周溝から出土。ていねいに指で押さえながら船の形に造り出しており、内側にはさらに粘土を足して形を整えている。船首の一部以外はほぼ完全に残る。同じ方形周溝墓からはミニチュア土器も出土しており、ともに葬送の際の儀礼に使用されたと思われるが、類例が少なく推測の域を出ない。

（山元）

147

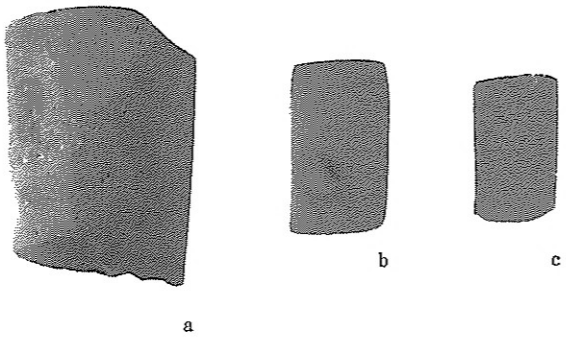


147 太型蛤刃石斧（ふとがたはまぐりば） 弥生中期

亀井遺跡 （左上:L10.0・W5.6）文献.86

溝、土坑、包含層から出土。この種の石斧は、他種の石斧に比べて最も重量があり、木の伐採や分割に使用された。全体に丸みをおび、両刃である。刃部を横から見ると閉じた蛤に似るためこのように呼ばれる。大陸系磨製石器の一種であるが、縄文時代の伐採斧の形に近いものもある。おそらくそれらは両者が融合して生まれた形態であろう。 （村田）

148



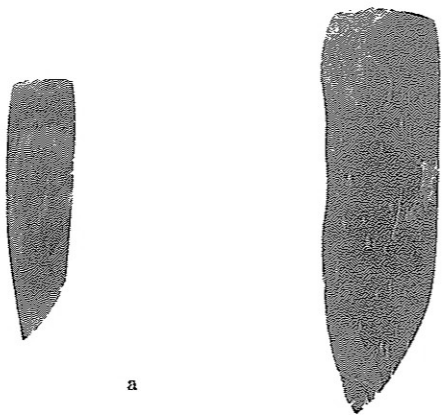
148 扁平片刃石斧 弥生中期

瓜生堂遺跡(a)・亀井遺跡(b・c) （a:L8.2・W4.2） 文献.71

aは中期大溝、bは包含層、cは方形周溝墓の盛土から出土。いずれも横断面が長方形で、片刃である。他種の石斧よりも薄いため、強い衝撃には耐えないが、木表面を削ったり細部調整に使用される。大陸系磨製石器の一種で、弥生時代になって新たに出現した。なおcは石庖丁の転用品である。

（村田）

149

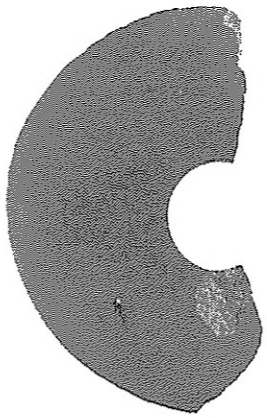


149 柱状片刃石斧 弥生中期

瓜生堂遺跡(a)・亀井遺跡(b) （a:L6.6,b:10.3） 文献.71

aは河川から多量の土器とともに出土。横断面は蒲鉾（かまぼこ）形で刃部は片刃である。頁岩（けっがん）製。bは、柄に斧頭をしっかり固定できるよう、斧身の片面にえぐりを作りだしている。これらは大陸系磨製石器の一種で、加工の際に使用した。大きさ、重量がバラエティーに富むため、荒割りから細部加工等、用途にあわせて使い分けたと考えられる。 （村田）

150



150 環状石斧 弥生中期

瓜生堂遺跡 （d8.9・t3.6） 文献.59・71

包含層から出土。1/2強が遺存する。中央に柄を差し込むための孔をあけた円盤状の石器で、周縁に両刃を研ぎだしている。石斧という名称が付いているが、斧として使用したとは考えにくい。機能は未だに判然としないが、民族例を参考にすると、棍棒（こんぼう）の先に取りつけた武器、掘り棒の重しとして使用した可能性等が考えられる。 （村田）

151

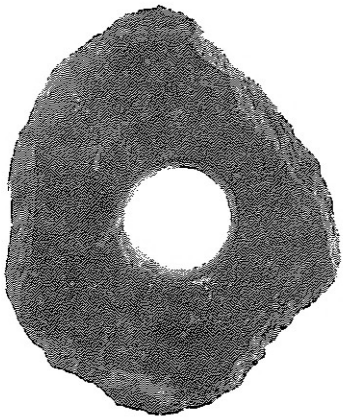
151 環状石斧　弥生中期

若江北遺跡　(d9.4・T3.2)　文献.71・80

包含層から出土。刃部には使用に伴なって生じたと思われる剥離痕が認められる。日本における環状石斧の起源はかなり古く、縄文早期後半の条痕文土器に伴って発見された例もある。しかし縄文時代の資料のなかには穿孔の直径が小さいものもあり、すべてが弥生時代の環状石斧と同一の機能をもっていたとはいえない。

(村田)

152



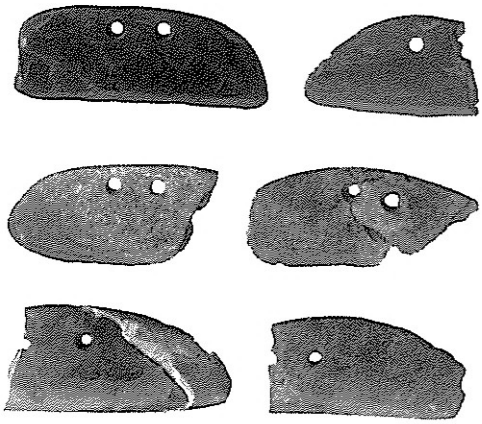
152 環状石斧　弥生中期

亀井遺跡　(D9.6・T2.9)　文献.63・71

包含層から出土。環状石斧は破損した状態で出土するものが多く、本例のように全体の形状が把握できるものは稀である。ただ、この資料も周縁部につけられた刃はすべて剝落している。本例は溶結凝灰岩(ようけつぎょうかいがん)製であるが、この種遺物は特定石材を使用したのではなく、堆積岩、火山岩、変成岩のうち比較的加工しやすい石材を素材としていた。

(村田)

153



153 石庖丁　弥生中期

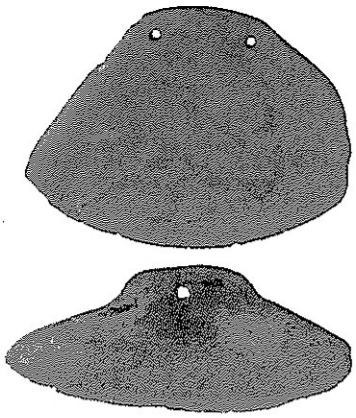
亀井遺跡　(左上:L9.7・W4.7)　文献.86

中期の井戸、溝、包含層から出土。使用状態が復原できるような紐擦(ひもず)れ痕が穿孔周辺にみられるものがある。また、使用痕として面の磨滅により光沢をおびる例もある。

近畿における中期石庖丁の特徴としては、結晶片岩を使用した直線刃半月形態のものが多いことがあげられる。本例は結晶片岩製。

(溝川)

154



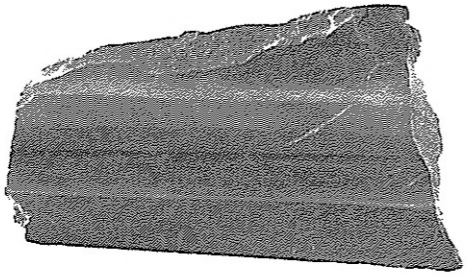
154 大型石庖丁　弥生中期

亀井遺跡　(d:L17.2・W12.4)　文献.86

aは平野川の川底、bは包含層から出土。どちらも緑泥片岩製で、刃部は両刃である。大型石庖丁は、石庖丁と形態的な類似点が多いのでこのように呼ばれるが、穂摘具とは考えにくい。さらに大型石庖丁自体も形態や大きさ、使用痕に様々なバラエティーがあるため、それらはいくつかの機能に分けられる可能性がある。

(村田)

155



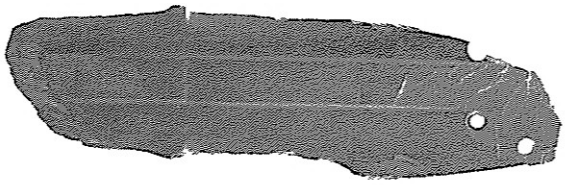
155 戈形石製品　　弥生中期

瓜生堂遺跡　　（ℓ6.8・w4.0）　文献.59・71

方形周溝墓の盛土最上部から出土。調査トレンチ内に埋葬主体は発見されなかったが、隣接地の以前の調査で検出された木棺1基と土壙2基がこの周溝墓の主体部であろう。

石灰質粘板岩製で、樋や鎬の表現など銅戈を忠実に模している。完形品でないので、祖型となった銅戈の型式は明確でない。　（岩崎）

156

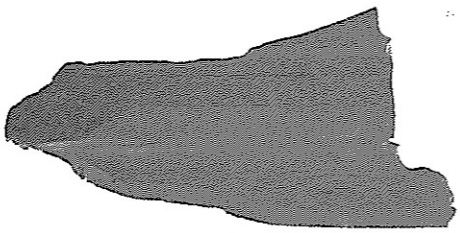


156 銅剣形石剣　　弥生中期

瓜生堂遺跡　　（ℓ16.8・w4.6）　文献.59・71

包含層から出土。剣先と基部が欠損するが、復原長が40㎝をこえる大形の石剣で、粘板岩製である。細形銅剣を模倣した例はほかにもあるが、これほど正確に模倣したものは稀である。畿内では細形銅剣自体は出土しておらず、どのような経緯でこれが製作されたのか、またどのように使用されたのかといったことも含めて注目すべき資料である。　（村田）

157



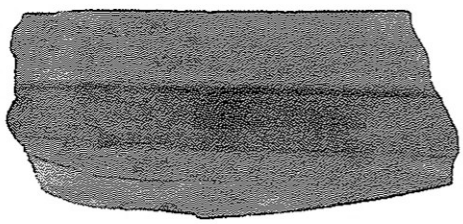
157 銅剣形石剣　　弥生中期

亀井遺跡　　（ℓ8.1・w4.6）　文献.86

第Ⅲ～Ⅳ様式の井戸から出土。双孔の痕跡が認められ、基部である。翼は薄く水平にのび、脊は相対的に厚い。鎬は鋒側に斜めに擦り落とされ、再加工されている可能性がある。粘板岩製である。種定淳介氏の分類によれば、第Ⅱ～Ⅳ様式に河内中・北部、和泉と山城の一部西部地域に認められる銅剣形石剣Ⅰ式である。

（畑）

158

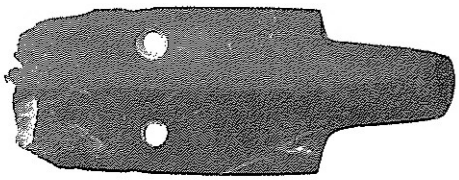


158 銅剣形石剣　　弥生中期

山賀遺跡　　（ℓ7.7・w3.6）　文献.83

掘立柱建物横の土器捨て場から出土。刃の片面と脊は残るが、欠損部分が多い。刃は断面三角形で、背の鎬は断面台形で両面につく。また鎬の両脇には、鎬と平行に浅い溝と樋がある。武器形祭器としては、弥生前期に剣形木製品、その後に金属製の銅剣や銅戈などがあらわれるが、この遺物はその形態から銅剣の模造品といえる。泥岩質ホルンフェルス製。　（国乗）

159

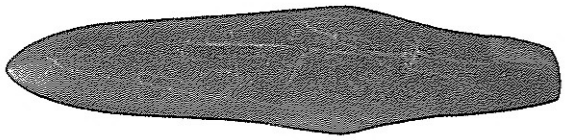


159 銅剣形石剣　弥生中期

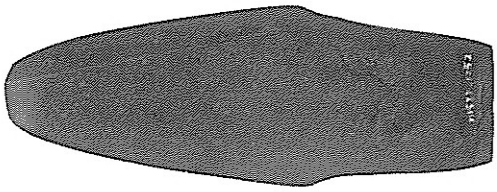
石才南遺跡　（ℓ9.4・W3.6）　文献.192

土坑から、土器や石庖丁、石錐とともに出土。茎の横断面が丸みをおびること、基部近くに２個の穿孔が並ぶことから、銅剣の模造品と考えられる。細部の表現が簡略化していることから、時期的には156より後のものと位置付けられる。なおこの資料はもとの長さが不明だが、同種の石剣のなかには30㎝をこえるものも存在する。粘板岩製。（村田）

160



a



b

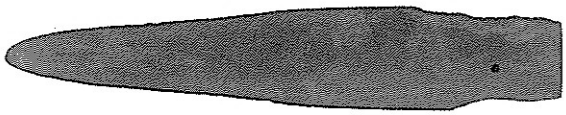
160 磨製石剣　弥生前期

美園遺跡　（a:L9.7,b:L7.2）　文献.268

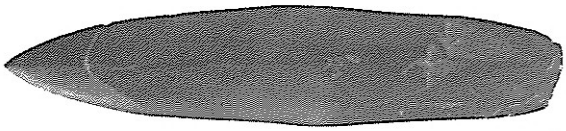
ともに竪穴住居から出土。うちｂは、住居内北側のピットからの検出である。

小形の鉄剣形磨製石剣で、両面ともにていねいに磨いている。ｂの両側縁は鈍くごくわずかに面をなし、先端部分は片面に刃部をつくる鑿状に再加工される。基部から剣身中央にかけての両面に黒色物質がわずかに付着している。（村上富）

161



a



b

161 磨製石剣　弥生中期

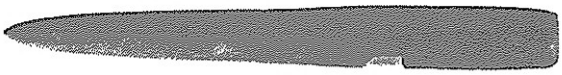
巨摩遺跡　（a:L15.3,b:L18.2）文献.64

ａは沼状遺構下層から出土。基部には小穴が片面に１つ、もう一方の面に２つ存在するが、すべて未貫通である。粘板岩製。祭祀性の強い遺物の共伴が多いので、本品も祭祀に使用したと考える。

ｂは方形周溝墓盛土内から出土。検出位置が主体部の直上に位あたることから、供献されたものと考える。サヌカイト製。（小野）

162

a



b

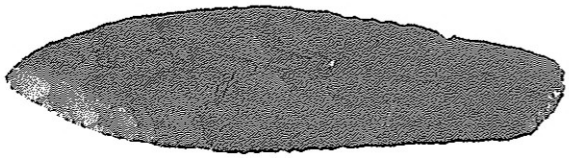
162 磨製石剣　弥生中期

瓜生堂遺跡　（a:L16.9,b:L25.6）文献.59

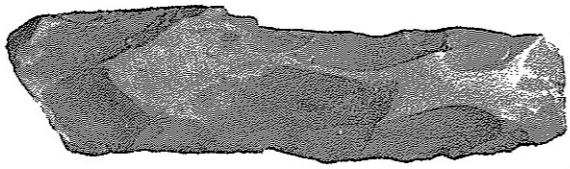
方形周溝墓群の上に堆積する中期後半の黒色砂質土層から出土。

石灰質粘板岩製。刃部、基部とも断面は平行四辺形で、基部は刃を潰（つぶ）している。別づくりの柄に着装するものではなく、基部を握って使用するものである。刃部は研がれて基部より幅狭くなっている。打製石剣と同様の機能をもつものと考えられる。（岩崎）

163

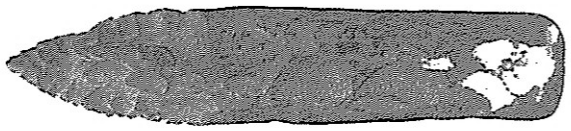


a

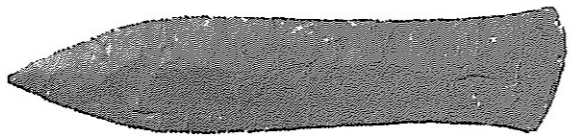


b

164

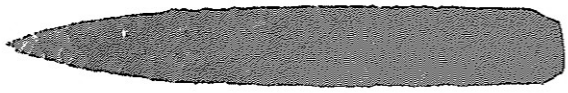


a

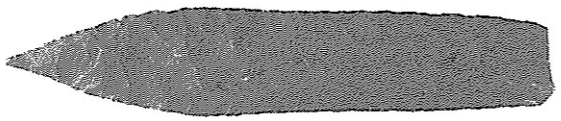


b

165

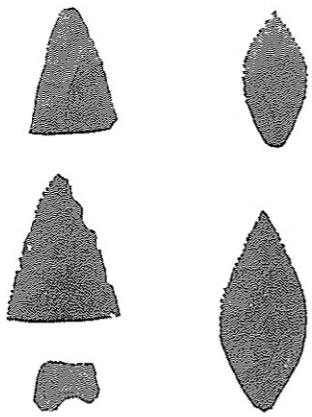


a



b

166



163 打製石剣　　弥生前期

山賀遺跡　　(a:L21.2,b:ℓ21.6) 文献.83

aは溝から数多くの遺物とともに出土。大形の石剣で、重量は230ｇ。ていねいに剝離整形されており、表裏面ともごく一部を研摩している。また片面の中央付近には黒色物質が付着する。

bは包含層から出土。大形の石剣で未完成品。全体にかなり粗く整形されており、表裏面とも部分的に磨かれている。ともにサヌカイト製。　(国乗)

164 打製石剣　　弥生前期(a)・中期(b)

山賀遺跡(a)・美園遺跡(b)　(a:L14.3,b:L10.7) 文献.83・104

aは包含層から出土。小形である。先端部に刃をつけ、それ以下の両側縁は平滑である。表裏面とも、ところどころに黒色物質が付着する。これは、石鏃などにもみられ、基部に柄を着けた時にできる巻き痕と考えられている。bは溝から出土。小形品で、極めて精巧につくられている。中央から先端の側縁には鋸歯状の刃を細かくつける。ともにサヌカイト製。　(国乗)

165 打製石剣　　弥生中期

亀井遺跡　　(a:L24.6,b:L17.5) 文献.63・121

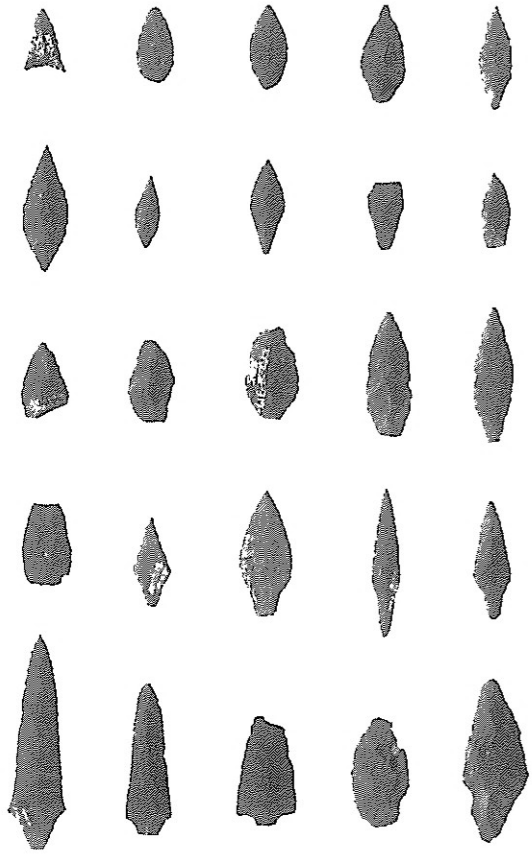
aは弥生包含層から、bは古墳時代河川に混入して出土。時期は確定できないが、中期であろう。ともにサヌカイト製の完形品で、厚みをもつ、切先の鋭いタイプである。下半部に樹皮を巻き、木製の鞘に納めて使用された武器である。打製石剣は畿内では、前期中段階には存在しており、中期に隆盛し後期には姿を消すようである。　(石神)

166 石鏃（木棺内出土品）　　弥生中期

山賀遺跡　　(右上:L3.2・W1.4)　文献.83

木棺墓から出土。棺長は約140㎝で、推定身長150㎝の成人男子が葬られていた。石鏃は、三角形と木葉形のものが各２点あり、大・小のセットになる。そのほかに破片が１点ある。副葬品として捉えるならば、まとめて埋納した可能性が高い。しかし本例は肩や脇腹など離れて見つかっており、被葬者は争いの犠牲者であった可能性が高い。いずれもサヌカイト製。(国乗)

167

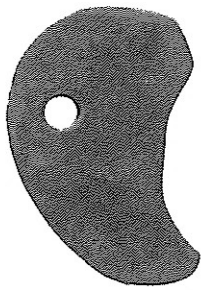


167 石鏃 弥生中期

亀井遺跡 (右上:L3.5・W1.2) 文献.86

近畿地方の弥生中期には、質量ともに石器が豊富となる。打製石鏃についても、従来の凹基式、平基式に加えて円基(えんき)、尖基(せんき)、有茎(ゆうけい)の各式が登場し、数、法量とも著しく発達する。この時期、軌を一にして発達をとげるのが軍事性の強い高地性集落であり、その背景となった争乱の増大が、長く重い石鏃、すなわち貫通力の高い矢を武器として登場させたのである。いずれもサヌカイト製。 (岡本茂)

168

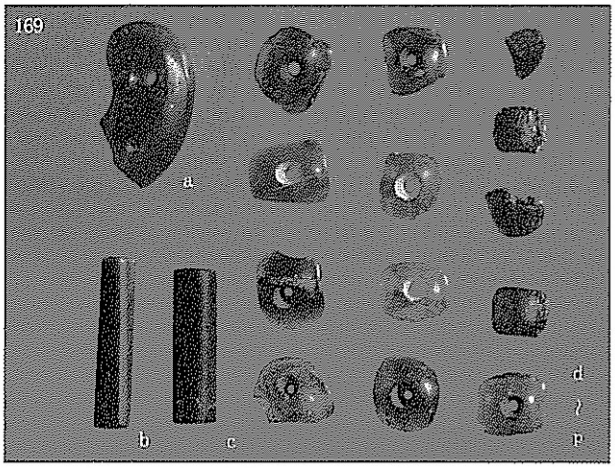


168 匂玉状石製品 弥生中期

亀井遺跡 (L4.6・W2.9) 文献.63

包含層から出土。孔は、両面から錐によって穿孔されている。通常玉類は、硬玉、碧玉、滑石等を使っているが、本例は、材質からして石庖丁の転用である可能性が高いため、匂玉状石製品とされている。時期的には、第Ⅲ～Ⅳ様式の範疇でとらえることができよう。粘板岩製。

(田渕)



169 碧玉管玉(へきぎょくくだたま)・ガラス勾玉・ガラス小玉 弥生後期

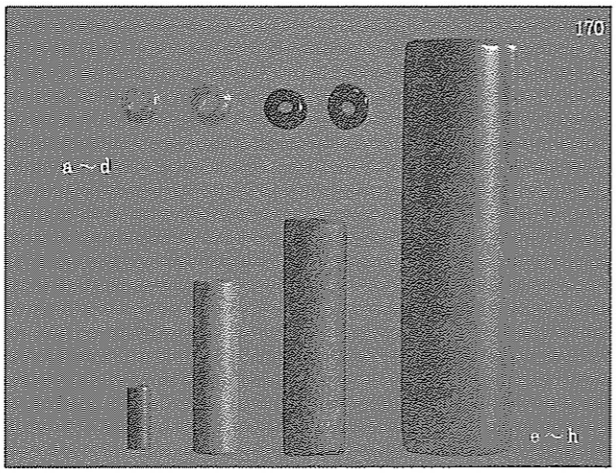
巨摩遺跡 (a:ℓ1.3・w0.7) 文献.64・71

b・cの碧玉製管玉2点は、方形周溝墓の木棺被葬者:40才代男性の耳飾りであった。青色ガラス製の勾玉aと小玉13個d～pは同墓の別木棺の被葬者:幼児が頸飾りとしていた。勾玉は先が割れ、小玉は丸玉の紐孔を中心として縦に半割りし、穿孔し直した二次使用品である。ともに頭部周辺には赤色顔料が振りかけられていた。当時の有力者集団のものか。 (井藤暁)

170 ガラス小玉・碧玉管玉　　弥生中～後期
亀井遺跡　　(h:L3.7・W1.1)　　文献.86

a～dのガラス玉はいずれも後期後半の包含層から出土。a・bは水色、c・dは紺色を呈す。ガラス小玉は前期からあり、後期後半に爆発的に各地に拡がる。碧玉製管玉のeは後期の土坑、fは中期後葉の溝、gは後期の土坑、hは後期後半の包含層から出土。eは極細で、hは太身のものである。

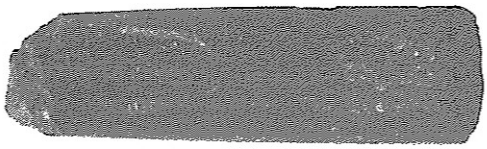
(畑)



171

171 石棒　　弥生前期
美園遺跡　　(ℓ9.6・D2.9)　文献.104・268

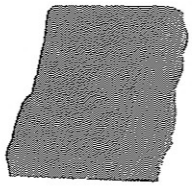
大量の前期の土器片などとともに溝から出土。溝が埋没する過程で土器とともに廃棄されたものと考えられる。結晶片岩製で、表面はていねいに研磨され、断面は楕円形を呈している。本来は石棒と推定されるが両端部に剥離を伴う叩打(こうだ)痕、側面に線条打撃痕が認められ叩石に転用されたものと思われる。石棒として使用された時期は不明。　　(佐伯)



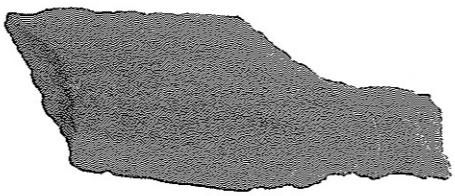
172

172 石棒　　弥生前期
美園遺跡　　(a:ℓ3.3,b:ℓ8.7)文献.104・268

前期包含層から出土。両側辺が平行で断面が楕円形の石棒の破片と思われる。aはスレート製、bは結晶片岩製。ともに表面はていねいに研磨されており、裏面は石の節理面より剥落、上下は折損している。特にbは破損後に上端を叩打していたり、鋭くなった縁を使用したらしい磨滅がみられるなど、171同様、本来の祭祀具としての機能は消滅している。　　(佐伯)



a



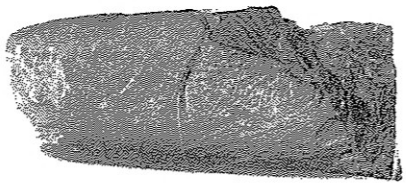
b

173

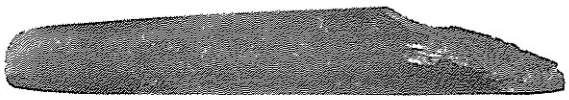
173 石棒　　弥生前～中期
亀井遺跡　　(ℓ7.8・D3.5)　　文献.121

包含層から出土しているため、時期は未確定である。端部付近のみ残存し、端部には一部自然面を残している。頁岩製。

弥生時代の小形化した石棒は、縄文中期に発達する大形の石棒とは異なる系統のものであるとも考えられているが、用途については同じく祭祀に使用されたものとする見解も多い。　　(渡辺)



174



174 石棒　　弥生中期

亀井遺跡　　(L22.6・H3.5)　　文献.121

地山面に掘りこまれた、断面逆台形の大溝から出土。

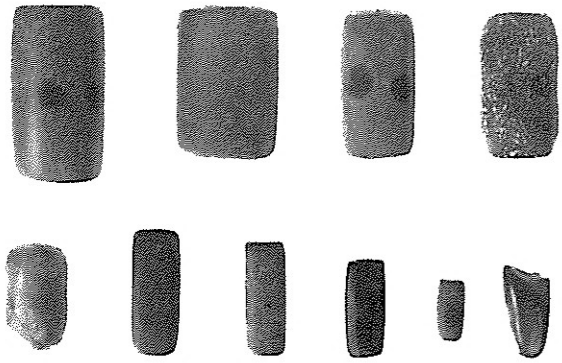
埋土には前期末〜中期初頭の遺物が混在していたが、報告では石棒は中期のものと推定されている。

端部より6㎝までに何かを巻きつけた痕跡がみられる。

また、製作時の打ち欠き面が一部残存し、その上に敲打研磨して仕上げた痕跡が認められる。頁岩製。

(渡辺)

175



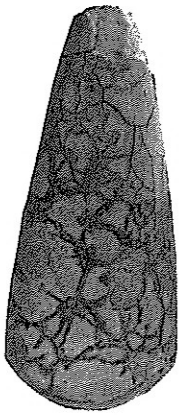
175 磨石(すりいし)　　弥生前期

亀井遺跡　　(上右:L5.3・W2.9)　文献.86

前期の土坑から 176の石杵や砥石とともに、完形品10点が一括出土。円柱形態のもの6点、断面がやや角張るもの3点、チャート礫のもの1点である。大は直径4.5㎝、小は直径1.3㎝のものまで大小種々である。

側面周辺(礫のものは全面)にツヤツヤするほど光沢があるが、どのような使用状況によるものか不明である。砂岩、輝緑岩、チャート製。　(石神)

176



176 石杵(いしきね)　　弥生前期

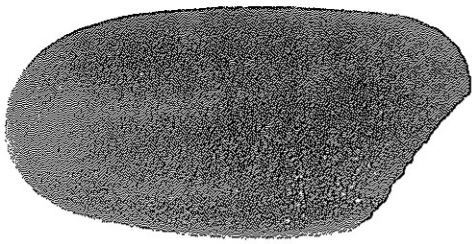
亀井遺跡　　(L26.1・W11.5)　　文献.86

前期の土坑から砥石、磨石、土器細片とともに出土。

平面形は幅の狭い扇形で、幅の広いほうの端面には一面に朱が付着している。本来はこの面が使用面と推定され、朱が付着していることから、朱精製用の石器と考えられる。しかし、これと組み合わせて使う石皿や石臼は未だに出土していない。砂岩製。

(野田)

177



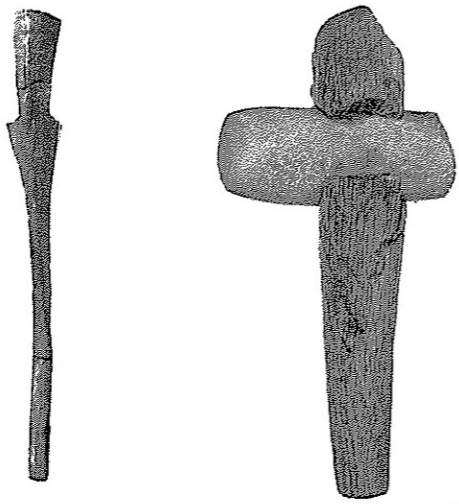
177 用途不明石製品　　弥生前期

美園遺跡　　(L6.2・W3.0)　文献.104・268

竪穴住居から出土。

一部欠損した楕円形状の礫で、砂岩製。縦・横方向にそれぞれ2条の白い原礫の色を残すが、その部分をのぞいて表面全体が黒く変色しており、煤または漆状物の付着がみられる。白い部分は紐を掛けた痕跡とみて、何らかの要因で紐の痕跡だけが残った石錘の可能性も考えられる。　(村上㈱)

178



a　b

178 縦斧(たておの)の柄　弥生前期(a)・中期(b)

山賀遺跡(a)・亀井遺跡(b)　(a:L62.0,b:ℓ32.4) 文献.83・101

土器群から出土。十数年前までは「太型蛤刃石斧の柄」（例えば池上遺跡の報告など）と呼んでいたもの。ここでは佐原眞氏の「石斧論」を受けて「縦斧の柄」とする。aは、斧の装着部の両側に段をもつ、形態的に古い様相を示すもの。樹種はカシ類。bは柄の方が欠損していたが、太型蛤刃石斧が装着された状態で検出された貴重な資料である。樹種はカシ。　（村上年）

179

a　b

179 横斧(よこおの)の柄　弥生後期

西岩田遺跡　(a:ℓ38.3,b:L54.2) 文献.79

包含層から出土。手斧の柄とも呼ばれていたもの。aは小形の斧膝柄である。斧の装着部が欠損しているが、上端面が平坦であることから農具の柄とも想定できる。樹種はヒノキ。bはほぼ完形品。斧の装着部はストッパーとしての段をもつことから、板状の斧がつく。先端の内側には、斧を縛る紐が抜けるのを防ぐ突起がみられる。樹種はクヌギ。　（村上年）

180

180 広鍬(ひろぐわ)　弥生後期

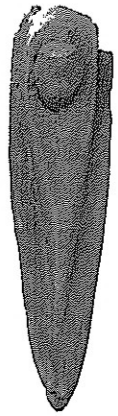
亀井遺跡　(L61・W14.0)　文献.86

溝から、身に柄を装着した状態で出土。

身の平面形は、頭部が台形、刃部は長方形。火を受けて一部を欠損する。身前面の柄孔上部には、泥除(どろよけ)を装着する横方向の溝を切ってある。後面隆起は円形をなす。着柄角は約75°で、柄は基部が欠損する。断面は円形を呈する。

（寺川）

181



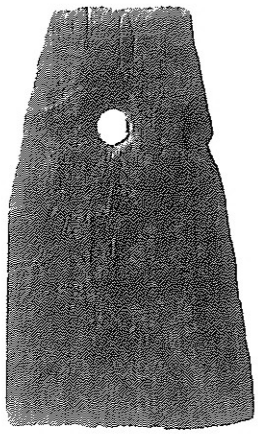
181 狭鍬（せまぐわ） 弥生前期

山賀遺跡 (L27.8・W6.0) 文献.83

浅い溝から出土。平面形は長い2辺が少し外湾する二等辺三角形を呈し、刃部が鋭角に整形されている。舟形隆起部も厚く、固い地面を掘り起こすのに適した形をしている。柄孔には径約3㎝の柄を4㎝だけ残している。着柄角度は60°を測る。

樹種は鍬も柄もカシ類を用いて、どちらも割り材から削りだしている。 (玉井)

182

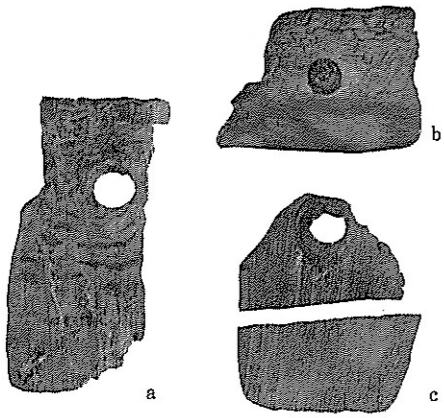


182 広鍬 弥生中期

瓜生堂遺跡 (L30.8・W18.6) 文献.59

浅い円形土坑から又鍬等といっしょに出土。ともに完形のまま埋まっていた。人為的に埋めたかどうかは不明。平面形は、刃部が広い台形を呈する。広鍬には棒状のものが供伴したが、広鍬の柄になるか明かではない。柄を入れる部分は全体に厚くなっているだけで、舟形隆起部のように突き出ていない。保存状態のたいへん良いものである。 (玉井)

183

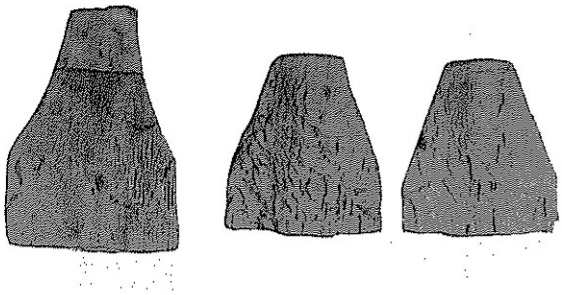


183 広鍬・えぶり 弥生後期

池島・福万寺遺跡 (a:L30.8・w12.6) 文献.325

後期水田面の水路や河川から出土した木製農具。aは泥除け具を装着する広鍬、bはえぶり、cは広鍬。aは出土時には柄の一部と泥除け具が残存していた。水田に農具が残されることは少ない。aは柄が折れた後に焼かれ、水路内に投棄されたと考えられる。農作業中に破損し処分されて、偶然水田に残った農具なのである。樹種はカシ。 (井上)

184

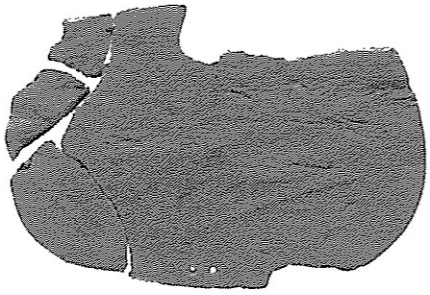


184 広鍬(未製品) 弥生中期

野々井遺跡 (左L30・W22) 文献.255・360

土坑から出土。近畿地方の該期の代表的な広鍬である。外形をはじめ柄孔の隆起や泥除け装着の段などは作出されているが、柄孔は穿たれていない。類似資料は各地で数多く出土しており、柄孔を穿つ前にくるいを防ぐため一定期間のねかしが必要であったためと考えられる。また、未製品を通じて製作技術や工程、使用工具、製作、保有の実態などがうかがえる。(岡本茂)

185

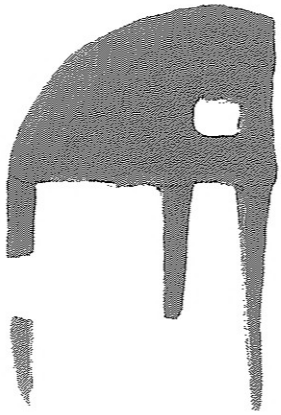


185 泥除（どろよけ） 弥生後期

西岩田遺跡 (L16.5・W24.4) 文献.79

包含層から出土。民俗例で泥徐（ドロヨケ）という鍬に装着して、人にはねた泥をかぶらなくする例がある。従来、円鍬（まるぐわ）（丸鍬）としたものの一部に、その泥徐にあたるものがあると、出土木器集成研究会で提唱された。本例は鍬装着部である上部を欠損するが、着柄孔が縦に長い楕円形で、全体的に薄く、下部に2孔の紐孔をもつことから泥徐とされる。樹種はカシ。(村上年)

186



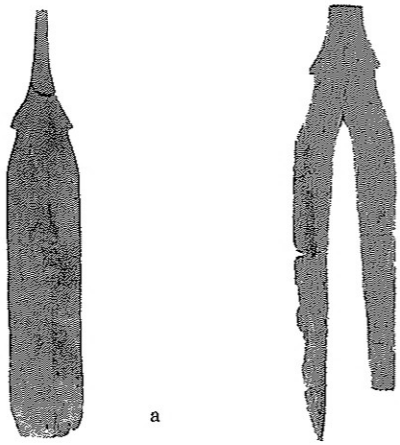
186 又鍬（またぐわ） 弥生中期

瓜生堂遺跡 (L19.0・w12.6) 文献.59

土坑から出土。身の約1/2 が残存しており、復原すると6本の刃をもつ又鍬で、柄は挿入式である。同じ土坑からは、ほかに広鍬の身が1点出土している。樹種はともにカシ類。

低湿地の遺跡であるため木器の保存状態が良好で、農耕具等が多量に出土する。未製品もあることから、当時の生活の一端が偲ばれる。 (森屋)

187

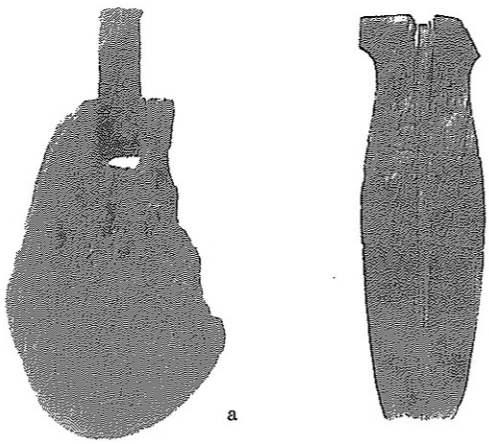


187 着柄鍬・鋤（ちゃくへい） 弥生後期

西岩田遺跡 (a:L74.0,b:ℓ52.0) 文献.79

包含層から出土。いわゆるナスビ形着柄鋤とされていたもの。上部の両肩にひさし状の突出部をもち、形状がナスビに似ていることから命名された。弥生中期末に初現がある。『木器集成図録 近畿原始編』では、aは曲柄平鍬身、bは曲柄又鍬身とされる。柄と身の組合せにより、鍬と鋤どちらにも機能できる。樹種はカシ。 (村上年)

188



188 着柄鋤 弥生前期(a)・中期(b)

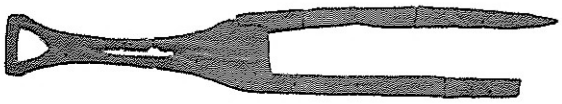
瓜生堂遺跡(a)・友井東遺跡(b) (a:ℓ48.6,b:ℓ31.6) 文献.59・85

aは前期の溝から出土。一木作りの鋤で柄は欠損している。身は、細長いスコップ状で肩部側縁に抉りをもつ。bは中期の方形周溝墓間の周溝の最上層から出土。着柄式のものである。同一遺構からは、ほかに一木作りの鋤が3点出土している。

いずれのものも樹種はカシ類。

(森屋)

189



189 鋤　　弥生中期

亀井遺跡　　(L31.6・W11.8)　　文献.63

断面U字形の溝から出土。上層からは多量の土器が検出され、本例は下層から出土した。

側面から見ると、把手から身にかけては一直線で、いずれの部位の断面形も方形である。

柄中央には細長い溝が穿たれている。この形態の類例は少ないが、東大阪市瓜生堂遺跡、同鬼虎川遺跡で出土している。　　(寺川)

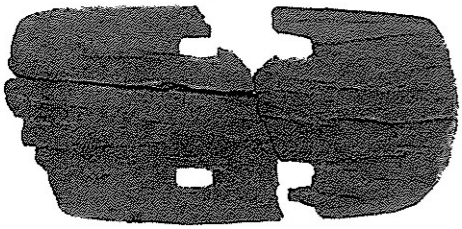
190

190 鋤　　弥生後期

新家遺跡　　(L92.0・W15.0)　　文献.310

後期の自然堤防上の堆積層から出土。ほぼ完形に残存する一木作りの鋤である。身の右刃先が破損するとともに火をうけて炭化しており、先端部は使用による磨耗が顕著である。身の肩部の右側が左側に比べやや大きくつくられている。これは、右足を効き足とする使用者が踏み込みをおこなうためのものかもしれない。樹種はアカガシ。　　(若林)

191



191 田下駄　　弥生中期

巨摩遺跡　　(ℓ27.8・W13.0)　　文献.64

沼状遺構下層から出土。水田で足が沈まないようにするための農具である。厚さ1.2㎝の大略方形の板に鼻緒の孔を4孔穿つ。樹種はクスノキ。瓜生堂遺跡では4点出土しており、すべてクスノキを用いる。田下駄はこの板状のものと、輪カンジキ型のものとに分類される。同様な農具に「大足(おおあし)」があるが、これは代掻(しろか)きと緑肥を踏み込むためのものである。　　(小野)

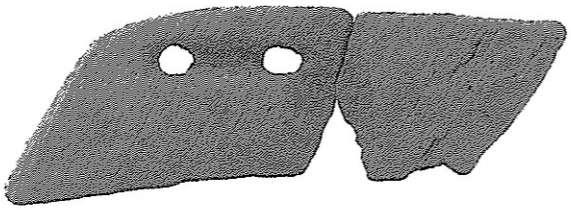
192

192 橇(そり)　　弥生中期

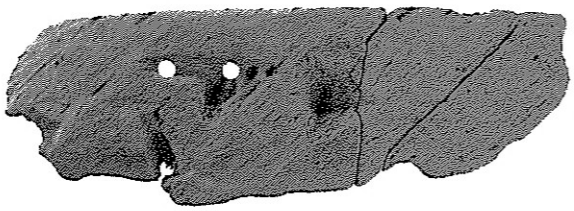
瓜生堂遺跡　　(L77.4・W20.7)　　文献.59

溝から出土。従来は用途不明品としていたもの。小形のものは『木器集成図録 近畿古代編』ではコテとしている。木器集成研究会において芋本隆裕氏が、民族例などから橇の滑走部であろうと提唱された。本例は当時類例として位置づけられたものの一部である。上部にある2箇所の凹みに桟木(さんぎ)を渡し、2つの滑走面をもつ橇を構成する。樹種は二葉マツ。　　(村上年)

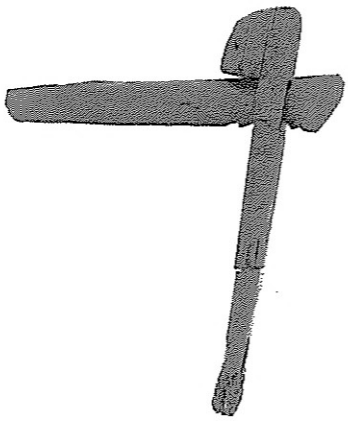
193



194



195



196

193 木庖丁（もくぼうちょう） 弥生中～後期

巨摩遺跡 (L11.6・W4.1) 文献.64

河川が流れなくなって、沼状に淀んだところから出土。流れ込んで堆積したものと推定される。形状は石庖丁と同じで、長辺に刃を付け、平行する位置に紐孔を2箇所あけている。紐孔は、片面に溝を彫り、溝の両端に孔を開けている。正目板を使用している。木取りは木目が長辺に対し斜めになるように加工し、摘む能力を高めている。樹種はコナラ。 (玉井)

194 木庖丁 弥生中～後期

巨摩遺跡 (ℓ17.5・W6.1) 文献.64

出土状況、形状、材質ともに193と同じであるが、大振りである。木庖丁は近畿地方を中心に数十点見つかっている。形状はいずれも同じで、使用痕があるものもある。石庖丁と並用されていたと考えられる。出土点数が少ないのは腐りやすい木製品のためか、特別なことにのみ使用したため製品がもともと少ないのか、検討する必要がある。樹種はコナラ。 (玉井)

195 木鎌 弥生後期

西岩田遺跡 (身L24.4・柄ℓ30.5) 文献.79

後期末の河内湖に注ぐ河川の河口周辺の流水堆積層から、多数の木製品や自然木とともに出土。カシ材の鎌をクリ材の柄に着装している。着装部分を固定するために植物繊維で縛っていた。鎌の刃は直刃で鋭い。柄の下端部は欠損しているが、ほかの例からみて突起が作られていると考えられる。木製のため祭祀具ともいわれるが、この時期は実用品と考える。 (石神)

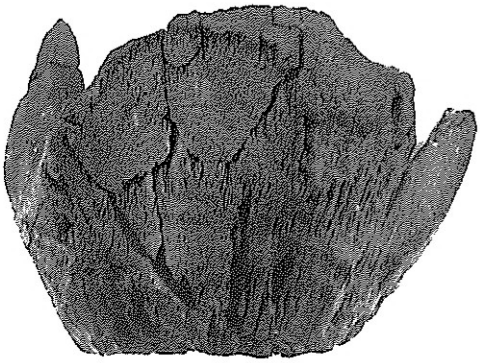
196 杵 弥生中期

瓜生堂遺跡 (ℓ136.6・MD8.8) 文献.59

中期の土坑から出土。杵の握り部中央に節帯が膨らみ単節式らしい。搗（つ）き部から握り部へ段がなく緩やかに細くなる。両端のうち片側は平坦で、もう片方は尖るようだが欠けている。

竪杵は握り部の節帯で分類し、二節式と単節式と無節式がある。中期には二節式が主体を占めるようである。 (入江)

197



197 臼状木製品　　弥生中期

瓜生堂遺跡　　(BD9.2・h12.7)　　文献.59

溝から出土。溝の年代は中期後半であるが、方形周溝墓築造以前の中期遺構面に属する。

本例は平底の甕状品の底部が残っているにすぎず、全体の形はわからない。底部はわずかに上げ底状になっている。臼と考えられるが、そうすればかなり小形のものとなる。

(岩崎)

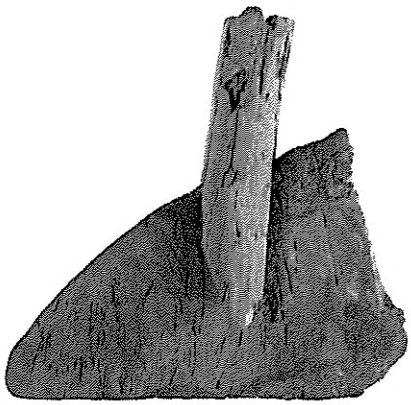
198

198 櫂(かい)　　弥生後期

西岩田遺跡　　(ℓ79.2・W22.0)　　文献.79

後期末の河内湖に注ぐ河川の河口周辺の流水堆積層から、多数の木製品や自然木とともに出土。櫂は14点出土しておりそのうちの1点。これは柄と水かきを一木でつくる一木式の櫂であるが、柄の上半部は失われている。樹種はヒノキ。櫂やアカカキ等の船用具が数多く出土しており、河内湖における船運の発達をうかがい知ることができる。　(石神)

199

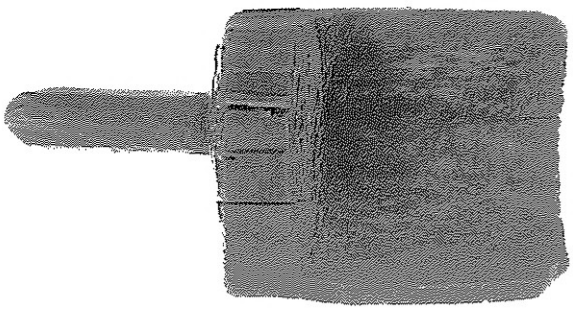


199 舵(かじ)状木製品　　弥生後期

西岩田遺跡　　(ℓ32.5・W22.0)　　文献.79

198と同様、後期末の流水堆積層から、多数の木器、加工木、自然木とともに出土。厚みのある三角形状の板(クスノキ)に、ニレの丸木を割り裂いて挟みこみ組み合わせたものである。丸木のあたる部分は強く挟まれた痕跡が残る。198の櫂や200のアカカキ等の船用具が数多く出土しており、この木製品も舵としての機能を考えたい。　(石神)

200

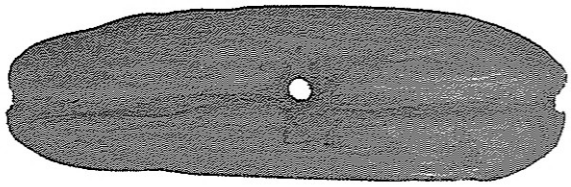


200 アカカキ　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　(ℓ26.9・W13.9)　　文献.59

河川から出土。有形民俗文化財にアカカキやアカトリとされるものがある。出土時には、全く用途が判らなかった。その時、だれかが瀬戸内民俗資料館で類似のものを見たという声をあげた。それを受けて民具の資料を調べてみた。アカカキとよばれる、船の底に溜まった海水を汲みだす道具であった。民具例では杓すくいとすることもある。樹種はヒノキ。　(村上年)

201

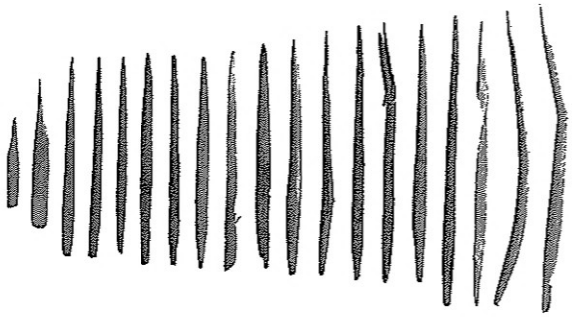


201 浮子（うき）　弥生前～中期

新家遺跡　(L13.8・W4.3)　文献.88

T.P.－2.0～－2.2mに堆積した茶黒色粘土層から出土。同層からは、土錘や弥生土器も出土。長楕円形をしており、中央部には丸い小孔があく。表面には、長軸方向の中央に溝をつけ、両端部までいたる。裏面は、鋭利な刃物で削ったと思われる面がみられ、部分的に炭化する。樹種はスギ。現在使われている網浮子と比べると、全体の形状は大きく変わらない。（国乗）

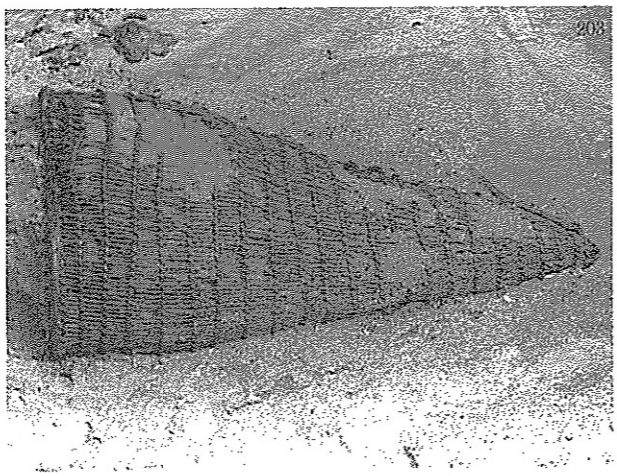
202



202 ヤス　弥生前期

山賀遺跡　(右端:L10.7・MD0.6)　文献.83

包含層や溝、河川から、総計19本出土。全長は9～20cm位で、縦に削った加工痕が明瞭にみられる。真直なものがほとんどだが、やや湾曲したものもあり、民俗例からも数本束ねて装着して使用したと考えられる。しかし、装着跡はみいだせなかった。先端を炭化させ、強度をもたせているものもある。樹種は1本がモミで、ほかはヒノキ。（玉井）



203 筌（うけ）　弥生前期

山賀遺跡　(L78・W30)　文献.83

川の堆積砂の中に、ほぼ完全な形のまま埋まっていた。砲弾形をして、広い口の内側には返しが付いている。カヤノキの四方に分かれた小枝を骨にし、蔓（つる）で編みあげている。縦棒の本数を変えることによって、目の粗さを調節している。大きさから、中・小形の淡水魚を採っていたと推察される。魚の取り出し口が民俗例と異なる。最も古い出土例である。（玉井）

204

a

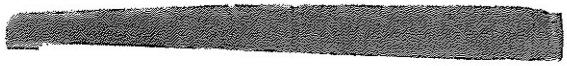
b

204 弓　弥生中期

亀井遺跡(a)・瓜生堂遺跡(b)　(a:ℓ72.2,b:L97.2)　文献.59・101

aは大溝下層から数多くの遺物とともに出土。弓幹の途中で折れ一端を欠く。全体を加工し、中央と端部の2箇所に樹皮を巻き、黒漆を塗って仕上げる。端部の弓弭（ゆはず）は細く削り出し、紐かけ痕が残る。bは包含層の黒褐色粘土層からほぼ完形で出土。端部の弓弭は舌状に削るが、弓幹は所々に節がみられ自然木をうまく利用する。樹種は、aは未鑑定、bはカヤ。（国乗）

205

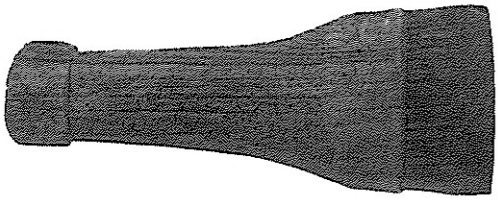


205 鞘（さや） 弥生中期

瓜生堂遺跡 (L21.6・w2.0) 文献.59

方形周溝墓の周溝から出土。鞘の四半部分である。内面に両刃の剣を収めた凹みがあり、先端部の小孔と外面中央の細い溝を用い、同様のもう１枚と合わせて１本の鞘とする。外面下半部には、細線で刻まれた斜格子文様帯と小さな鋸歯文状の浮き彫りを施している。内面の凹みがやや深いので鉄剣ではなく、銅剣ないし石剣用であろう。 (大谷)

206

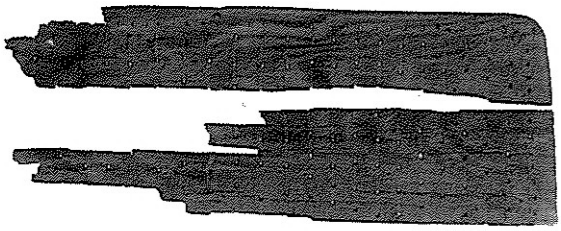


206 剣把（つか） 弥生後期

瓜生堂遺跡 (L8.6・W3.6) 文献.59

後期の河川から出土。鉄剣か銅剣を差し込む一木の剣把装具である。把頭（つかがしら）は小さく、把間（つかあい）が一層幅と厚さが小さく、把縁へと幅を増す。把縁は剣を挟むために２つに割れ、把間の中に茎を差し込む。片手で握る刃渡りの短い剣を着装していたようだ。装飾もなく、実戦用の可能性がある。このように弥生時代の金属製利器は、祭器と武器が両者併存する。 (入江)

207

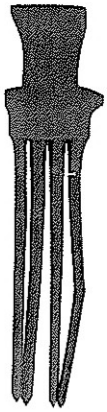


207 盾 弥生後期

亀井遺跡 (ℓ37.6・w14.8) 文献.67

溝から出土。従来は用途不明品としていた製品。これも、芋本隆裕氏が民族例などから盾ではないかと提唱したもの。本例は、内側にピッチの狭い水平な孔列が、20列程度残存している。二辺の周囲には縁取りのための孔列が施されている。孔列には紐などを綴じ合わせた痕跡が残存する。この紐列が衝撃で割れるのを防ぎ、盾の機能を果たした。 (村上年)

208

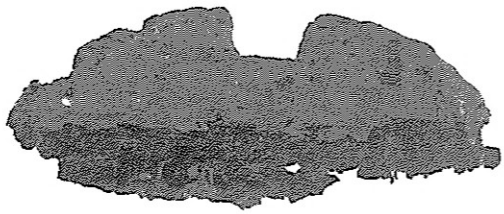


208 竪櫛 弥生後期

巨摩遺跡 (L13.5・W4.4) 文献.64

後期の灰黒色粘土層上面から出土。一枚の板に刻みを入れ、頭部と断面六角形に近い４本の歯を作る。頭部（ムネ）には左右からの抉り込みがあり、部分的に丹塗がみられる。歯の付け方から刻歯（こくし）式と呼ばれる。この製作技法は、福井県鳥浜貝塚出土の日本最古（縄文前期）の櫛と同じで、鋸出現以降は歯を挽（ひ）いて作りだす挽歯（ひきば）式に受け継がれる。樹種はカヤ。 (本間)

209

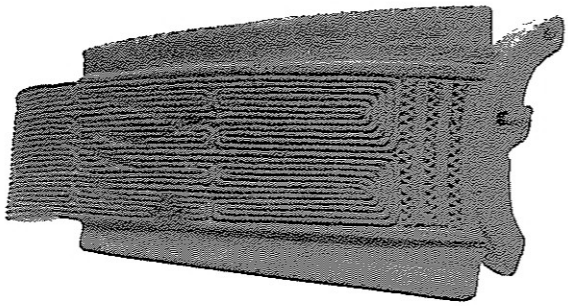


209 竪櫛　　弥生後期

池島・福万寺遺跡　（ℓ2.3・W5.7）　文献.356

後期の水田面を覆う洪水砂から出土。竪櫛の頭部（ムネ）にあたり、全体に赤彩が施される。ムネの上部には横方向に糸が、下部には歯を結束していた糸の痕跡がX字状に連なる。脱落した10本の歯は、断面円形でその径約3㎜。歯材を結わえてつくる、このような単純結歯式竪櫛は縄文時代からの伝統をひくが、これはその系列では比較的新しい例である。　（本間）

210

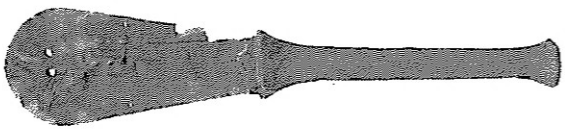


210 冠状木製品　　弥生中期

亀井遺跡　（ℓ12.0・W6.7）　文献.101

204-aと同時に出土。両端とも欠損し、残りは半分以下。中央部には円形の飾り、その両側には帯状の文様を施し、冠のような形となると推定される。文様は、中央部近くに鋸歯文が3条と、それに直交するかたちで流水文が陽刻される。内外面は黒漆を塗り、樹種はケヤキ。流水文の形状が最古の流水文銅鐸とされる滋賀県新庄鐸と同一なのが注目される。　（国乗）

211



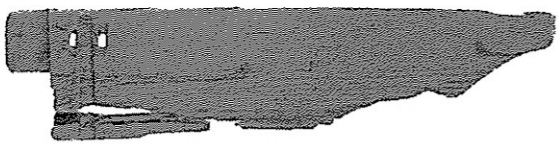
211 団扇柄　　弥生後期

新家遺跡　（L30.7・W7.0）　文献.142

河道の灰色粘土層から出土。近くで朱を塗布した用途不明の木製品も出土した。団扇の柄と要部分である。要に孔があけられ、柔らかいものを括り付けて使用した。個人で使用するのが団扇、これに似たもので待人が持つのが翳である。この団扇の出土は貴人層の存在を示しているのかも知れない。樹種はイヌガヤ。

（入江）

212

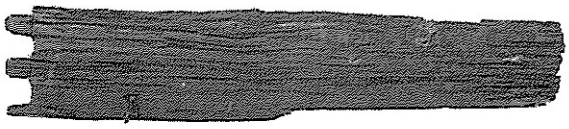


212 琴　　弥生中期

巨摩遺跡　（ℓ54.9・w14.9）　文献.64

沼状遺構から出土。一枚板ではなく共鳴箱（槽）の付くタイプである。板の一面に龍角（弦を浮かす）をはめ込む溝、他面は側縁をわずか残してくぼめる。短辺の尾部には櫛（弦を張るための突起）の痕跡が残る。弦は4～5弦であろう。沼状遺構や方形周溝墓の存在を考えると、水辺や墓前の祭祀に使われたであろう。類例は福岡県辻田遺跡にある。樹種はモミ。　（小野）

213



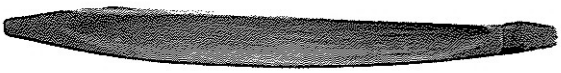
213 琴　　弥生後期

新家遺跡　　（ℓ68.4・w4.1）　文献.142

後期の河川によって上流から運ばれ、澱みに貯まった多くの木製遺物とともに出土。琴は胴部の断面形から、槽作りと板作りとに大きく区分できる。この琴は槽の部分が欠損しており上板を残すのみであるが、槽作りの琴であり、弥生琴と呼ばれている。小孔が数個穿たれており、その1つには蔓が残っている。槽を取付ける孔か補修孔であろう。　（佐伯博）

214

a



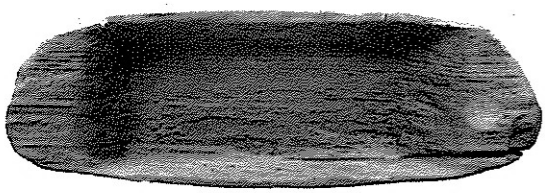
b

214 船形木製品　　弥生後期

新家遺跡(a)・西岩田遺跡(b)　（a:L7.1,b:L8.0）文献.79・142

ともに遺構に伴わずに出土。aは完形で、舳(みよし)と艫(とも)の区別は不明瞭である。bは一側面を欠いている。船首を浅く削って溝を一段低く作り出しており、準構造船あるいは構造船を模したものとみられる。当時両遺跡は河内湖縁辺に位置しており、船形を使っての水辺での祭祀がおこなわれていたとも考えられる。樹種は、aはスギ、bはヒノキ。　（佐伯信）

215



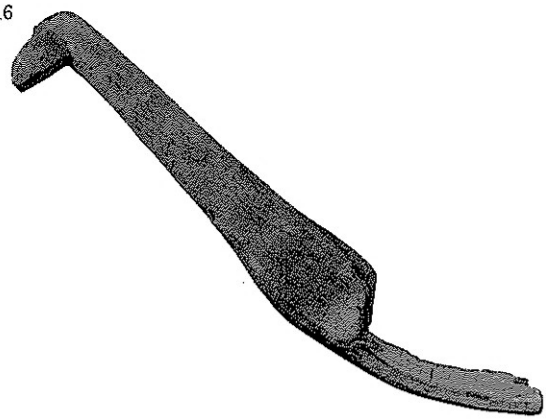
215 船形木製品　　弥生後期

新家遺跡　　（L32.0・W10.6）　文献.142

後期の河川によって上流から運ばれ、澱みに貯まった多くの木製遺物とともに出土。

刃物で木材を刳り貫いて作られた木製の容器で、製作技法から刳物(くりもの)と呼ばれる。断面逆台形の刳り貫きが施されており、底部は丸みをおびた平底である。形が船の胴部に似ていることからこの名前が付く。具体的な使用方法は不明である。樹種はヒノキ。　（佐伯博）

216

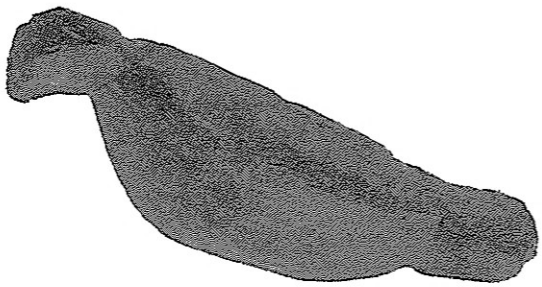


216 鳥形木製品　　弥生前期

山賀遺跡　　（ℓ22.7・W3.6）　文献.82

河川から出土。棒状の鳥形木製品。頭部は割合小さく、頸部より下方に長く表現する。頸部は長く、体部は下方にやふくらみをもたし表現している。尾部は上から2/3の位置まで削りこんでいるが、先端は欠損している。特記すべきことは、尾部において上面に十数条の切り込みを加え、上方に向かいゆるやかに湾曲させていることである。樹種はヤマフジ。　（村上年）

217



217 鳥形木製品　　弥生中期

亀井北遺跡　　(L25.6・W6.8)　　文献.120

自然流路から出土。立体的な鳥形木製品。頭部は冠羽といわれる突起帯を表現している。頸部のくびれを明瞭にあらわし、体部は羽をたたんだ状態で、尾部は弧状にひろがる。体部の下方に穴が穿たれ、棒の先端に装着したであろう。このような、写実的で立体的な鳥形木製品は弥生時代においては、和泉市池上遺跡例と本例のみであろう。樹種はコウヤマキ。　(村上年)

218

218 鳥形木製品　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　(L36.0・W5.9)　　文献.59

河川から出土。板状の鳥形木製品。頭部は、上面と下面の両側から直線的なV字形の切込みを加えることで表現している。頭部の先端は斜めにカットすることによって、頭部らしい特徴を得ている。尾部は上からの緩い斜め方向の加工と、下からの削りで表現される。薄い板に簡潔な加工痕跡で鳥を表現した、稀な遺物であろう。樹種はヒノキ。　(村上年)

219

a

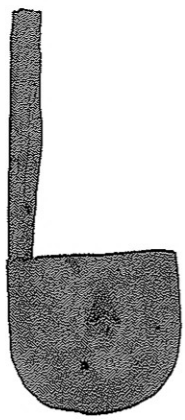
b

219 杓子・匙　　弥生後期

巨摩遺跡(a)・西岩田遺跡(b) (a:L32.7,b:L30.4)文献.64・79

aは後期包含層の暗青灰色粘土層、bは暗灰色シルト層から出土。bの時期は判然としないが後期であろう。aは、断面が偏平な紡錘形の幅広の身と柄とからなり、側面からみると柄と身は真っ直ぐに作られる。ものを攪拌する道具である。樹種はヒノキ。bは、凹面を呈する身に柄が鈍角についている匙の完形品である。　(石神)

220

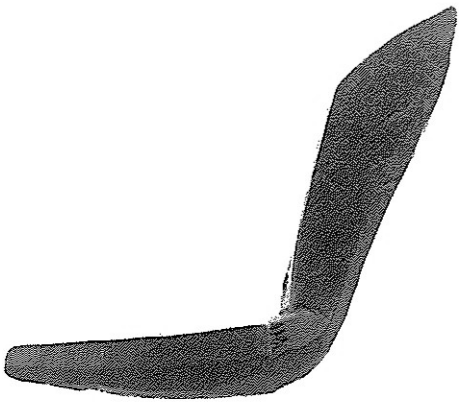


220 杓子（未成品）　　弥生前期

山賀遺跡　　(ℓ20.2・RD8.6)　　文献.83

浅い溝から出土。縦木取りの心持ち材を加工したものである。柄は中途で欠損しており、残存状況から、上方に向かって撥形に開く形態と思われる。身の外側は粗い削痕が残っており、内側は2㎝ほど浅く彫り込んでいる。おそらく製作途中のものであろう。縦杓子のなかでは初期の作品として貴重な資料である。樹種はムクノキ。　(亀井)

221



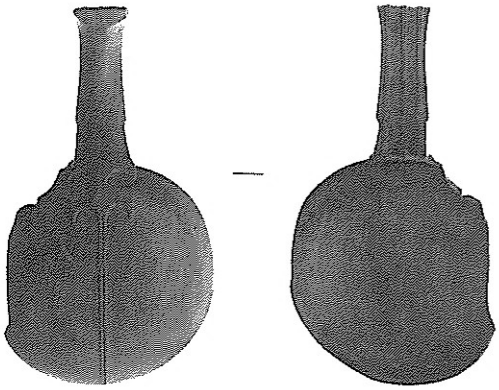
221 匙（未成品）　弥生中期

亀井遺跡　（身L11.6・柄ℓ13.4）　文献.63

井戸から、土器、銅鐸形土製品141とともに出土。身と柄は鈍角(120°)で取りつき、柄はさらに屈曲し先は欠損している。断面形は方形。身の平面形は卵形、上面は平坦で刳り抜かれていない。断面形はカマボコ形を呈する。身、柄ともに工具痕が明瞭に残る。加工しやすいように水漬けにしていたのだろうか。

（寺川）

222



222 杓子　弥生中期

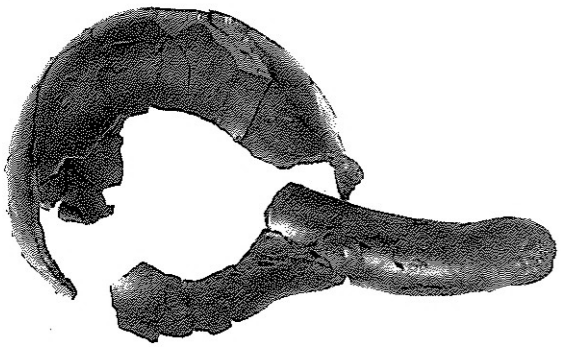
瓜生堂遺跡　（身L17.2・柄L11.5）　文献.59

中期遺構面の溝から出土。

一木作りで、身部に山形に湾曲した柄が付く横杓子である。身部はやや歪な円形で、1㎝程度の厚みを残して刳られている。断面半月形の柄の上面には平行した2連3条の直線陽刻、身部背面には特異な意匠の陽刻が施されている。樹種はシイノキ。

（赤木）

223

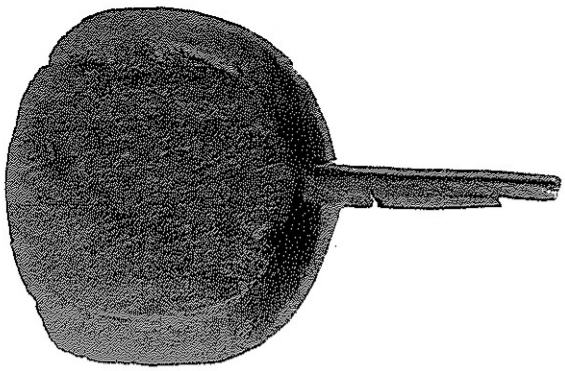


223 杓子（ヒョウタン）　弥生前期

山賀遺跡　（L15.40・W10.2）　文献.83

河川から出土した赤彩文壺(P6)の内部に入っていたヒョウタン。このヒョウタンはくびれ部に穿孔を加え、内部の種子をのぞき去り、杓子として使用されていたものと考えられている。異常に飾られた壺の内部に入れられたヒョウタンの杓子は、「儀式等で使われる特殊な儀器」と想定された。また、通有の赤彩文土器に入っていた、実用的な杓子という説もある。（村上年）

224

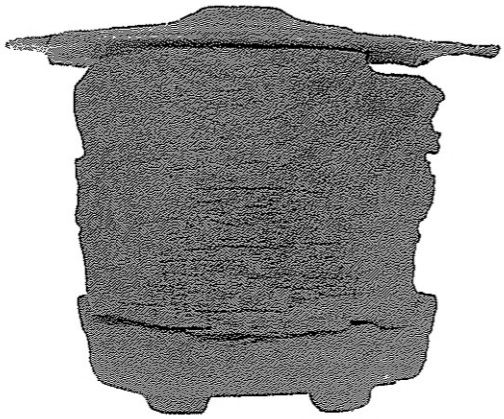


224 片口容器　弥生中期

亀井遺跡　（身ℓ27.0・柄L17.5）文献.67

溝から出土。調査者はフライパン状木製品と呼び、形状から着柄鋤とした。『木器集成図録 近畿原始編』では片口とする。「古代の木の道具展」(文献.392)では杓子とされている。皿部はたんへん浅く、フライパン状木製品とは言いえて妙であった。把手状にみられる部分には樋状の溝が彫られていることから、片口の容器でよいだろう。（村上年）

225



225 四脚合子（ごうす） 弥生中期

山賀遺跡 （身:H12.4・rd12.6） 文献.83

中期の包含層から出土。刳抜きによる一木造りである。外底部には、低い角柱状の脚が4箇所に削り出されている。栓蓋は中央に低いツマミ状部を設けており、また縁の2箇所には突出部を残し、紐通しの円孔をあける。これに伴う身側の孔は、欠損のため確認されていない。木製合子の隆盛した初期の作品である。樹種はヤマグワ。 （亀井）

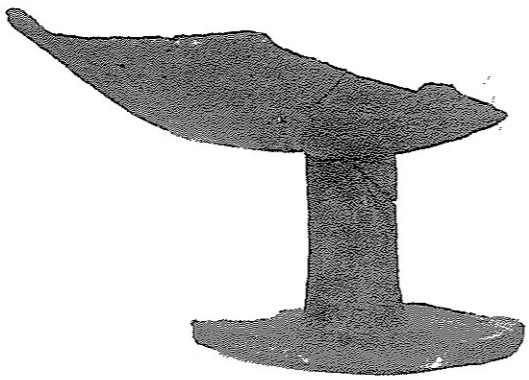
226

226 四脚付台形木製品 弥生中期

巨摩遺跡 （L8.4・W6.8） 文献.64

方形周溝墓の南側の大溝から出土。表面に双頭渦文（そうとうかもん）を線刻し、裏面に1㎝角の低い脚部を削り出す。渦文は2本線で左右対象に線刻される。表面は中央から下半にかけて二次的に削られ、渦文は上部にのみに残る。下半部はかろうじて線が残る。側縁部に突起が存在していたことがうかがえる。同様な文様は四條畷市雁屋（かりや）遺跡の木製容器や、銅鐸の飾耳にみられる。 （小野）

227

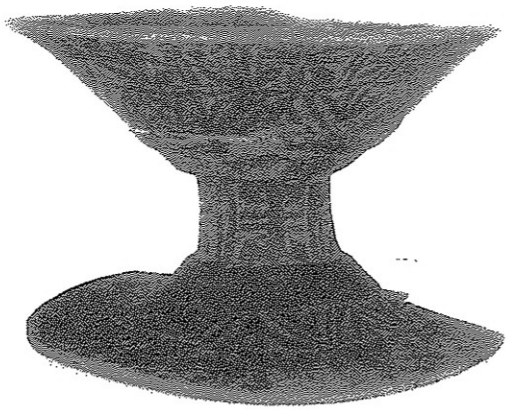


227 木製高杯 弥生前期

山賀遺跡 （rd35.0・H19.6） 文献.83

U字形溝の埋土最上層から出土。横木取りの材を削り出して成形したものである。当期の木製高杯には、ほかに組合せ式がみられるが、本例は杯部と脚部が一体化した一木式である。また、彩文の施される例もあるが、本品にはみられなかったことから、おそらく実用品として製作されたものであろう。樹種はヤマグワ。 （亀井）

228



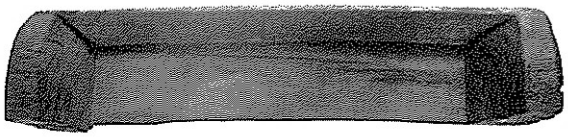
228 木製高杯 弥生前期

池島・福万寺遺跡 （RD23.9・H15.2） 文献.263

前期の洪水によって堆積した砂の中から出土。

一木を削出してつくられており、外面は一度黒く下塗りしたあと、突帯以外の範囲に木の葉を組み合わせたような文様が赤色顔料で描かれ、山賀遺跡彩文壺（P6）と類似する部分が多い。どのように使われていたかは不明であるが、祭祀的な色合いが強い遺物と考えられる。樹種はヤマグワ。 （森本）

229

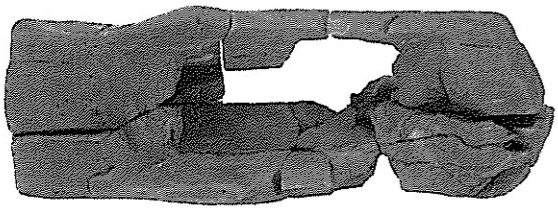


229 木槽（そう）　弥生後期

新家遺跡　（ℓ71.2・w14.7）　文献.142

後期の河川によって上流から運ばれ、澱みに貯まった多くの木製遺物とともに出土。約1/2が欠損しているが、平面形が方形でやや深めの断面逆台形の加工が施されており、底部は平らである。木製容器のなかでも、製作技法から刳物と呼ばれている。底部を木芯に向けた木取りをしている。具体的な使用方法は不明である。樹種はヒノキ。（佐伯博）

230



230 木槽（未製品）　弥生後期

西岩田遺跡　（ℓ56.5・w21.0）　文献.79

流水堆積層から出土。槽と呼ばれる方形容器の未成品。欠損が著しいが、製作工程がよくわかる。全体的に粗い加工を施し、ほぼ大まかな形状はこの時点で整えており、また粗いクリが入っている。右端部には四方から切断のための加工が加えられ、少なくとも二連同時に製作されたといえる。器厚は厚く、これから細部加工が施される段階。（村上年）

231 枠状木製品　弥生中期

野々井遺跡　（ℓ50.0・w45.0）　文献.229

和田川の氾濫原上の溝から出土。

多くの弥生中期の遺物や加工木、自然木とともに出土。用途不明の枠状木製品である。枠材は1㎝前後のもので、枠材には面取りが施されている。

建築部材であるとすれば、壁の一部を構成するものと考えられる。窓あるいは扉状の施設の一部かもしれない。（田中龍）

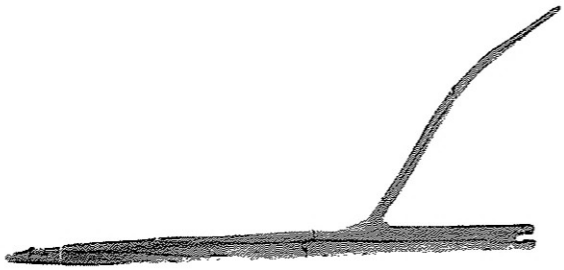
232

232 紡織具　弥生中期

瓜生堂遺跡　（L59.6・W3.2）　文献.59

中期の大溝の南斜面から出土した木製品4点のうちの1点である。径約3.2㎝前後の丸太状に加工し、両端に突起を作りだす。仕上げはあまりていねいではなく、鉄製工具の削り痕が残る。中央部には、軸に直角方向の糸状のものが並んだ圧痕が部分的に残っている。このことから紡織具の一種と考えられるが、詳細な使用法は不明である。樹種はスギ。（岩崎）

233

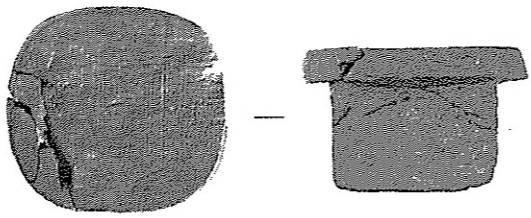


233 背負い具　　弥生後期

西岩田遺跡　　（ℓ79.2・D4.2）　文献.79・392

流水堆砂層上面から、ほかの木製品とともに出土。下端部に握部を作りだし、上端部に枘孔をもち、下半部は右側を削り平坦面にしている。樹枝部分は長く、幹部分より上までのびる。枝払いが施され、全体にていねいに加工されている。出土時は用途不明品として扱われていたが、いまは背負い具材とされる。樹種はサカキ。　（大野路）

234

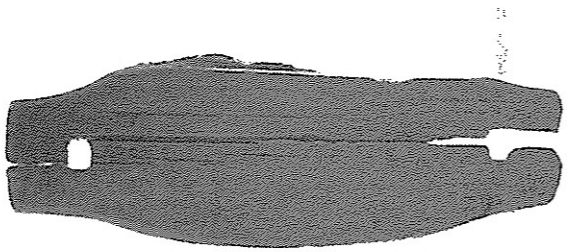


234 椅子（いす）　　弥生中期

西浦橋遺跡　　（W34.0・H17.0）　文献.92

台地西側を流れる第Ⅲ様式の自然河川の杭列周辺から出土。完形品。座板と脚を一木で作りだす。横木取りである。脚は長方形に作られ、両脚の横断面形は「ハ」の字形にふんばる形である。弥生中期までの特徴をよく表す。また、両脚の長さが異なることから川岸などの傾斜地で台として使用したものではないかともいわれている。樹種はケンポナシ。　（石神）

235

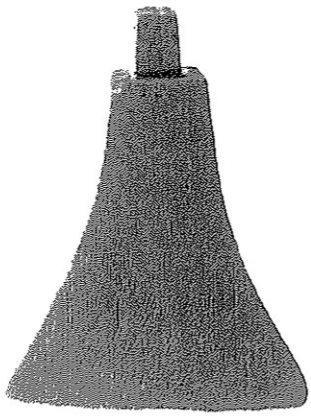


235 椅子（座板）　　弥生後期

新家遺跡　　（L63.4・w21.5）　文献.142

後期の河川によって上流から運ばれ、澱みに貯まった多くの木製遺物とともに出土。上下面とも平坦に仕上げられており、上面周縁は面取りを施している。両端近くに四角い孔が各1つあけられており、脚部をさし込み、椅子として使用されたものであろうか。板材を組み合わせて結合したものを指物（さしもの）といい、弥生後期以降に盛んに作られる。樹種はヒノキ。　（佐伯博）

236

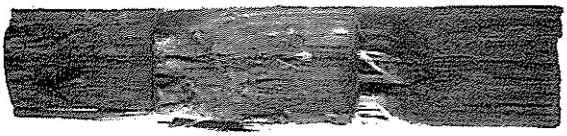


236 椅子（脚）　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　（L20.8・W15.6）　文献.59

河川から出土。組み合わせ式の指物で、腰掛の脚である。脚は、「ハ」の字状に曲線を描きつつ外側に開く。上部の腰を受ける座板が欠損する。腰掛は座板の中央がくぼむものと平坦なものに分かれる。ひじ掛けをもつ例もある。脚部も直線的なもの、曲線を描いて開くものがある。構造的にも、指物と一木作りの技術差がある。樹種はヤマグワ。　（入江）

237

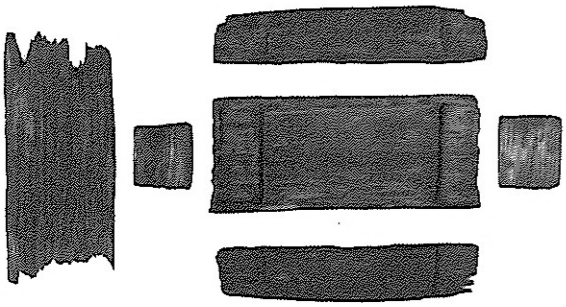


237 梯子（はしご） 弥生後期

新家遺跡 （ℓ83.7・W18.0） 文献.142

後期の河川によって上流から運ばれ、澱みに貯まった多くの木製遺物とともに出土。足掛けを作りだした一木梯子で、垂直に立てると足掛けの部分が水平になるよう作られている。足掛けは2段あり、その間隔は約30㎝である。最近、一木梯子が貯蔵穴内に立てかけられたままの状態で出土しており、その使用方法は明確に証明されている。 （佐伯博）

238

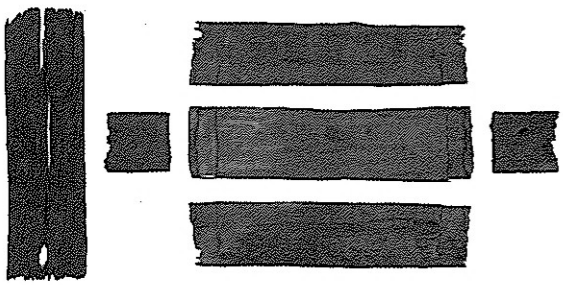


238 木棺 弥生中期

瓜生堂遺跡 （中央:L174.0・W54.0）文献.64

方形周溝墓の土壙から検出した幼児木棺である。棺は、底、側、小口、蓋の6枚の板を組合わせる。底板の小口部に溝を施し、溝には小口板が入る。側板は小口板のあたる箇所を段状に削り、底板に乗る。材はすべてコウヤマキである。人骨やほかの遺物は残っていない。同墓ではほかに木棺(人骨遺存)と壺棺が存在するが、本木棺はこれらの棺より下層にあたる。(小野)

239

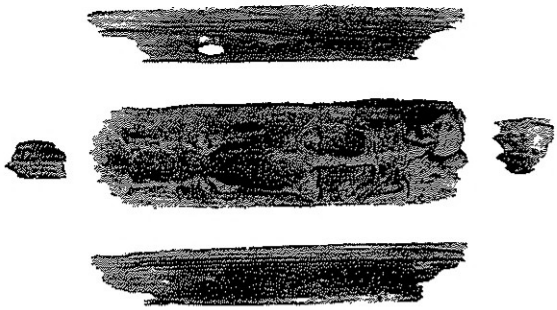


239 木棺 弥生中期

瓜生堂遺跡 （中央:L198.0・W55.0）文献.64

方形周溝墓の中央に位置する。238例と同様に6枚の板を組合わせ、形状も同じであるが、大人用の木棺である。材はすべてコウヤマキである。238検出墓とは同じ周溝墓群に属する。人骨や副葬品は全く見当たらない。ただ238検出方形周溝墓の別の埋葬施設やまたほかの方形周溝墓では石鏃が出土しており、前者は頸骨に後者は上腕骨に射込まれていた。 （小野）

240



240 木棺（人骨遺存） 弥生後期

巨摩遺跡 （中央:L175・W52） 文献.359

後期の方形周溝墓に埋葬されていた木棺と人骨である。木棺は厚さ3～5㎝のコウヤマキの板材を組合せたものであり、両側の短辺を浅く削り凹めた底板上に側板と小口板をのせるタイプである。人骨は分析によって成人男性と推測されており、顔面には赤色顔料が塗付されていた。当時の埋葬方法を知る貴重な手掛かりとなる資料である。 （亀井）

241

241 鹿角製ハンマー　弥生中期

亀井遺跡　（ℓ24.2・W4.6）　文献.101

大溝から、多量の第II～III様式の土器、石器、柄に着装されたままの太型蛤刃石斧、木製農耕具や容器、人骨等とともに出土。ニホンジカの成獣の右角の落角を素材とする。第1枝は抜け落ち痕跡が穴として残る。第2枝以上は切断し、柄は鹿角幹部を鋭利な金属の工具で加工整形して作りだしている。鹿角角座には使用による打痕が著しい。（石神）

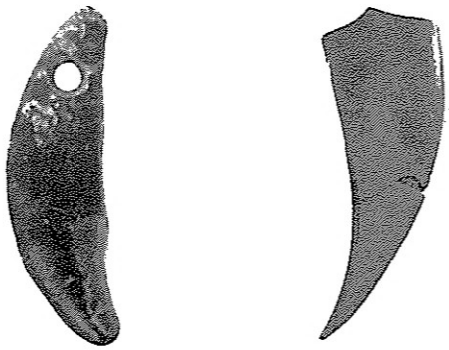
242

242 鹿角製紡錘車（ぼうすいしゃ）　弥生中期

亀井遺跡　（D5.0・T0.7）　文献.71

中期包含層から出土。鹿角で最も大きな径をもつ角座の部分を輪切りにしたものを素材としている。径6.2㎜の穿孔が両面からおこなわれ、両面と側面はていねいに研磨されている。当遺跡では、ほかに2点の鹿角製紡錘車が出土しているが、いずれも表面がていねいに研磨されていることから、儀礼的な色彩をもった遺物かもしれない。（若林）

243



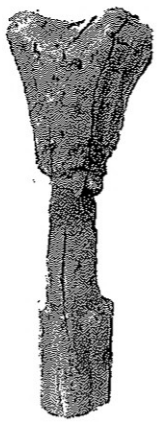
a　b

243 牙製垂飾（すいしょく）　弥生中期(a)・後期(b)

亀井遺跡　（a:L3.3,b:ℓ4.8）文献.63・86

aはIII～IV様式の土坑から出土。舌側のエナメル質が擦り減り、象牙質のみが残る。孔は両側から穿孔している。素材はイヌの右上顎犬歯である。bは中期後半～後期の井戸から出土。上半部を欠失し、両側面を加工して先端を鋭くしている。イノシシの下顎犬歯である。両例ともに縄文時代からの伝統を引き継いでいる。（畑）

244



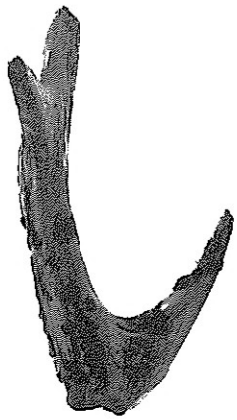
244 儀杖（ぎじょう）形鹿角製品　弥生中～後期

亀井遺跡　（ℓ11.1・W4.2）　文献.86

中期中頃～後期前半の包含層から出土。鹿角の上下を切り、中央部を細く削り、下方をソケット状に内部を削っている。中央部とソケット状部の裏面に5条と1条の線刻を施す。

弥生時代に儀杖が存在していたとすれば、首長をめぐるイメージが、より一層古墳時代に近いかたちのものとなろう。（畑）

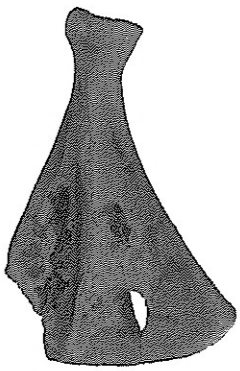
245



245 鉤形鹿角製品　　弥生中期
亀井遺跡　　(L17.9・D3.5)　　文献.86

土坑から出土。鹿角の分岐部を平滑に削り鉤形に仕上げている。鉤状の尖部は、上部にも90°角度を変えて作られている。自在鉤と考えられるが、いずれの尖部の先端も磨耗が顕著なことから、この部分を被加工物に接する状態で使用された道具とも考えられる。後者の場合、石器の押圧剝離用工具の可能性も考えられよう。　　(若林)

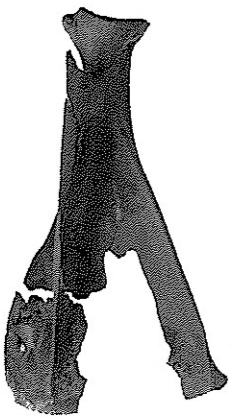
246



246 卜骨　　弥生中期
亀井遺跡　　(L10.6・w7.0)　　文献.86

溝から出土。イノシシの右肩甲骨を素材としているが、小形であるため幼獣骨を利用したと考えられる。肩甲棘のある面から3箇所、その裏の肋骨面から2箇所焼灼されているが、そのなかで1点は表裏両面から同一箇所を焼灼している。またこれら焼灼面は全体に薄く削られていて、卜占行為の過程の復原や類推に役立つ。　　(若林)

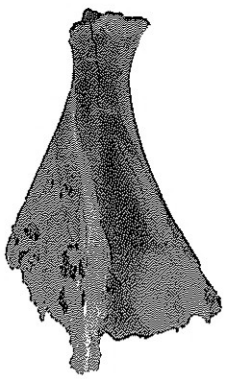
247



247 卜骨　　弥生中期
亀井遺跡　　(L18.2・W9.8)　　文献.86

土坑から出土。中央下半部が欠損するが、ニホンジカの右肩甲骨が素材である。肩甲棘とその下面に8箇所、肋骨面に1箇所の焼灼点が確認できる。これら焼灼点の周囲は高温のために白く変色している。また、関節部には解体に伴う刃先痕が顕著である。248と同一遺構から出土しており、両者は同一祭祀に用いられた可能性が高い。　　(若林)

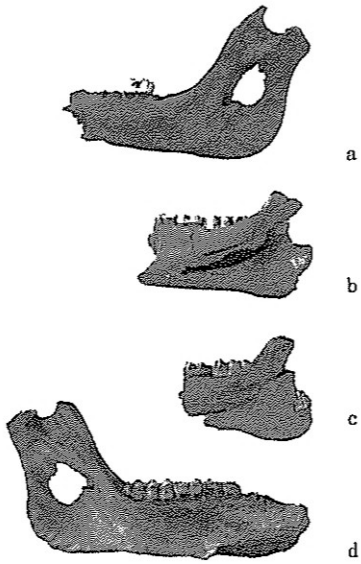
248



248 卜骨　　弥生中期
亀井遺跡　　(ℓ12.3・w6.3)　　文献.86

土坑から出土。卜骨下半部は欠損しているがイノシシ右肩甲骨が素材である。肋骨面に削痕のみえる部分に1箇所、焼灼点とそれに伴う亀裂が確認できる。本遺構は中期中葉の大形井戸と考えられ、多量の遺物が廃棄されている。もう1点卜骨(247)が伴うことから、これらの廃棄遺物が卜占に伴う祭祀に使用された可能性が考えられる。　　(若林)

249



249 イノシシ下顎骨

弥生中期

亀井遺跡　(a: ℓ15.8, d: ℓ18.2)文献.86

後期後半の溝から出土。この下顎骨は祭祀のために使用されたものと考えられている。

aは、4番目の前臼歯を残し前の部分を失っている雄の下顎骨で、顎骨の部分に径19.8×30.8㎜の楕円の孔がある。b・cは、右下顎骨片で解体の痕跡が残るものである。dはほぼ完全な左下顎骨で、顎骨の中央に径28×32㎜の孔をあけている。　(山口)

250

250 イノシシ頭蓋骨

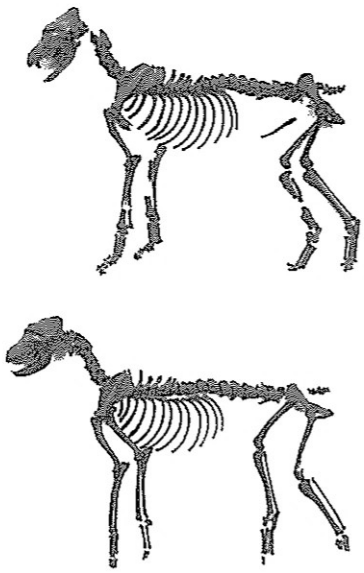
弥生中期

亀井遺跡　(L10・W32)　文献.86

中期の遺構から出土。現在の生息している丹波篠山(ささやま)産のイノシシと比較すると、約 1.5～ 2.5才ぐらいの年齢であると考えられる。下顎骨祭祀と同じような性格の遺物であろう。このような若獣を用いることに、祭祀における重要な意味があると考えられる。

(山口)

251



251 イヌ骨格

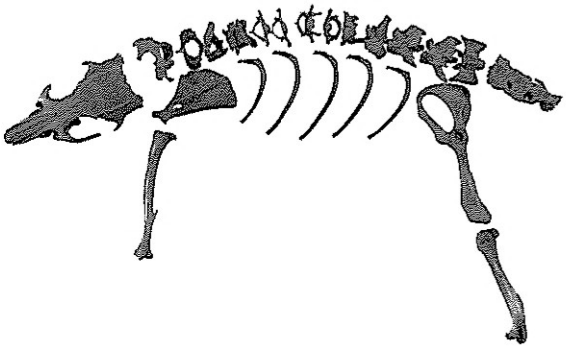
弥生中期

亀井遺跡　(a: ℓ85, b: ℓ84)　文献.67

溝から出土。この2頭は頭蓋の形質、ペニスボーンの有無から、雄(a)と雌(b)であると思われる。出土状況から2頭同時に溝に投げ込まれたものと考えられ、弥生時代の家犬に対する精神面の一端を示す好資料といえる。また、この2頭の全身骨格は、弥生時代のイヌの骨相を知るうえで貴重な資料といえる。

(野田)

252



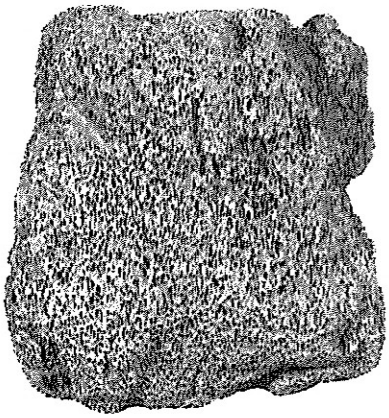
252 ネズミ骨格　　弥生中期

亀井遺跡　　（ℓ11・w7.5）　　文献.71

溝からまとまった状態で出土。

ところどころ骨がないのは、自然条件により移動したものと思われる。当遺跡からは多数の動物骨が出土している。これらは、弥生人の食生活に関する貴重なデータを提供してくれる。ネズミも弥生人の食卓にのぼった可能性もあるが、この場合はあやまって溝の中に落ちたものと思われる。　　（野田）

253



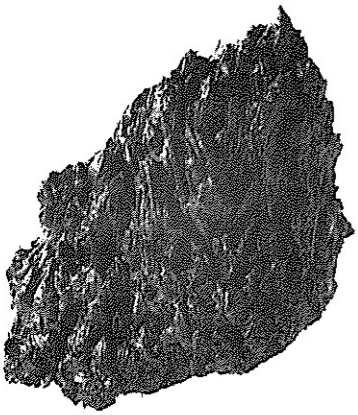
253 クジラ脊椎骨（せきつい）　　弥生中～後期

亀井遺跡　　（L50・W65）　　文献.71

溝から出土。

クジラの脊椎の骨で、弥生人の食生活を考えるうえで貴重なデータとなっている。なお、河内平野に広く海が入り込んでいた縄文時代には、マッコウクジラが入り込んだと考えられる出土骨が、生駒山西麓の東大阪市布市町から発見されている。当時の生活環境を考えるうえでも重要である。　　（山口）

254



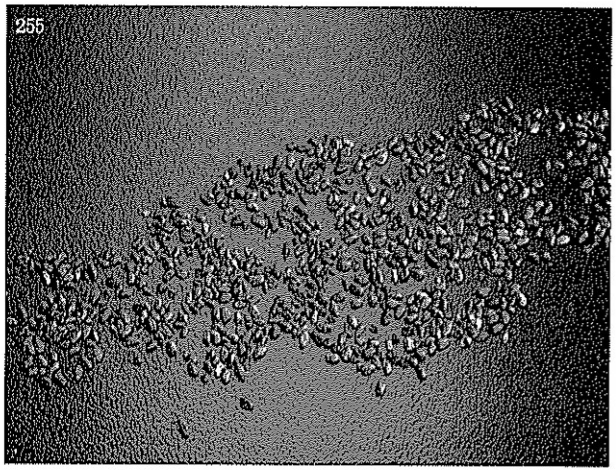
254 炭化米　　弥生前期

若江北遺跡　　（ℓ13.0・w5.0）　　文献. 71

水田耕作土壌内から出土。

本例のように、弥生時代の土器内部に厚くこげていた米や、大きな塊で出土する炭化米はしばしば検出される。炭化米の籾殻などのくわしい組織観察から、食料生産に関する貴重な情報を、この遺物は提供している。

（山口）



255 炭化米　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　　（米粒:L0.4・W0.7）文献.357

前～中期水田面の水田域脇の微高地で検出した、土坑と落ち込みから出土。総数は約1500個にのぼり、なかには火を受けてふくらんでいるものもある。

この微高地からは石器や石器をつくる時にできた石屑、土器などが出土し、農作業や祭祀がおこなわれた空間であったことがわかる。炭化米も何らかの農作業の結果残されたものであろう。　　（井上）